東方學報 京都第67冊(1995)：408－331頁

Shah–ji–ki Dheri 主塔の遷變

桑山正進

はじめに
Ⅰ．圓形ストゥーパとしての創建
1．車輪構造の意義と傳播
2．車輪構造と舍利室の位置
3．圓形ストゥーパの存在
4．創建年代
Ⅱ．方形ストゥーパの存在と十字形ストゥーパへの變貌
1．發掘時のストゥーパ構成
2．壁面のつくりとストゥーパのかたち
3．基部まわりの塗裝とストゥーパの造り替え
4．圓形稜堡の2時期と方形ストゥーパの年代
5．圍壁の存在と十字形ストゥーパの年代
6．ストゥッコ坐佛とカシミール金銅佛
結論　ストゥーパ形態遷移の概要
附錄　漢文獻のカニシカ大塔

はじめに

Puruṣapura の東ないし東南にはカニシカ所建の大塔があると行歷僧の記錄をはじめとするさまざまな漢文資料が言及する。Puruṣapura はいまの Peshawar であり，その東方に Shah–ji–ki Dheri と命名されたおおきな面積の遺迹がある。カニシカ所建の大塔を Shah–ji–ki Dheri に比定した Foucher (1901：322 f.) を受けて，Spooner による1908年と1909年との冬，そして Hargreaves による1910年の秋と1911年の冬，この4回の發掘がおこなわれた。その報告は次の6點である。

(1) Spooner, D. B., Excavation at Shah–ji–ki Dheri. *Annual Report of the Archaeological Survey of India, Frontier Circle, for 1907–08.* Peshawar, 1908. pp. 17－22.

(2) Spooner, D. D., Excavations at Shāh–jī–kī–Dherī. *Archaeological Survey of India, Annual Report 1908–9.* Calcutta, 1912. pp. 38－59.

（3）Hargreaves, H., Excavation at Shah-ji-ki-Dheri. *Annual Report of the Archaeological Survey of India, Frontier Circle, for 1910–11.* Peshawar, 1911. pp. 12－16.

（4）Stein, A., Excavations at Shah-ji-ki-Dheri. *Annual Report of the Archaeological Survey of India, Frontier Circle, 1911–12.* Peshawar, 1912. pp. 1－2.

（5）Marshall, J., Shah-ji-ki-Dheri. *Archaeological Survey of India, Annual Report of the Director-General of Archaeology, Part 1, 1911–12.* Calcutta, 1914. p. 11.

（6）Hargreaves, H., Excavations at Shāh-jī-kī-Dherī. *Archaeological Survey of India, Annual Report 1910–11.* Calcutta, 1914. pp. 25－32.

（1）が第1回，（2）が第1回と第2回，（3）（6）が第3回と第4回の發掘にかかわり，Stein と Marshall のものは各巻の編者として Hargreaves の發掘の要點を記したものである。これらにより Shah-ji-ki Dheri であらわれたストゥーパは，東西南北にきちんと沿った，一面 54 m（180 ft）の方形平面をもち，各面には約 15 m（50 ft）の長方形の突出部があって，全體は十字形の平面をなしていた。方形の北西外隅では圓形稜堡が出土して，當初は四隅にもこれがあったらしい。方形の內部では中心部から放射狀に出た壁がいくつかあった。ストゥーパの周圍では部分的に煉瓦を敷いた床面が認められ，またストゥーパをはじめとするおおくの小規模な建造物があった。ストゥーパの西側は僧坊と豫想されたが，發掘はその東部のみでおこなわれ，相重なった3時期の遺構があった（圖5）。このようにストゥーパの占める面積は異樣に大きく，Peshawar からの方向，漢文資料に世界最大とうたうなど，カニシカ大塔に規模位置とも十分見合うものであった。ストゥーパの中心部からややはずれて地山のうえでは舍利室と「舍利容器」が發見された。これは，蓋に坐佛と梵天帝釋との丸彫り尊像を，身に王像や日月神，坐佛そのほかの彫像を鑄出し，身と蓋にカロシュティー文字銘を點刻していた。類例のない，これまた異樣な容器であった。當時 Spooner（1912：51 ff.）や Konow（1929）がおこなった銘文の釋讀によれば，これはカニシカⅠ世奉納品ということであったので，遺構の規模，遺物の解釋あいまって Shah-ji-ki Dheri はカニシカ創建の大塔とみなされることになった。

銘文により容器がカニシカ代のものであるからには，鑄出された彫像もカニシカ時代のはずであるが，その後あらわれた彫像の研究は北西インドにおける佛像樣式の展開と必然的に絡むこととなり，カニシカ代か，カニシカ以後かに見解はわかれた。しかし發見から半世紀のち British Museum において補修と20倍大に擴大しておこなわれた文字部分の處理を經た段階で，あらたな釋讀がおこなわれ，カニシカとは讀み取ることができないことやそのほか重要な知見が加えられ，從來の釋讀は完全に無意味となった（Mukherjee 1964；Organ and Werner 1964）。したがって補修と新釋讀後のこの容器に對する見解でこれをカニシカ代にあてるものは Dobbins（1971）以外にはなく（高田 1955；田邊 1987），おおく

は Rosenfield (1967：259－260) のようにフヴィシカ以後にあてるようになり，また Fussman (1987) のように，舍利容器として製作されたのではなく，化粧奩であって，下級の僧たちによる奉納と解釋するもののあらわれた。

發掘以後 Shah-ji-ki Dheri に對する關心はこのように「舍利容器」だけに集中した。遺迹自身に對する再檢討は岸本 (1989) 以外になかった。しかしこの研究も遺迹に限定され，「舍利容器」を遺迹の中でどう位置づけるかという重要な問題に觸れていない。發掘報告の寫眞圖面はともに僅少，記錄も不十分かつ不明晰であったとしても，遺物を遺迹の展開の中でどう位置づけるかという基本的な檢討がなかったのである。遺迹は 1960 年代までは面影をとどめていた。多量の土器片が散亂して全體に赤色を呈していた。80 年代における急激な人口增加はここを完全な村落と化し，いまや遺迹に實際に立った再檢討は望むべくもない。このストゥーパ全體の構造も構成も細部にわたって檢討し，そのなかで「舍利容器」と遺迹の關係をみとどけるためには，殘されたわずかな資料（記錄 44 頁，平面圖 3 枚，寫眞 22 葉）から，できるだけ多くの情報をひきだし，それを現在の知識で解釋するしかない。

ガンダーラの寺迹では，片岩ストゥッコ彫刻はきわめて多量に出土するが，Shah-ji-ki Dheri では數點しか出土していない。ガンダーラの寺院建築はどれも石造りであるが，ここでは用材として煉瓦が隨處に優勢である。ガンダーラとしてはきわめて異常な寺。發掘者もこれに氣づいていたが，ここが平原部にあるため石材が不足していたとしてかたづけてしまった。そうではなく「煉瓦」の用材としての存在はあきらかに時代のおそさからくる。通常のガンダーラの寺とは時期的に一線を劃しているのである。ところが一方で「カニシカ舍利容器」というなんとも古そうなものの出土がある。それなら，この遺迹は新舊取り混ぜの證據がそろっていて，いちどきの建設ではないであろう。どこに古い相があり，なにがあたらしい相か。どのように展開したのか。これをはっきりさせなければ，「舍利容器」もガンダーラ史に乘っては來まい。以上を念頭において古い發掘報告という遺迹をもういちどここに發掘した。その結果のおおすじは，大ストゥーパが，平面形として，まず圓形，ついで方形，最後に十字形という 3 時期を經たことであり，以下の章節は發掘經過の委細である。そうして末尾に漢文資料にあらわれたカニシカ大塔をのべたのは，各時代の實際の姿をそれに直接みることが危險であることを示すためである。なお，檢討をはじめるにさきだって注意しなくてはならないのは，このストゥーパは高さ約 2 m ほどしか殘らず，ほとんど基底部まわりしか發掘ではわからなかったことである。

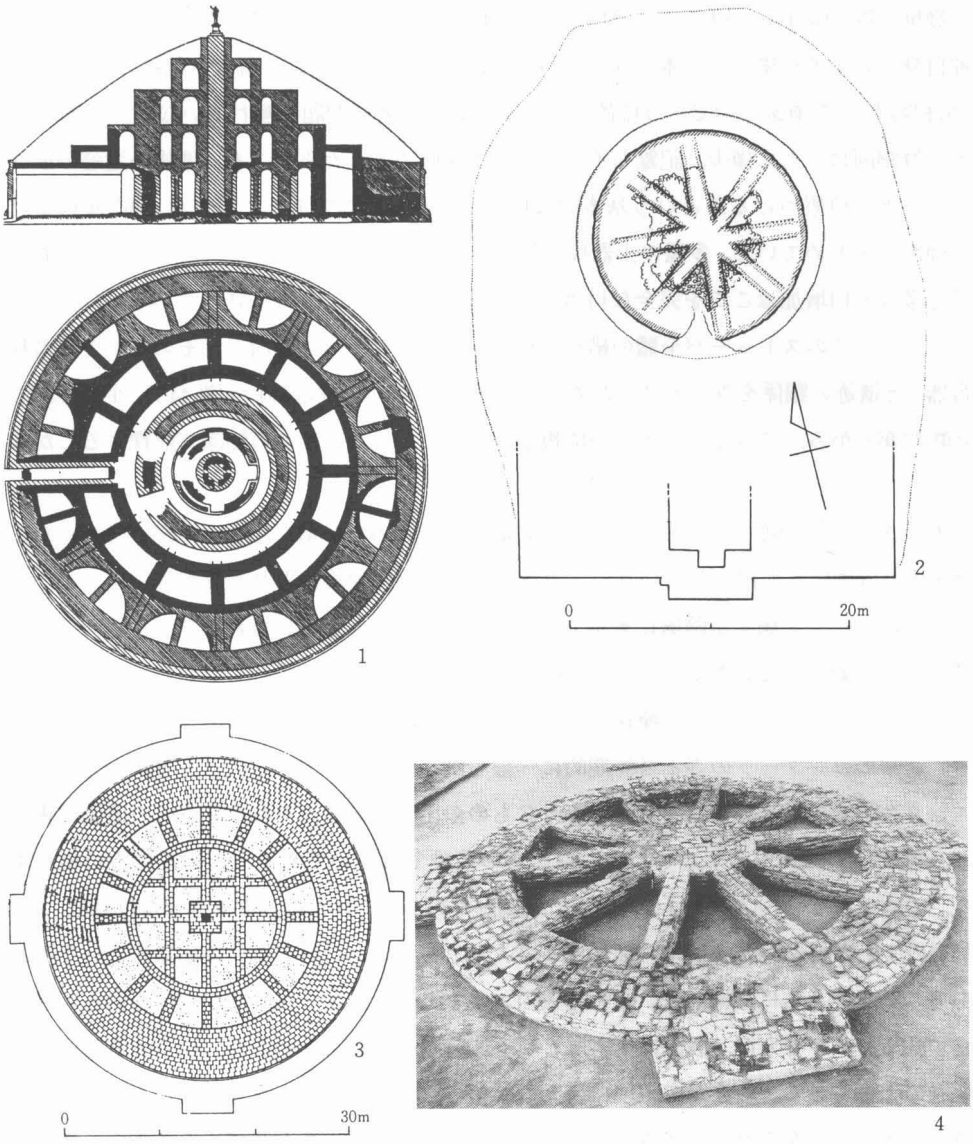


圖1　車輪構造　1．Augustus 帝廟　2．Fīl Khana ストゥーパ　3．Ghantaśālā ストゥーパ
4．Nāgarjunakoṇḍa 第16遺迹ストゥーパ（Sarkar 1962）

Ⅰ．圓形ストゥーパとしての創建

1．車輪構造の意義と傳播

Shah-ji-ki Dheri ストゥーパの中心部に放射壁がいくつかあったことは報告者自身の記述とその平面圖からあきらかである。この壁は，すでに古い過去にたいへんこわれてしまったけれども，中心から放射していて，あたかも車輪の輻のごとくである。このような構造を内部にもったストゥーパはここ以外にも諸例あり，南東インドの，クリシュナ河とゴーダヴァリ河との河口一帯に濃く分布し，1-3世紀に集中して造られた。Nagarjunakonda（圖1：4），Adurru, Alluru, Kodavali, Peddaganjam（Stupa No. 2），Ghantaśala（圖1：3），Amaravati, Salihundam など，あげればきりがない。車輪が軸と輻と輪で成り立っているように，中心から外輪壁に向かって放射狀に壁をつくった構造で，南東インドでは基礎からこれを造りあげて，圓形基壇をつくった。輪壁は極めて厚いのが特徵であり，輪壁を同心圓に複數おく例もある。これをいま車輪構造とよぶ。

西インドの石窟寺院をみると，堂内に岩盤を彫り抜いて造った圓形ストゥーパがあり，それは丈高い一重の基壇になっていて，ストゥーパの基部を高くする形式が流行していたことがわかる（圖2）。圓形の高い基壇は，岩山を刳り貫いたストゥーパや，建築としてのストゥーパでも小規模のものではたやすく得られた。しかし，Vaiśālī（Sinha and Roy 1969）や Pauni（Deo and Joshi 1972）や Bhattiprolu（IA 1974）や Sānchī（Marshall et al. 1940）など1世紀以前の，野外につくった大規模なストゥーパでは，基壇は例外なく低平であり，建築としての大規模なストゥーパではそれを達成することがむずかしかった。基壇を高くしようにも，そうする技術がなかったのである。そういった環境のなかにあって，南東インドにかぎり，はやくとも1世紀には，Ghantaśala（圖1：3）や Amarāvatī（圖3）など，基壇の高いストゥーパが突如集中して出現した。Bhattiprolu など1世紀以前の低平なストゥーパから漸次高大化をうながす技術が醸成されたとは考えられない。基壇が高く

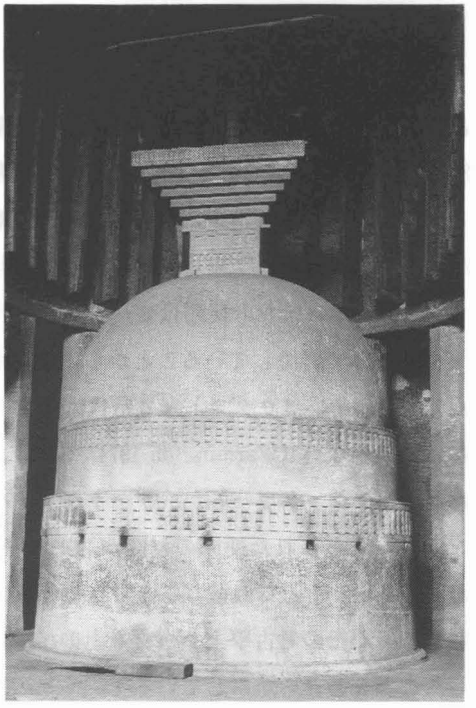


圖2　窟院のストゥーパ，Kārlā（寫眞：桑山）

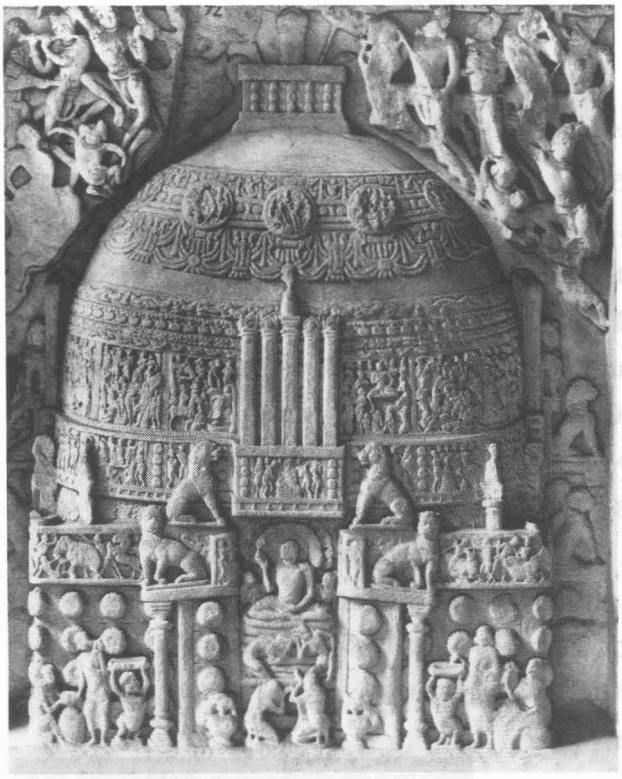


圖3　Amaravati ストゥーパ圖（The British Museum）

なったストゥーパはみな基壇を車輪構造につくっている(1)。輪壁のいちじるしく厚い車輪構造は上部からの壓にじゅうぶん耐えて外壁の割裂と崩壞を防ぐ。この基部構造は低い圓形基壇をえたい場合には不必要であり，高くするのに適している。大規模ストゥーパにおいても，車輪構造という土木技術を1世紀において採用したことにより基壇高大化が可能になったのである。

この土木技術はアウグストゥス帝時代のローマにおいて開發された技術である。この構造がはじめて現われるのはアウグストゥス帝がBC 28年に築造をはじめた皇帝廟である。墓廟はきわめて丈の高い圓筒形の外壁をもち，その內部構造を車輪狀にした，直徑87 mという大建築である（圖1：1）。この墓廟形式はローマ周邊のみならず，西はブリタニアほかローマ北西諸州におよんで圓形墓廟建築の典型となっている（Toynbee 1971）。當時ローマ最大の建築工事はローマ人士の耳目をそばだてていたに相違ない。建設の2年のちB. C. 26年にインド使節はスペインに當時いたアウグストゥス帝にローマを經てスペインまで赴いて謁見していることから，建設途上のこの大建築をインド使節が見聞しなかったはずはない。アウグストゥス帝代にインド使節がおおくローマに至って謁見された記事には事缺かない（Warmington 1974：34 ff.）。インド使節がインドのどの王朝から出ていったか，西クシャトラパ朝か，サータヴァーハナ朝か，殘念ながらこれはわからないが，インドへもたらされた使節の見聞がストゥーパ圓形基壇の高大化要求に答えた可能性はきわめて高い。そんな直截なことでなくとも，南ないし南東インドとローマを結んだ交易に關するいくたの考古學上かつ文獻上の證據は，とくに1世紀においてこの交易が絕頂に達したことをあきらかにしている（Wheeler 1954；Turner 1989；Begley 1991）。これらすべてをむすぶと，ちょうど交易が頂點に達した1世紀において南東インドに車輪構造が集中して

あらわれた事實をよく説明しているのである（Kuwayama：forthcoming；桑山1978：207－210）(2)。

放射壁をもつストゥーパはインドパキスタン亞大陸の北部，マトゥラーからガンダーラにもみられ，マトゥラーではジャイナのストゥーパである Kankali Tila（圖4：上）(Smith 1901)，パンジャーブ北部の Sanghol では大小2基がしられ，ここでとりあげたのはそのうちの第1塔であるが（圖4：下）(IAR 1971－72；IAR 1984－85；IAR 1985－86；Gupta 1985)，いずれも2世紀をくだらない。ガンダーラではタキシラの Dharmarajika 大ストゥーパ（圖16：中段）(Marshall 1912－13；Marshall 1951)，Peshawar の湮滅した Tahkal Bala A ストゥーパ (Errington 1987)，Jalalabad の Fil Khana（圖1：2）(Mizuno 1962) にあり，またタキシラの Sirkap 都市遺迹では Block 1E′にあるストゥーパ (Marshall 1951：183) もこの範疇にはいる。南東インドでは車輪構造は上のようにひとつの形式にくくれるが，北方の例は三つにわかれる。第一には，車輪構造が伏鉢のみにほどこされ，基部からたちあげていないもの。伏鉢は文字どおり鉢を伏せた形であるから當然外輪壁がない。伏鉢の構造に車輪構造はなんら意味をもたない。例は Dharmarajika と Fil Khana。第二には，車輪構造全體が方形の壁の中に入れこになっていて，基礎からたちあげた構造ではあるが，同心輪壁と方形壁とを併用した奇妙な構造。この場合ストゥーパの基壇は方形である。その方形基壇の内部から，基壇以上にあらわれる圓胴部を車輪構造にしてたちあげた。つまり車輪構造は圓胴部の構造であり，圓胴部の下半分が方形基壇のなかに固定されるという形であるから，ここに外輪壁は存在しても，圓形基壇の外壁を補强するという本來の役を果たしていない。例は Sanghol。第三に

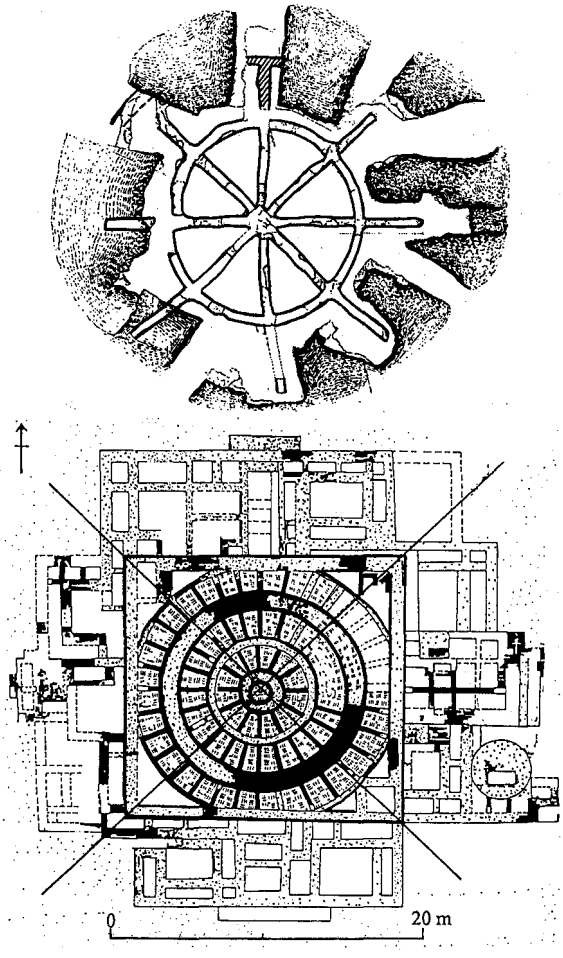


圖4　北部インドの車輪構造　1．Kankali Tilā ストゥーパ　2．Sanghol 第1ストゥーパ（Gupta 1985）

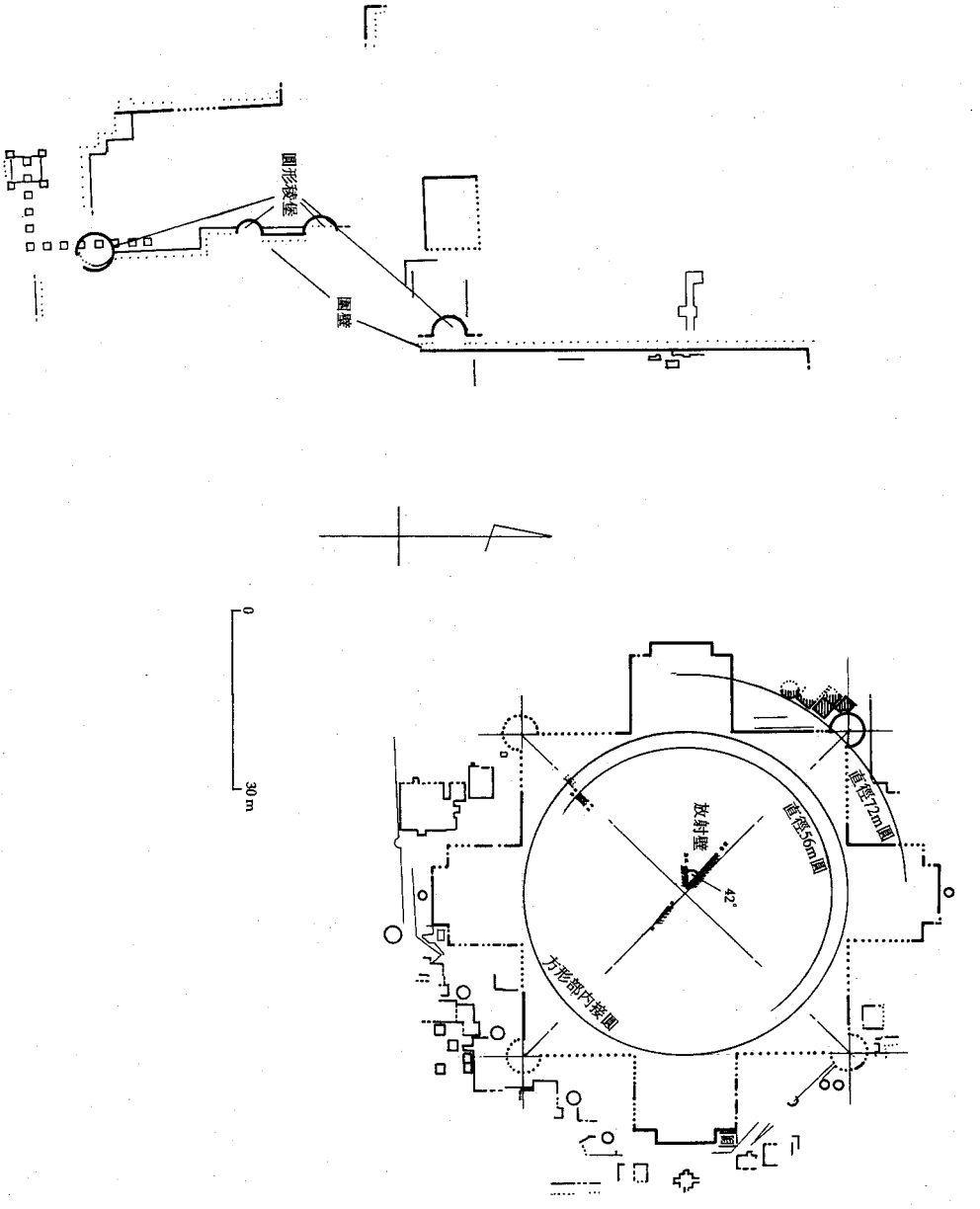


圖5　Shah-ji-ki Dheri 遺迹平面圖（Hargreaves 1914 に從う改描）

は，南東インド諸例と似た構造であるが，外輪壁は放射壁とおなじ厚さであるから，相對的に外輪壁はうすいということになる。これでは丈高のストゥーパはつくれない。例はKankali Tila。

車軸部，放射壁，輪壁，厚い外輪壁をそなえたアウグストゥス廟の車輪構造の意味は，南東インド諸例においてはいかんなく生かされている。しかし，北部の例では肝腎な要素（車軸部や外輪壁）を缺いて形骸化し，本來の意義がまったく理解されていない。ストゥーパの基壇平面形が南東インドでは圓形，北部では方形という，違いがあったにしても，北部では車輪構造というものがなんであったかをしらなかったことになる。だから南東インドこそが第一番にローマからそれを輸入し，北部地方では南東インドを一旦經たうえで導入したことを示唆する。インド內の傳播速度がどれほどのものであったかはわからないが，北部における車輪構造の採用が南東インドより若干遲れたことは否定しがたい。

このように觀るとき，北部地方であるShah-ji-ki Dheriの車輪構造はどのように位置づけられるであろうか。ここでは方形のわくの內部に車輪構造があるのであるから，上にのべた分類ではSangholと同じ範疇にはいる。また放射壁の收斂をみると中心に車軸相當のものがないから，Kankali Tilaともその點似ている。しかし，Spoonerたちの報告を仔細に調べると，Kankali TilaとShah-ji-ki Dheriが共通していて，Sangholと同類だというのは實はみかけだけで，平面圖にまどわされた認識であることがわかってくる。ここにShah-ji-ki Dheri大ストゥーパの展開と編年の糸口を見いだすことができる。

2．車輪構造と舍利室の位置

放射壁と關聯してSpoonerは舍利室を發見し，「カニシカ舍利容器」をえたが，「舍利容器」の發見位置は平面圖にない。出土狀況を示す寫眞もない。そこでまず調査を「舍利容器」の場所の解明からSpoonerの記述にしたがって始めることにする。

SpoonerとHargreavesの平面圖に描かれた放射壁は斷絕した狀態の4本で，中心近くから北西と西とへ延びる放射壁はとなりあっていて，前者は中心から7.2 m，後者は3 mあたりで切れている（圖5）。このふたつの放射壁の交わり方から車軸にあたる構造は存在しなかったことがわかる。Kankali Tilaとおなじだという由緣である。もうひとつの放射壁は南東へ延び，中心から3 mほどまでは既になく，そこから3 mくらいが殘っているだけである。このほかに南西部に，同樣に斷裂し，ほかと遊離した壁がみえる。この放射壁は，ストゥーパ本體である方形部の南面の西側壁面が發掘の最初の段階で出土したときにさらに北へ壁の內側を掘って，そこであらわれたものである。Spoonerはこれをみつけるとすぐにほかの遺迹の放射壁を想い浮かべつつ記述しているから，これも放射壁のひとつであることは疑いがない(3)。しかしこの放射壁のすこし南西でこれと平行した放射壁が再

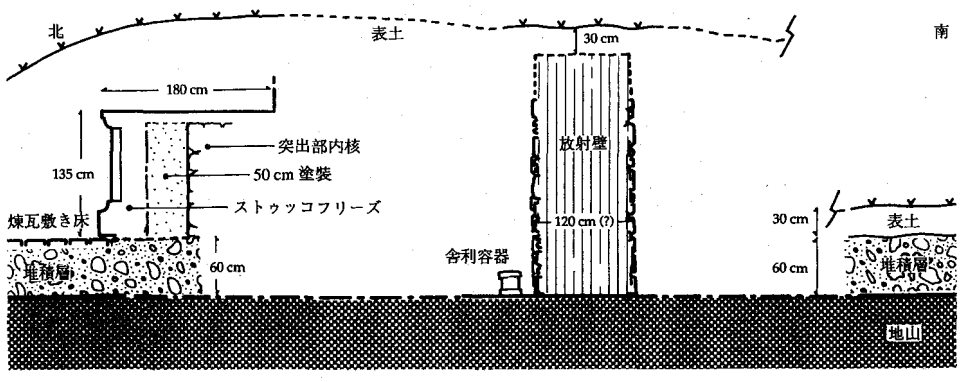


圖 6　Shah–ji–ki Dheri ストゥーパ斷面概念圖（桑山作製）

びあらわれている。圖示されたほかの放射壁はだいたい中心へ集まっていくのに，この壁だけは微妙にずれ，ほかとの關係をつけがたくしている。この壁だけはどのように理解してよいかわからない。

Spooner (1912：48－49) は舍利室の存在を確認するためストゥーパ中心部とかんがえられた地點に一邊 7.2 m の方形のトレンチをいれた。地表下 30 cm (1 ft) で放射壁 (the very massive radiating walls) の上端にあたり，ついでこれをさけて掘りさげ，7 日の發掘ののちに「地山らしきもの」(what seems to be free earth) に達した。舍利室は存在しないとおもっていたが，「突如前觸れなしにその遺構にゆきあたった」(圖 6)。舍利室はストゥーパをとりかこんで敷かれていた煉瓦舖裝面の下 60 cm (2 ft) のレベルに，「地山らしきもの」の上にあった。放射壁は中心部では表土をはいだ程度のレベル (地表から 1 ft 下) で壁の上端が出現し，それが地山までつづいていたのであるから，かなりの高さで殘っていたのであろうが，發掘者は放射壁がその地點でどれほどの高さであったかを記していないし，また放射壁の厚さ (幅) も計測されていない。だが南東に殘る放射壁にあらわれた壁の幅は 120 cm くらいはある。斷面圖が與えられていないので放射壁と煉瓦敷き床面と地山とのレベルの相互關係ははっきりはしないが，放射壁の殘高を推測させる資料はある。これはのちに詳しくのべるが，ストゥーパ北面にある長方形突出部の西面は煉瓦敷き床面から 135 cm の高さの軒蛇腹までのこっていた。「舍利容器」の發見されたレベルは煉瓦敷き床面より 60 cm 下で，放射壁の根本である。北面の長方形突出部の地表は，この西面の基部の最上端である軒蛇腹よりだいぶん高いところにあったことが，Hargreaves の公表した寫眞をみるとわかる (Hargreaves 1914：Pl. XIV)。いまかりに，地表面と地山が北面から放射壁のあった中心部までおなじレベルでつづいていたとすると，放射壁の殘高はもっとも低く見積っても 195 cm (＝135 cm＋60 cm)，約 2 m はあったであろう (圖 6)。

さて，放射壁はさきにのべたように平面圖では 4 本あった。どの放射壁に舍利室は關係

するのであろうか。Spooner (1912：48) によると舍利室の位置は次のとおりである。

> It was not in the exact centre, but a little more to the east, and appeared to have been built against the end of that one of the radiating central walls which ran due east from the centre of the stupa.

放射壁のうち，中心から眞東に向うものの末端に寄せ，ストゥーパの中心から東に外れて舍利室は造られていた。しかし眞東に向かう放射壁など，さきにのべたように平面圖にはない。

Spooner はつづけて舍利室の壁構成をのべている。

> The chamber itself must originally have been roofed in some way, but this roofing, whatever it was, had completely disappeared, and the original open space was packed with earth. The chamber itself was of the rudest possible construction. A long, smooth slab of slate had been laid down extending in its length from north to south, and across the southern end of this was laid a heavy slab meeting at right angles with another heavy slab along the western edge. These two thus formed two sides of a possible square, with the corner intact at the south-west. But no trace whatever could be found of any corresponding slabs on the east and north, and from the general position of the whole it is my opinion that the chamber was not enclosed on these sides save by the massive rubble masonry of the radiating walls to the east and north-east. (Spooner 1912：48)

舍利室は底としてつかわれた1枚の板石を別にすると，2枚の板石を組みあわせて壁としていたらしい。1枚の滑澤なスレートの長い板が南北方向に敷かれ，その南端に重量のある板石を當然立てて東西方向にわたし，この石の西端に接してもう1枚の重い板石がそれと直角に，つまり南北方向に置かれていた。2枚は南西部で接していたというから，板石は底板の南端上でL字形を成し，方形の舍利室の西と南との壁を形成していたのである。一方，東壁と北壁をつくるはずの板石はなかった。そこで Spooner は，舍利室の東と北とはもともと板石でつくらず，「東と北東とへ放射するふたつの壁がその代わりをしていた」，とみた。「東へ走る壁」はそれに舍利室が寄せかけて造られていたのであるから，たぶん平面圖には描き漏らしたか，この部分がすくなくとも2mの深さはあったからかれらには圖化しにくかったのであろう。しかし「北東へ走る壁」とはなにか。これも平面圖にはなく，突然上の記述だけにあらわれる。これらを總合すると，平面圖には描かれなかった放射壁，東と北東とへ走る放射壁が，發掘時にはあったとかんがえざるをえない。このような舍利室は，床を南西の隅だけ石膏で塗り，その上に「舍利容器」を置き，「舍利

容器」をとりあげると，石膏にその壓痕がついていた(4)。「舍利容器」のなかから出土したものは，三つの骨片を，象の繪のある封泥でふさいだ，6 cm のながさの水晶の小器であり，「舍利容器」のすぐそばにはカニシカ銅貨1枚があったと，Spooner (1912：49) は書いている。このカニシカ貨をもってすぐさま舍利室の造成年代にむすぶことはできない。このような場合ふつうカニシカ貨のしめす時期以後に舍利室が造成されたとかんがる。しかし，カニシカ以前に舍利室が造成され，のちカニシカ貨がなんらかの理由ではいったともかんがえられるから，このような出土狀況の貨幣で年代決定するのはきわめて危險である。

以上をみて，舍利室の位置に關する Spooner の記述や考えには次のようないくつかの疑問が生じる。第一の疑問は，眞東にのびる放射壁の末端に寄せかけて造られたという點である。平面圖には眞東に走るそれは描かれていない。またこの壁自體に關する記述はないから，それが中心からまっすぐのびていたのか，東南にのびる放射壁のように中心にちかいところはこわれた狀態で部分的に殘っていたものか，これだけでははっきりしない。第二の疑問は，東と北東に走る放射壁が舍利室の北と東の側壁を代用していたという點である。東，北東へ走る放射壁がひとつの室の北と東との壁を形成することは不可能である。舍利室の板石壁の位置が Spooner の記述のとおりであるなら，L 字形壁に對應する放射壁は，中心から西および南西へのびるものがもっとも Spooner の考えに合致し，そうでなかったとしてもせいぜい南西および南へのびるものでなければならない。しかしそうだとすると，中心から東へよって出土したということに抵觸する。したがって東，北東へ走る放射壁が舍利室の北と東との壁を形成するとした Spooner の考えはもうすこし檢討を要しよう。これに加えて Hargreaves の記述も問題になる。

> An attempt to fix the circumference of the drum of stupa dome by following one of the radiating walls running from the spot where the relics were discovered yielded as little result, for the wall was broken at a distance of 24 ft from the centre of the mound. (Hargreaves 1914：24)。

「埋納物が發見された地點から走る放射壁のひとつ」とはどの放射壁であったのか。これがわかれば舍利室の正確な位置もわかるかもしれない。Hargreaves の示す平面圖では中心部から北西にのびるものだけが Spooner の平面圖のそれよりずっと長く示されている。Spooner が掘ってから再び Hargreaves がこれを掘ったからであろう。Hargreaves が上の目的でおいかけた放射壁はおそらくこの北西へ向かう放射壁のほかにはあるまい。となると，「埋納物が發見された地點から走る放射壁のひとつ」とは，北西に走る放射壁である。Spooner が舍利室の北と東の壁の代用をしていたと考えたふたつの放射壁は，北東と眞東とへ走る放射壁であるから，舍利室の位置は，北東，北西，東へ向かう三つの放射

壁があつまる中心部で，しかも「中心から東にずれた」ところということになる。

Spooner は舍利室が「against the end of that one of the radiating central walls which ran due east from the centre of the stupa」で發見されたとした。ここで「端」を改めて問題にする。つまり放射壁に端があるということは，眞東に向かう壁がこわれた狀態で出土していたということであろう。舍利室が「中心から東にはずれていた」という點を考慮すると，「端」とは中心に近い「端」でなくてはならない。舍利室は，中心からすこし東に寄って，東に向かう放射壁の中心部側の「壞われた壁の斷端」に寄せかけて造られていたのではないか。つまり，放射壁の「壁面」が舍利室の壁の代用なのではなく，放射壁が壞れてできた「斷面」を壁としていたのである。放射壁の「壁面」が舍利室の壁をつくっていたとかんがえるかぎり，到底一室をつくることは不可能である。放射壁の「壁面」ではなく，放射壁の「斷裂面」が，一方の圍いとなっていたとみなければなるまい。これならとくに不都合ではない。ただしこの場合北東へ向かう放射壁も，東へ向かうものと同じように，中心近くで基礎に至るまで大破していたとみる必要がある。北東と東とから中心に向かってあつまる放射壁がどちらも中心部で破壞していたとすれば，その兩壁の斷面はＬ字形を補完して方形室をつくる壁となりうるからである。舍利室の位置を平面圖に示せとなるとそれはむずかしいが，これで舍利室の見當はほぼついた。

ただしここで重大なポイントがある。それは舍利室ならびに「舍利容器」の埋納の時期にかかわる。放射壁が大破して發見されたことである。北西，南東，南西に向かう放射壁がこわれていたことは平面圖であきらかである。北東と東とへ向かうものもこのようにこわれていたとなると，發掘であらわれたいずれの放射壁も大破して出土したのである。車輪構造は Shah-ji-ki Dheri では地山のうえにあってストゥーパの基礎にあたるのだから，この大破はストゥーパが基礎にいたるまでこわれていたことを示唆する。放射壁が中心に近いところで壞れ，その壞れた點に舍利室があったのなら，車輪構造のストゥーパは舍利室が造られる以前すでに一度は破壞されていたことになる。すなわち舍利室と「舍利容器」は Shah-ji-ki Dheri ストゥーパの最初のストゥーパとは無關係である。

放射壁の出土狀況を Spooner と Hargreaves の報告からみると，その殘存狀態たるやまことにお粗末であり，車輪構造のストゥーパはかなりひどい程度に壞れていた。地山の上につくられた車輪構造はストゥーパのうちで基礎にあたる部分である。放射壁がぶつ切れにこわれているということは，破壞がストゥーパの基底まで及ぶ徹底したものであったことを示している。車輪構造をもつストゥーパは Nagarjunakonda という一箇所に集中している例を除いても十數例あるが，破壞が古代において車輪構造の中心にまで及んだ例はなく，また車輪構造をもたないストゥーパでもいま殘っているものでこれほどまで壞れた例はない。これは自然の破壞ではなかろう。後代に再びストゥーパがつくられるまで

に，すくなくともいちどは人の手によるおおきな破壊を經たとみた方がよい。基礎に至る大規模な破壊があったのに，舍利室と「舍利容器」がもとのまま殘ったとみるのは不自然であり，舍利室と「舍利容器」を車輪構造のストゥーパのものとする理由はないのである。ストゥーパ創建時の埋納であるかどうか，從來だれも疑わなかった「舍利容器」も舍利室も，當初のストゥーパのものではないのである。

3．圓形ストゥーパの存在

Shah-ji-ki Dheri ストゥーパが見かけ上は Sanghol と同じ範疇にはいること，つまり方形の枠の內部に車輪狀をいれた形式であることをさきに述べた。Sanghol ではたしかに方形に區劃した壁のなかに車輪構造を容れ，車輪狀も方形壁も同時に築造している。Sanghol では一番外側が薄い外輪壁で，その內側に厚い輪壁があり，さらにその內側に兩壁の中間の厚さの輪壁があり，中心が內實な圓形の軸部である。一番外の輪壁は四隅がきられた形であるが，これ全體が方形の枠のなかにはまっている（圖4：下）。中間の厚い輪壁はストゥーパの丈高い圓胴部をこしらえるための基礎であり，薄い外輪壁は圓胴部の周圍をとりまく繞道部の基礎であったろう。外側の方形の枠は以上のストゥーパ本體全體がのる方形基壇である。すなわち，方形基壇をまず築いた上に圓胴部以上を建設したのではなく，圓胴以上のストゥーパ本體の基礎を方形基壇の內側から築きあげたのである。だが，Shah-ji-ki Dheri ではそのようにかんがえることはできない。Errington (1987) は Tahkal Bala のストゥーパに關聯して Shah-ji-ki Dheri の平面圖を編年的に描き直しているが，その圖面から判斷するかぎり放射壁と十字形ストゥーパを一時期とみているようである。しかし兩者は一體ではなく，時期を異にする獨立の建築である。それには3點の證據がある。

第一點は，放射壁のおかれたレベルと十字形部（方形部と長方形突出部とをいっしょにした平面）（圖7參照）の床レベルとの差である。Spooner によれば，放射壁はストゥーパ丘中心部の地表下 30 cm ほどではじめてあらわれ，地山までつづいていた（圖6）。さきに推定したように放射壁の殘高を約 2 m とすると，中心部の地山は地表から約 230 cm にあったことになろう。地山

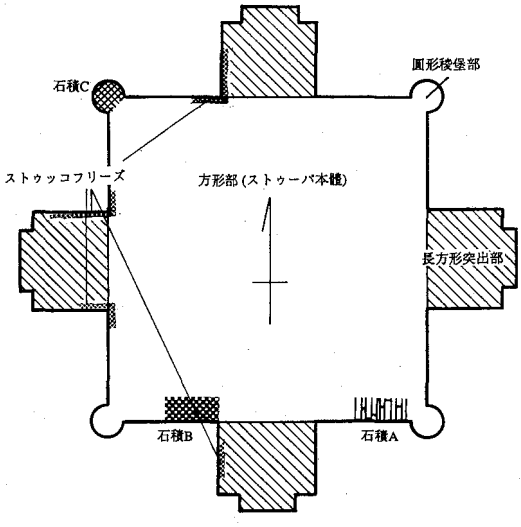


圖7　Shah-ji-ki Dheri ストゥーパ平面概念圖
白抜き部は第Ⅱ期，斜線部は第Ⅲ期

はほかの地點でも發見されている。發掘の最初の段階で掘ったふたつの深掘りのうちのひとつで，重なる3層を得た（For the first foot or so the soft free earth of the wheat field was passed; then came a stratum some two feet thick of tightly packed débris among which one copper coin–too badly corroded to be recognized– and a few small and very badly damaged sculptural fragments were found. But below this the pit passed again into perfectly free earth to the depth mentioned above... Spooner 1912：40－41)。その地點は，ストゥーパの形が判明した段階でいえば，南面の長方形突出部の東側（圖5參照），ストゥーパの構造にはひっかからないストゥーパ前方である。表土は30 cm，次が遺構殘骸を含んだ緻密な60 cmの地層（圖6では堆積層），そしてその下の層が地山であり，ここでは地山は地表から90 cm下にあったことがわかる。一方，ストゥーパを取り圍む煉瓦敷きの床面はとくに南面で確認されたが，この床面より60 cm下に地山があった。煉瓦敷きは堆積層の上面につくられていたことになろう（圖6の左)。

ストゥーパ中心部の地山レベルでは舍利室が造られた。のちに述べるように十字形平面のストゥーパの基部まわりには3回の塗裝が認められ，最終段階で坐佛と壁柱を交互に配列したストゥッコ＝フリーズがあった。煉瓦敷きの床は最後のストゥッコ＝フリーズ塗裝と對應するであろう。煉瓦敷きの60 cm下が地山であるから，舍利室の地山レベルよりこの煉瓦床面は60 cmも高いレベルにある（圖6)。この60 cmの層とはおそらく，南面の長方形突出部の東側で表土と地山との間にあった60 cmの堆積層とおなじ性格の土層であろう。地山の上に放射壁で構成された車輪構造の圓形プランを造成し，その外周に60 cmの厚さの盛り土をし，その上面に煉瓦を敷き，このレベルから今度は十字形プランを造成したとは，いかにも不自然である。この場合盛り土はすくなくとも無垢の土であるはずであるが，實際には遺構の殘骸を含んだものであったから，この點からもそのような盛り土をしたとは理解できない。遺物を含んだ60 cmの堆積層の存在こそは，車輪構造部と十字形部との建設が時期的に異なることを示すものである。車輪構造部は十字形部と時代が異なる。

第二點は，車輪構造部と十字形部との中心のずれである（圖5)。十字形部の本體にあたる方形部に對角線を引き內接圓をつくってみる。Sanghol（圖4：2）のように方形部がストゥーパの方形基壇となり，車輪構造が方形部に內藏される圓胴部の基礎であるなら，車輪構造の中心點と內接圓の中心は一致するはずである。なぜなら內接圓は方形部の上にのることができるもっともおおきな圓胴部の直徑をもつはずだからである。實際Sangholでは中心が一致するばかりではなく，對角線と放射壁のいくつかの方向さえ一致している。Sangholでは車輪構造と方形基壇とを一成につくっていることがこれで確認できる。しかし，Shah-ji-ki Dheriでは北西と南東とをむすぶ對角線は放射壁の方向（破線）とか

なりのずれがある。一方，平面圖をみると，北西と西とへ延びる放射壁だけが向かい合わせの壁面をもっていて，それらは交わっている。放射壁の厚さはでていない。そのため放射壁が集まる車輪構造の中心を正確には定めがたい。しかし向かい合う放射壁の壁面の交點は內接圓の中心にきわめて近接している。これは，車輪構造の中心點が內接圓の中心からだいぶん東方向にずれていたことを示唆する。放射壁のあつまる中心點は方形の對角線の交點とは別のところにあったことになる。方形部の內側に車輪構造を同時に造ったなら，車輪の中心を對角線の交點に求めることが自然で，中心點のずれは不自然である。これは方形部と車輪構造とを別の時期につくった證據であろう。放射壁の基部が方形部の繞道より 60 cm 低いところにあることを加味すると，車輪構造部は方形部がつくられる以前にすでにあったのである。

第三點は，北西隅における建築の前後關係である。Hargreaves の平面圖をみると，北東部から南部にかけてストゥーパを圍んで多くの建物があり，それらは圓形のものを除くとみなストゥーパと平行に置かれ，ストゥーパの存在を前提にした配置であること，一目でわかる。ところが北西部にはそれらと方向が全く異なった 4 基の方形小建造物と 1 基の圓形小建造物がある（圖 5）。Hargreaves (1914：26) はこれらのうちでもっとも北に寄った小ストゥーパがストゥーパ北西隅の圓形稜堡をつくる際に一部破壞されていることを認めている。ストゥーパの北西隅における切り合い狀況がこれである。この圓形稜堡の壁面は方形部の壁面とうたがいもなく同じ材料で同じ技法で造られているから (Hargreaves 1914：26)，方形部と圓形稜堡部は同時期であり，北西隅の建造物 5 基は圓形稜堡つき方形部の建設以前にすでに存在していた。小建造物群の配列方向をみると，方形平面には添わず，むしろ圓形平面にしたがったといってよい。十字形，あるいは方形平面の建築にさきだって，圓形平面の建築があったことを示唆する。

この遺迹で圓形平面の建物とは，とりもなおさず車輪構造のストゥーパである。この形式のストゥーパが地山につくられていたことを再び言い出すまでもなかろう。つまりそれは Shah-ji-ki Dheri 遺迹で考えうるもっとも古いストゥーパである。この當初のストゥーパの車輪構造部は，Sanghol とちがって，方形部の內部にいれこになっていたのではなく，基壇も方形ではなく，Dharmarajika や Manikyala や Butkara とおなじように圓形平面であった。北西隅の小建造物 5 基は圓形のストゥーパの周圍にあってそれに附屬していた小ストゥーパ群の一部であることはいまやいうまでもなかろう。

以上 3 點の觀察によって，Shah-ji-ki Dheri には，方形ないしは十字形ストゥーパにさきだって放射壁を基礎の內部構造としてもつ圓形ストゥーパが存在したことがわかった。そこでこの創建時のストゥーパの概要を下に記しておく（圖 5）。

（1） 圓形ストゥーパの最大限のおおきさは，いまのべた北西部の小ストゥーパ群の內

側に沿った圓弧によって復原しうる圓より相當に小さかった。ちなみにこの圓の直徑は72 m である。小ストゥーパ列の內側にある程度の幅の繞道部の存在を想定すると，この形のストゥーパは直徑70 m はこえなかったであろう。また，方形部內の南西にある放射壁の末端がいまのこった放射壁のもっとも外側とみて圓を描くと，直徑は大體56 m になるから，基部の直徑は56 m 以上70 m 以下である。きわめて大規模なストゥーパであった。

（2）放射壁：地山上に建設された堅固な野積み（rubble masonry）の壁體。Spooner と Hargreaves の記述では東と北東とに向かうものがあった。平面圖では西と北西と南東と南西とへ向かうものがある。6本の放射壁が實際に發掘であらわれたと考えてよい。しかし車輪構造を放射壁6本で構成することはまれな例であり，8本の例が多い。Spooner や Hargreaves がつかった「北東」「東」「南西」「西」「北西」という方向指示語から推測すると，北，南，南西に向かう3本ももとはあったであろう。8本の放射線を等角度で描くと，その角度は45度である。6本の場合は60度である。平面圖上に描かれた北西と西との放射壁がつくる角度は計測すると42度くらいである。8本はまず確實である。

放射壁の正確な殘高は不明であるが，舍利室を寄せかけてつくっていた放射壁はすくなくとも2 m はあった。Sanghol の放射壁の殘存狀態をみると，部分的にきわめて高く殘っているものもあれば，ずいぶん下までなくなっているものもあり，その殘高は一定していない。放射壁の幅（厚み）も報告されていない。しかし南西の放射壁の幅を圖上で計測するとだいたい120 cm ほどである。

（3）車軸：平面圖には中心部から北西と西とに隣りあって走る放射壁が描かれている。隣りあう壁のありかたをみると，Sanghol でみられるような車軸構造はありえない。外輪壁があって車軸部分がない車輪構造は，Tahkal Bala を除くと Kankali Tila にあるのみ。Kankali Tila では輪壁も放射壁も同じ程度の厚みしかないので，丈高い圓形基壇の外輪壁としては力學上弱い。ローマの墓廟や南東インドの例など本來は厚い外輪壁が圓形基部を高くする要件であったから，Shah-ji-ki Dheri や Kankali Tila の基壇は低かったと考えることが自然である。これは兩ストゥーパが車軸部をもたないこととも關聯しよう。

（4）外輪壁：確認不能。基礎部の車輪構造であるから，外輪壁はあったはずである。Hargreaves の探査のかぎりでは放射壁の外端は殘っていなかったが，Spooner も Hargreaves もストゥーパ遺丘全體にわたる探査をしていない。大規模のものであれば，必ず輪壁は複數あったろう。

4. 創 建 年 代

伏鉢という上部構造にとっては全く無意味な車輪構造をもつ，タキシラの Dharmarajika 大塔と，基礎にこの構造をもちながら基壇が低かったであろう Shah-ji-ki Dheri 大ストゥーパは，どちらも車輪構造本來の意味から離れている。しかし，Shah-ji-ki Dheri ではこの構造は基礎におくものだと理解されていた點，まだしも本來に近い。そこでこの違いを年代の差だとすれば，Shah-ji-ki Dheri は Dharmarajika の伏鉢部の建設にさきだつ。Dharmarajika 大塔伏鉢の建設年代の大體を讀み出すことができれば，Shah-ji-ki Dheri 大塔の創建年代にわくをはめることができる。

Dharmarajika 大塔の伏鉢內部を補强した放射壁は圓胴部のすぐうえから建設され，それ以下には基礎をもっていない。伏鉢部が當初の建築ではなく建て直しであることはすでにのべたことがある（桑山 1974：335 f.; Marshall 1951：236)。これと同時代の建て直しはタキシラ全域にみられるが，このとき考案されたのが Diaper と名づけられた石積みであり（Marshall 1960：Pl. 10, b, c)，古い Rough rubble masonry（Marshall 1960：Pl. 10, a）をあらためて，堅固さを壁體にあたえた。その Diaper の化粧積みが伏鉢西側の基部にもみられたという（Marshall 1951：236)。Diaper がいつ導入されたかについては，Allchin（1968：19－23）が出土貨幣と第Ⅲ都市 Sirkap の層位とをからめて再檢討した。それによると Azes Ⅱ世の末年，おそらく Kujula Kadphises と重なる時代である。この場合 Allchin は，Gondophares を Azes Ⅱ世と同時代のやや古い世代で，タキシラにはほとんどかかわっていないとみている。この考えを Dharmarajika にあてはめると，大塔伏鉢の建設は Kujula Kadphises 時代であり，それよりはやくはない。一方，Diaper 積みのつぎにタキシラであらわれてくるのは Semi-ashlar 積みであり，これもまた伏鉢の外面につかわれている。Semi-ashlar 積みは Sirkap にはなく，次の時代の第Ⅳ都市 Sirsukh の市壁內側の家屋，Dharmarajika 大塔の北にある小塔 K1, K2, K 3 にみられる。K 3 は rubble masonry による水槽を埋め立てた上につくられ，埋め土からは Kujula Kadphises 貨が 2 枚，Soter Megas 貨が 1 枚出土している。K 3 の埋納物はカニシカ貨が 3 枚であった。K 3 からすこし南によった位置の小塔 P 6 も Semi-ashlar 積みであるが，その埋納物は Huvishka 貨が 3 枚と Vasudeva 貨が 7 枚であった。この事實から Semi-ashlar 積みはカニシカ以後のものであると Allchin（1968：22）はみる。したがって，放射壁をもった Dharmarajika 伏鉢の建設は Diaper 積みの年代にもとづけば Kujula Kadphises 時代であってそれよりおそくはなく，また Semi-ashlar の年代にもとづけばカニシカより古い。圓形ストゥーパとして創建された Shah-ji-ki Dheri は，放射壁のありかたが Dharmarajika 伏鉢に先立つと假定すれば，遲く見積っても Kujula Kadphises 時代。カニシカⅠ世をはるかにさかのぼることはきわめて明瞭である。Shah-ji-ki Dheri における最初のス

トゥーパについての展開の要點はつぎのとおりである。

（1）Kujula Kadphises 時代か，あるいはそれよりはやい時代に，基礎部を車輪構造とする圖形ストゥーパとして創建された。

（2）そののちストゥーパは基礎構造である放射壁がこわれるほどの人爲的破壞をうけた。

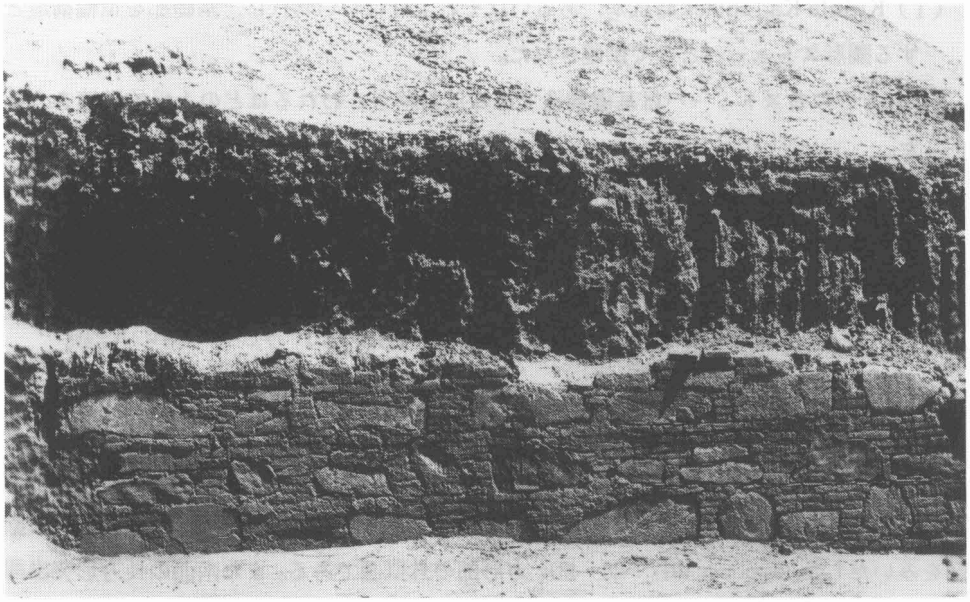
（3）どんな舍利容器が埋納されたかはわからない。Spooner が發見した舍利室と取り出した「舍利容器」とはこの時代のものではないからである。

Ⅱ．方形ストゥーパの存在と十字形ストゥーパへの變貌

1．發掘時のストゥーパ構成

Spooner は 1908 年 1 月 16 日にはじめてストゥーパ遺丘の南に放射狀の試掘坑をいくつかいれて煉瓦敷きの床とその上に造られた祠堂を發掘したのち，方形部南面の西側に壁面をみいだした（Spooner 1912：40－43）。方形部の外壁面である。また南面の長方形突出部では西側面において粗い壁體をみつけ，その手前に坐佛と壁柱を交互に配したストゥッコ＝フリーズがあることを確認した。フリーズは南端北端ともにこわれていたが，南へはさらにストゥッコ裝飾の基部となっている刳形部だけが殘って斷續的につづき，長方形突出部をぐるりとまわっていた。方形部南面は東側でも壁面が殘っていた。それからストゥーパの東側に發掘は及んだが，東の長方形突出部の先端が殘っていただけで，ストゥーパ自體の壁面はすでになかった。そこから北側へまわると，ストゥーパ北面の長方形突出部にであった。そこでも長方形突出部は粗い石積みの壁體であった。次に發掘はストゥーパの西面の檢出に向かい，そこがもっとも殘り方がよく，長方形突出部がストゥーパ本體に接するふたつの隅角ではやはりストゥッコ＝フリーズを認めた。ストゥッコ＝フリーズはストゥーパ本體から長方形突出へとまわっていた。北側の隅角ではストゥーパ本體の壁面には 30 cm の厚さの塗裝があり，長方形突出の方では 52.5 cm の厚さの塗裝があり，それにフリーズがとりつけてあることがわかった。ストゥッコ＝フリーズは壁柱と坐佛とを交互に配したものであった。また西面ではその北隅で，つまり方形部の北西隅にあたるところで圓形稜堡を確認した。そこで，そのほかの三隅にも圓形稜堡があったことを推定して，全體の平面を得たのである（Spooner 1912：43－48）。これでストゥーパ全體は四隅に圓形稜堡を備えた十字形平面であることがわかった。それでわれわれに殘された平面圖のストゥーパは十字形を呈することになったのである（圖 5，圖 7）。

その平面圖をみると，ストゥーパは四面とも壁面がきれいに殘っていたような錯覺を與えるが，記述を參照すると平面圖の實線部分（圖 5）は主として一番外側のストゥッコ＝フ



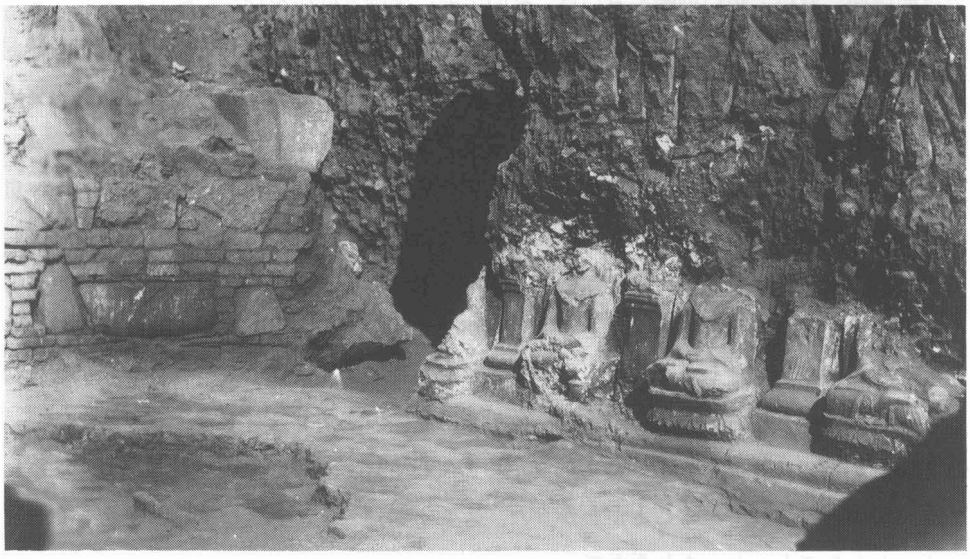


圖 8　方形部石積み（圖 7 參照）　上は石積み A, 南面東側,　下は石積み B, 南面西側

圖 9（右頁）　北西隅の圓形稜堡の基部とその石積み C

リーズを含む塗装面であることがわかり，また壁面は全面についてあきらかになったのではなく，殘存狀態もあまりかんばしいものではなかったらしいが，どの部分がわかったのかは見當がつかない。發掘をはじめて間なしのころ Spooner はストゥーパ南面の西側でストゥーパの壁面をみつけたが（圖 7：石積 B），そこで壁面とそのうしろのストゥーパの內核についてふれ，壁面は石と煉瓦を積んだもの，內核は河原石か栗石を積んだもの，と述べている（Spooner 1912：44）。內核の用材に關する記述はこれが唯一であり，發掘者はあらためてそれに注意をむけていない。壁面の石積みの記述は，その後の發掘者である Hargreaves もまた石と煉瓦で積んであるとしかいわない。

一方，公表された寫眞によって立ち上がりを見ても，壁面の殘りはよくないようである。ガンダーラのストゥーパではだいたい初成基壇には軒蛇腹（cornice）があるのが普通であるが，基底には凹部と凸部で組み合わせる刳形をつくるものと，つくらないものとがある。刳形をつくる場合は，まず壁面をこしらえるときにあとでその上から石膏で刳形をたやすくつくり出せるような形に石を積んでおく。Shah-ji-ki Dheri の壁面に關する報告にはこれに相應する記述がないし，また發表された寫眞にもそれはみあたらない。壁面にそった發掘が十分下まで及んでいない段階の寫眞だからか，あるいは基底に刳形がない壁面型式か，どちらかである。またどれをみても軒蛇腹が殘っている寫眞はない。あきらかにその部分は壞れているのである。發掘者たちは壁面をその根本まで掘っていないかもしれない。Spooner のときストゥーパ南面西面の周圍で煉瓦敷きの床面があらわれたから，壁面もそこまでしか掘らなかったのであろう。煉瓦敷の下を掘ったけれどもなにもなかったという Spooner（1908：21）の記述は，遺構がなにもなかったということであり，壁の根本を確かめたという意味ではなかろう。

しかし，記述を丹念に讀んでいくと，十字形のうちストゥーパ本體である方形部とその各面から出ている長方形突出部との壁面にはおおきな違いがあったことがわかる。また壁面の寫眞を集めて調べてみると，方形部の壁面も積み方は一樣でないことがわかる。そこで，方形部と長方形突出部とにわけてストゥーパ壁面を以下に觀察することにする。この觀察によって，圓形ストゥーパがこわれたつぎの段階の，第Ⅱ期のストゥーパが方形であり，こわれた狀態にあった放射壁の斷裂面にあてがうように，放射壁を再利用するかたちで，舍利室を造り，「カニシカ舍利容器」を安置し，あらたなストゥーパが建設されたことがわかる。ついで，長方形突出部のありかたをみることにより，方形ストゥーパが十字形ストゥーパへと變り，第Ⅲ期をむかえたことがわかってくる。本章ではこの事實を掘りおこすのである。

2．壁面のつくりとストゥーパのかたち

（1）方形部（圖7，8，9）

記述では石と煉瓦で積んでいるとしかいわない壁面を觀察するために，殘された壁面の寫眞をあらいざらい集めてみた。それはあまりにもすくないが，次の3種であることはまちがいない：（A）南面の東側で，いまはない南東の圓形稜堡に近い部分（圖8：上）（Spooner 1912：Pl. XI, a）；（B）南面の西側で長方形突出部にかかる部分（圖8：下）；（C）北西の圓形稜堡部である（圖7，9）。BとCは British Library の寫眞である。

A（圖8：上）はまずおおきな石を置き，その間を小さな薄い石で充塡し，これを上へと順次つなげて積んでいくものである。この石積法は Marshall がタキシラで Diaper 積みとよんだものに近い。この寫眞をよくみると，小さい石はあきらかに石だけであって，煉瓦を用いた形迹はない。［髙田 1955］は關野貞が現地で撮影した石積みの寫眞を2葉掲載している。そのうち［髙田 1955：Fig. 4］がこの石積みである。この積み方をかりにAの石積み法とよぶ。

B（圖8：下）は壁面Aと比べると重要なところで異なっている。この積み方は層序がはっきりしている。基本となる大石のおおきさを整えて水平に置き，その間を厚さの一定した小さい石を小口に積む。これが第一層となる。第二層は水平になった第一層の上層として，大石をまったく使わずに形の整った小さい石を整然とそろえて小口積みにし，その上端を水平にする。次に第三層を第一層と同巧に積む。Aでは層序がこのように目立たないのに對して，Bではそれが明瞭である。この積み方をBの石積み法としておく。これは Marshall がタキシラで Late semi-ashlar 積みとよんだものにきわめて近い點で重要である。［髙田 1955：Fig. 5］はこの石積みである。

C（圖9：上）は壁面Aと同じ積み方であるが，ここで注意すべきことがある。同じ北西の圓形稜堡を近くから撮影した，もうひとつの寫眞（圖9：下）をみると，Aとおなじ石積みの壁面の上に，石とは考えられない厚みの一定した用材をすくなくとも3層積んでいる。つまり稜堡の壁面で殘っている一番上のところの3層は石ではなく，あきらかに煉瓦である。AとCとを比較すると，Aは石ばかりをつみ，Cは石ばかりを積んだ上に煉瓦だけを積んでいるのである。そうして煉瓦の部分が殘存の最上部であることを考慮すると，煉瓦はAのような石積みの上部が壞れたために煉瓦を補修用につかって積み直したのであろう。これをCの石積み法とする。

このような觀察に基づいて壁面Bを見直してみる。きれいに整形して，厚さを統一したようにみえる第二層の小口は，實は石ではなく，煉瓦の小口に相違ない。第一層の大石と大石との間の石も實は石ではなく煉瓦であろう。Spooner や Hargreaves はストゥーパの壁面は石と煉瓦でできていると報告したが，壁面のどこもかしこも石と煉瓦を混合したの

ではなく，壁面にはABC 3種類の積み方があり，石だけを使ったのはAだけであり，煉瓦をつかったのはBとCで，そのうち壁面CはAの煉瓦による補修，壁面Bはどちらにも屬さないあらたな積み方で，基本の大きな石だけが石で，ほかのちいさい石のかわりを煉瓦がしているのである。壁は石と煉瓦だという記述から一歩すすんで壁面の積み方がこのようにわかると，ストゥーパ全體の壁面の變遷がそこから推測できる。

タキシラでDiaperとLate semi-ashlarがだいぶん時代を異にするように（Marshall 1951：259-261），AとBという石積みは時期がだいぶん隔たっているであろう。すくなくともこのくらいのことはすぐに考えつく。上方部がこわれた壁面Aには煉瓦がないのに，壁面CではAの上に煉瓦をつかっているから，煉瓦の使用はAによる壁面がこわれたのちであり，AはCよりふるい。また，壁面Bは石も煉瓦も使い方がAと基本的に異なることから，壁面Aとはまったく異なった時代の壁面であり，AやCのような石積みが既になくなっていたか，あるいは補修に耐えないほどであったので，修復時代の石積法Bで積んだという見方がでてこよう。しかしABC 3種ともストゥーパにあらわれて發掘されたのであるから，ABCはストゥーパの最終局面までそのままストゥーパの壁面を構成していたわけである。したがって壁面Bがつくられた時點でも壁面Aばかりでなく，壁面Cもあった可能性はある。積みかたとしてはAとBの2種であるが，積んだ時期には2ないし3時期あったかもしれない。つまりABCの組み合わせとして3タイプがありうる。石だけをつかって，しかも整美な石積みAは，タキシラの初期の石積みであるDiaper積みに酷似し，一方煉瓦をまじえたBは，タキシラの後期の石積みLate semi-ashlar積みに酷似しているから，AはBより早く，3タイプを通じて最初の石積み，つまり第1期のものとみる。

（1）第1期はA，第2期はA+B，第3期はA+B+C。第2期にはAによる壁面が缺損したところをBで積み替えたが，ほかの壁面はAであった。第3期は，第2期まで丈夫であったAによる壁面がこわれたので煉瓦で補修してCができた。

（2）第1期はA，第2期はA+C，第3期はA+B+C：第2期にはAによる壁面を煉瓦で補修してCとした。第3期はAまたはCによる壁面がこわれたためBで積み替えた。

（3）第1期はA，第2期はA+B+C。第3期はこの組み合わせでは存在しない。第2期にBとCによる壁面が同時にできたからである。

理屈では（1）のタイプはあるけれども，實際にはありえないであろう。なぜならば，Bは，AまたはCが完全にくずれていることが前提になるからである。BはAより後にあらわれた石積み法であることはあきらかであり，Bが崩壞したあとでAの崩れを煉瓦で積んでCとすることはかんがえにくい。したがって，（2）か（3）が實在した。のちに

のべるようにストゥーパの西方，僧坊區といわれるところの東であらわれた三時期の相重なる遺構をみると，下2層が煉瓦だけの遺構であり，一番上の層が石と煉瓦をつかった遺構であるから，石と煉瓦をつかう以前に煉瓦はすでに普通の建築用材になっていたことがわかる。そうするとBを待たずにCがあらわれても不思議ではない。この場合，3層のうち一番上層の，石と煉瓦をつかったという壁が，Bであるのか，Cであるのか一切不明であるから，BCの前後關係もはっきりさせることはできない。また，Cにおける煉瓦とBにおける煉瓦との違い，端的にはサイズに違いがあるのか，ないのか，この點がわかれば，あるいはBCの前後關係がはっきりしようが，これがわからないかぎりでは，ガンダーラにおける煉瓦はかなりおくれてあらわれるというはなはだ概括的な事實を再確認しておくしかない。そこで，第I期圓形ストゥーパがこわれたのちにあらたに建設されたShah-ji-ki Dheriストゥーパの壁面はつぎの變遷を經たことになる。

ガンダーラの寺迹で煉瓦を用材とした例はないから，煉瓦使用はかなり時代が降るものとみとめ，壁面Aだけで構成されていた時代が最初である。北西隅の圓形稜堡の最初の壁面はAであるから，この時期から稜堡はあった。ついでAによる壁面が部分的に壞れた時期があった。そうしてこわれたAを煉瓦で補修してCとし，Aの完存していた部分とともにストゥーパ壁面を構成した時期があった。Bによる壁面もこの時期に積まれたとすると，Shah-ji-ki Dheriの大ストゥーパは2時期あったことになるが（No. 3の場合に相當），Bがこの時期に存在しなかったとすると，A, Cで構成されていた時代ののち，いちど破壞があり，Bの石積法によってこの破壞部分が補修され，ACとともに壁面を構成した時代をむかえたことになる（No. 2の場合に相當）。

（2）長方形突出部（圖7）

壁面Bのきわだって特徵ある積み方はストゥーパ四面にある長方形突出部と年代のうえでおおきくかかわってくる。つまり壁面Bの造成は長方形突出部の造成と同時である。長方形突出部は方形ストゥーパ部にとりついた面の長さが15 mであるから，突出部の左右の方形ストゥーパ部の壁面は20 m足らずずつであり，長方形突出部も全體との釣り合いからいえばやや小さめであり，ほかの十字形ストゥーパと比較した場合でもそれはやや小さめである（圖15, 20, 21, 22）。十字形ストゥーパでは長方形突出部は基壇やさらに上階にのぼる階段であるから（圖15, 21），ここでは階段自體は一切檢出されなかったという點があるにしても，方形部と一聯のものであることをSpoonerもHargreavesも疑っていない（Spooner 1912 46; Hargreaves 1914 25）。普通方形部と突出部は通じて一成に造成するものだということもあろうが，とくにSpoonerが疑わなかったのは，突出部から方形部へコーナーをストゥッコ＝フリーズが通しでまわっていたからである。しかし，フリーズ面

と實際の石積み壁面とは，一般に必ずしも同時造成といえない。以下のとおりである。

以下にも引用するように，發掘者たちは長方形突出部の壁に關して，'the general roughness and unfinished appearance of the wall' とか，あるいは 'one rough wall running north and south' (Spooner 1912：45) といい，壁面の石積みについては一切言及していない。長方形突出部の積み方に關して Spooner は，南面の西側で方形部が長方形突出に出會うところの記述として，長方形突出部の壁が 'rougher wall' で，しかも「方形部の壁面にはつながらない」とのべ (Spooner 1912：43－44)，さらにこの長方形突出部の西面に關してつぎのようにいっている。

> It seemed probable from the general roughness and unfinished appearance of the wall that it had not been meant to meet the eye. This could only mean either that the side we had met was the inside of the wall, with the eastern face dressed as the exterior (which was found not to be the case), or that it was an interior or strengthening wall, and this was made to appear the more probable by the fact that the cobbles which our cutting showed to be thickly packed against its western face were definitely laid and not the mere accumulation of debris. At the point of our cutting, however, no evidence of any parallel wall on the west had been found... (Spooner 1912：44)

そうして次いで發見された 'the parallel wall' とは坐佛と壁柱を交互に配したストゥッコ＝フリーズの面のことであって，石や煉瓦を積んだ外壁面ではなかったことが注目される。また，北面の長方形突出部の東側面についても Spooner は，'one rough wall running north and south' とのべる (Spooner 1908－09：45)。このように發掘された長方形突出部の側面は，內積み，ないし控え積みとみられる記述ばかりで，はっきりとした壁面について記述はしていない。そんな rough wall の前方に，これと平行してストゥッコ＝フリーズがあったということになる。長方形突出部の壁に關するこういったすべての記述からみて，突出部には化粧壁面は全然造らず，粗積みのままであって，方形部，つまりストゥーパ本體のようには築いていなかったことがわかる。方形部の外面は ABC といった，いわば化粧壁面があったが，長方形突出部には化粧壁面がなく，あったのは粗積みの壁體の外側だけであった。そこに粗い塗裝をし，その上にストゥッコ＝フリーズをくっつけていたのである。

新規に十字形ストゥーパ建設が計劃されれば方形部と長方形突出部とを同じ用材でいちどきにつくるのであるから，その場合長方形突出部だけが粗積みで，方形部は整美な化粧壁面とするなんてことはありえない。そうするとここのありさまでは，まず方形ストゥーパがあって，その後に突出部だけくっつけ，十字形ストゥーパになったとみるのが

自然の成り行きではあるまいか。つまり第Ⅰ期の圓形ストゥーパについで造られたのはまず方形ストゥーパであり，これが第Ⅱ期である。つぎに突出部をつぎたして十字形ストゥーパとし，第Ⅲ期をむかえたと考える。これを確かめるために壁の塗装やストゥッコ＝フリーズをつぎに檢討することにするが，そのまえに壁面の積み方のうちで煉瓦を含んだBがこの地方の歷史のなかでどこに位置づけられるかをみておきたい。

（3）壁面Bと Late semi-ashlar 積み

タキシラの，Bに近似する石積み法 Late semi-ashlar 積み（圖10）は，タキシラの佛寺では最末期にはじめてあらわれる石積みで，Bhallar や Bhamala 寺全體の石積み法である（Marshall 1951：Vol. 1, 390；1960： 178－179）。また Dharmarajika では主塔の伏鉢の壁面（Marshall 1950：Vol. 3, Pl. 48, b）の一部，主塔の北東にある僧坊の一部やそこに至る道沿いの巨大な塑像をまつった祠堂群，またM6をはじめとする主塔周圍の堂塔につかわれ，さらに Pippala と Jaulian でも最末期につかわれた。タキシラの石積みの變化をほかの地域にあてはめて，その地域の佛教寺院の編年に使うことは，Allchin（1968： 28）もいうように，確かに危險かもしれないが，Shah-ji-ki Dheri にとってかなり重要であるのは，この石積み法が，ほかでもない最終段階において，タキシラでつかわれていることであり，佛教の末期という點ではタキシラでもガンダーラでも同じだからである。問題はむしろ末期に對する絶對年代の問題である。Marshall はこの石積み法を5世紀末にあてた。460年ころガンダーラやタキシラに侵入したエフタルが佛教寺院を蹂躙したから，佛教が凋落した

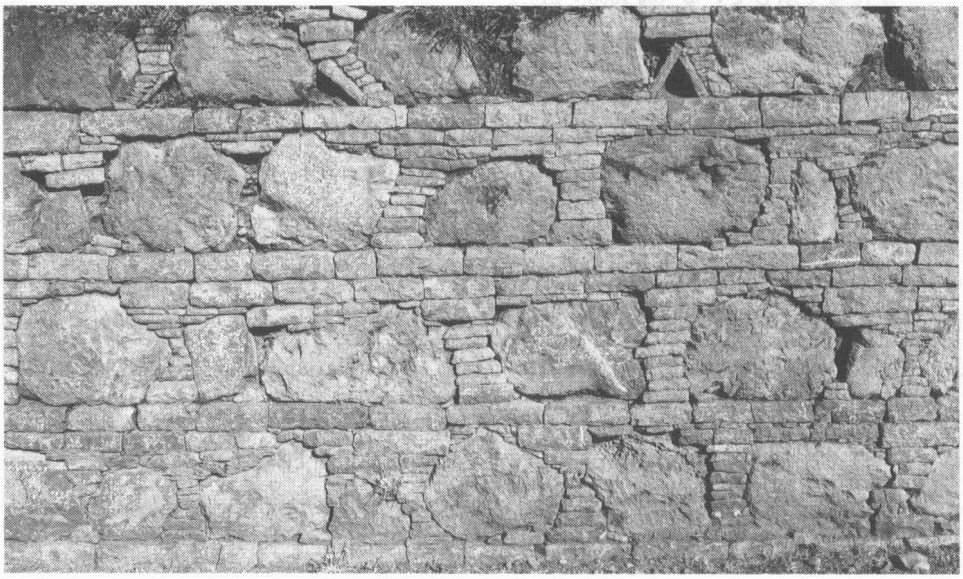


圖10　Late semi-ashlar 積み，Bhamala 僧坊東側中央室內壁　タキシラ（寫眞：桑山）

と Marshall はかんがえたからである（Marshall 1918：17－18；1921：17－18；1936：20；1951：76；1960：38－39)。

Marshall はタキシラの Dharmarajika 北東の僧坊 J で異なった 2 タイプの人骨が不自然なかたちで出土したことに對していい加減な解釋をした（Marshall 1951：287－290)。洛陽伽藍記卷 5（城北）の宋雲宅の記事（周 1963：210）には，ガンダーラのエフタル王が殺戮をこのみ，暴虐な性格であって，カシミールと戰爭中であるとしている。

> 爲歇達所滅。遂立敕懃爲王。治國以來。已經二世。立性兇暴。多行殺戮。不信佛法。好祀鬼神。國中人民。悉是婆羅門種。崇奉佛教。好讀經典。忽得此王。深悲情願。自恃勇力。與罽賓爭境。連兵戰鬪。已歷三年。... 王常停境上。終日不歸。師老民勞。百姓嗟怨。

また大唐西域記卷 4 の磔迦國の條にはエフタルの王と目されるミヒラクラの殘虐な行動や破佛行爲が傳說として語られている（章 1977：84－86)。タキシラの出土狀況はエフタルによる僧徒虐殺の證據だとし，これを擴大してガンダーラ佛教破壞はエフタルの侵入によるとでっちあげたのである。洛陽伽藍記の記事はエフタルがガンダーラへ進出した當時のことではなく，50 年ほどのちのガンダーラを描寫しているのであり，また殺戮を好むとはいうが，佛僧を殺戮したり，佛寺を破壞した記事はなく，Marshall はこれを Chavannes (1903) によって讀んだのであろうが，記事を全然正しく理解していない。大唐西域記の說話は諸種の傳說が混在し，到底歷史事實などといえる類ではない。洛陽伽藍記は宋雲慧生往訪當時（520 年ころ）佛教が依然として活況を呈している狀況をスワートやガンダーラの條でいかんなく示している（周 1963：213)。

> 復西行三日。至佛沙伏城。川原沃壤。城郭端直。民戶殷多。林泉茂盛。土饒珍寶。風俗淳善。其城內外。凡有古寺。名僧德衆。道行高奇。城北一里。有白象宮。寺內佛事。皆是石像。莊嚴極麗。頭數甚多。通身金箔。眩耀人目。

しかし大唐西域記では玄奘當時（629 年ころ），往時さかえたガンダーラ佛教寺院の荒廢をのべている。だからガンダーラ佛教の衰亡があったことは事實だが，それはエフタル勢力退潮後におこったのである。エフタルは 550 年代後半から 560 年代にかけて衰退した。手前勝手な Marshall の解釋はどうしたわけかだれも批判しなかったばかりか，Marshall 嫌いな Wheeler（1949：10－11）でさえ認めてしまった。Marshall 說を認めるかぎりガンダーラとその周邊の歷史をただしく理解することはできないから，ことあるごとにガンダーラ佛教の停滯に關する歷史狀況をのべたててきた（桑山 1983；1990：91－162；Kuwayama 1987；1989：90－111；1990：964 ff.)。ここでもまたいきがかり上それを述べねばならないが，要點だけ記すと次のとおりである。

エフタルはヒンドゥークシュの北側の本據地からその東脈を通っておそらく 470 年代

にガンダーラやパンジャーブに進出した。本據地とガンダーラはかれらの支配によってむすばれるとともに，その息の下で東脈を横斷し中央アジアへむかう遠距離貿易は安堵され，ガンダーラに蓄積された富は東西 100 km の平野に四つもの都市を維持した。エフタルのガンダーラ進出の目的は遊牧國家の常道，ガンダーラにおける徵稅であったはずであり，侵入して破壞してしまったらもともこもない。したがってこれはエフタルのみならずその前のクシャーンについてもおなじであったはずであり，林立する佛教寺院とガンダーラ佛教の繁榮はかれらの支配の間は永續したのである。ところがエフタルが本據地で西突厥に 550 年代後半から 560 年代にかけて討滅されると，すべてが狂った。ガンダーラのエフタルも立場を失って勢力をおとしたが，それにも增してガンダーラが打擊をうけたのは，エフタルにかわって山脈の北の主人になった西突厥がガンダーラやパンジャーブに入ってこなかったからである。永續した支配パタンは一擧にここに破れ，空白がガンダーラとその佛教を襲い，漸次佛教も瓦解したのである。寺寺は玄奘のとき，629 年前後でさえもまだ荒廢していた。しかし政治の方面ではこの空白のなかから，インダスの東ではエフタルと對峙していたカシミールがカールコータ Kārkoṭa 朝の勃興とともに南下して支配權をにぎることとなり，インダスの西ではカーブル河流域を中心にキンガル Khingal 朝が勃興した。

7 世紀はじめには既にエフタル以前とは違った動向をしめしつつ佛教は息を吹きかえしていた。このあたらしい傾向はエフタル支配以前とはかなりことなった形をとってあらわれた。それは 8 世紀にむかって上昇し，11 世紀にはおとろえていく（Kuwayama 1987; 1989：89－120; 1990：964 ff.)。エフタルを境に前後を舊新とよぶなら，片岩やストゥッコの小彫刻で飾ったいわゆる「ガンダーラの佛教寺院」は 560 年代までの舊佛教であり，泥像やテラコッタ，あるいは巨像，巨石といった文化をもつ寺は新佛教の文脈である。舊佛教時代に佛寺は比較的規模の小さいタイプがめったやたらに建設され，數多くあったが，新佛教時代には各地方で特定の寺が大規模化し，數は限定されたらしい。Marshall が最末期にあてた寺の文化は新佛教の文化であり，Jammu の Akhnur 寺やカシミールの Ushkar 寺で多用されたテラコッタと深くかかわる煉瓦の使用も，このなかから現われた現象である。タキシラの末期の石積み法 Late semi-ashlar 積みは，したがって新佛教の文化であることはあきらかであり，これと酷似している Shah-ji-ki Dheri の壁面 B も，形式のみならず，煉瓦をふくむという用材の點からも，560 年代以降の文化に屬しているとみなければならない。

3．基部まわりの塗裝とストゥーパの造り替え

壁面にそって飾ったストゥッコ＝フリーズのうち殘存していた部分を報告の記述から

圖 11　西面の長方形突出部の北東隅　左端に方形部壁面とその塗装がみえる

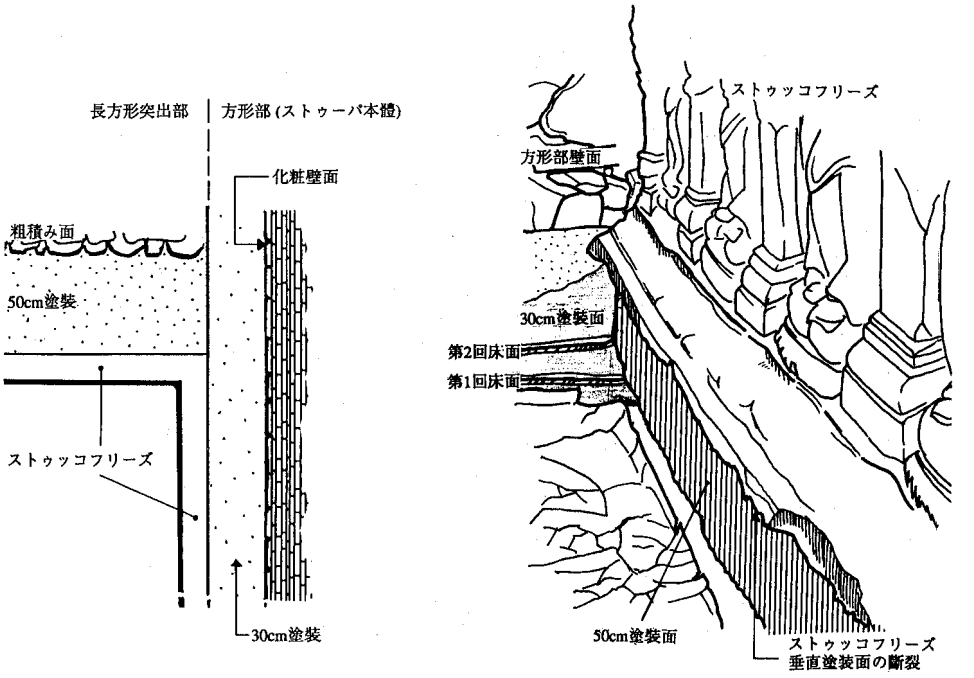


圖12　ストゥッコフリーズと塗装と床面との關係　左は平面でみた築造順序，右は圖11による
その立體圖（桑山作製）

讀み出すと，（1）南面長方形突出部の西面の一部，（2）西面長方形突出部の南東隅，（3）西面長方形突出部の北面から北東隅，（4）北面突出部の西面の四箇所である（圖7）。そのうち Spooner と Hargreaves が公刊したフリーズの寫眞はわずか（3）の1枚だけである（Spooner 1908－9：Pl. XIV, a）（圖11，12）。これをみると，フリーズは刳形にのっている。刳り形は凹部（scotia）だけであり，そこから床面へ向けて基底部にあたる垂直面がつづいている。しかしこの垂直面は上端の，凹部に近いところだけのこり，以下は壞れてしまっている（圖12右。「ストゥッコ＝フリーズの斷裂線」參照）。壞れているからこのストゥッコ＝フリーズに對應していた床面もこわれて，いまはなく，寫眞にはあらわれていない。一方，壞れたためにあらわれたのが，このストゥッコ＝フリーズに先立つ一時期前の塗裝面である（圖12右。「50 cm 塗裝面」參照）。一時期前の塗裝面に對應していた床面もいまはないが，床との接觸面は觀察できる。つまり寫眞で乾燥してヒビ割れのみえる床とストゥッコ＝フリーズが壞れたレベルとの間に垂直の塗裝面があるが，この塗裝面が床と接していた痕迹がいくつか認められるのである。ストゥーパ側（圖11の左端中央，圖12の「第1，第2回床面」參照）では水について乾燥したヒビ割れのすぐ上に1回，そのすぐ上にもうひとつ，2回目のものがみえる。突出部側（圖11，12右）では，ストゥーパ側の2回目に對應するものだけがある。つまり垂直塗裝面の割れたような下端がそれである（圖12右。「50 cm 塗裝面の下

端」參照)。ストゥーパ側のふたつの痕迹のうち，2回目のものは突出部の床に對應するものであり，突出部側では塗裝は一回かぎりであったことがわかる。すなわちストゥーパの方形部ではそれに對應する床は2回あったが，突出部では1回であり，そのあとでストゥッコ＝フリーズができ，それに對應する床面も當然あったということになる。この觀察からすると，すくなくとも大ストゥーパの基底部にはストゥッコ塗裝が3回認められ，坐佛と壁柱とを交互に配したストゥッコ＝フリーズ裝飾はこの3回のうちの最終のものであり，これがShah-ji-ki Dheriストゥーパの最後の塗裝となる。

ここで長方形突出部の周緣部がどんな立面だったかを記しておこう。Hargreaves (1914：26-27) はつぎのように記述する。

> Spoonerはフリーズのうえに舖裝面のような性格のものが發見されるのではないかと考えた。その考えが正しかったことがわかった。北面の長方形突出のフリーズの上方，1.35 m (4.5 ft) のレベルで，長さ2.925 m (9 ft 9 in)，幅1.8 m (6 ft) の，南北にながいストゥッコ塗裝面がみつかった(5)。その外緣はmodillion cornice (裝飾持ち送り軒蛇腹)，內側には4基の長方形の小さいストゥッコ造りの構造物の基部 (the bases of four small oblong stucco structures) があり，おおきさは48.57 cm (19.1/2 ft) x 25 cm (10 in) であった(6)。その構造物にかかわるものとして小ストゥーパの傘蓋部ににた圓錐形の遺物が出土した(7)。しがってBorobudurやBodh Gayaのように，小さいダーゴバが大塔を飾るために多分つかわれた。

Hargreavesは，「the discovery, at a height of 4.5′ above the frieze on the northern projection, of a stucco platform, 6′ wide and extending 9′ 9″ from north to south」と記していて，4.5フィートがフリーズからの高さのように讀める。しかしHargreaves (1910-11) のPl. XIV, aをみるとストゥッコ＝フリーズのすぐ上まで發掘されていて，フリーズの上に被っていた土は取り去られているから，フリーズの上端から4.5フィート測ったというのではなく，フリーズの下端あたりから測った高さである。要するに，ほんとうの高さはわからないが，北面の長方形突出の西側の面は，ストゥッコ＝フリーズの下端から上端の軒蛇腹まで，高さは大體135 cm，軒蛇腹から內側へ水平に180 cmほどの幅のストゥッコ舖裝面があった (圖6左端)。そうしてストゥッコ舖裝面の軒蛇腹と反對側に，4基の長方形の小さいストゥッコ構造物の一番下の部分が殘っていたのである。長方形の小さいストゥッコ構造物はストゥーパといえるであろうか。圓錐形の遺物が傘蓋を想起させるものとしているが，ストゥーパの傘蓋とはいいきれないし，長方形のストゥーパというのもストゥーパにそぐわない。ふつう十字形平面のストゥーパでは長方形突出は階段部であるが，階段にそってそんなものがあったというためしがない。

長方形突出部の側壁の在り方をHargreavesから得た上の事實から記すと，こうであ

る。ストゥッコ＝フリーズのある面がそのままま っすぐたち上って突出部の全側壁を成していたのではなく，裾回りに高さ 135 cm はあるストゥッコ＝フリーズがあり，その上端は軒蛇腹で，そこから 180 cm 幅の水平舗装面となる。軒蛇腹と反對側の端からなんらかの構造物が立ち上がっていた。135 cm の高さの側壁に對し 180 cm の舗装面ということは，この長方形突出部の外周が大ストゥーパ全體に對してかなり低い基臺に支えられていたような外觀であったことになる。

ところが，北面を發掘した Hargreaves は，ストゥッコ＝フリーズが全周圍を覆っていなかったことをほぼ確認して，おおよそつぎのようにのべている。

> 北壁は部分的に殘っていてその大部分は長方形突出部の西側にある。突出部西面には 7.35 m (24 ft 6 in) の長さで坐佛と壁柱のフリーズがあった。北の壁と突出部が交わる點からフリーズは西へ 3.15 m (10 ft 6 in) のびている。しかしよく觀察すると，本當は石と煉瓦の壁は 52.5 cm (1 ft 9 in) だけフリーズのうしろ側にあり，フリーズは西に 3.15 m のところであきらかに角になっている。Spooner は方形ストゥーパの壁はどこも無裝飾だったと記す一方で，當初フリーズは壁全體をまわっていたのだと考えている。フリーズが突出部の西面からストゥーパ本體の北の壁へと曲がってつづいていたのはあきらかに事實であるが，フリーズの西端は壞れていたのではなくて刳形がそのまま壁の前側で見つかったのであるから，フリーズがストゥーパ壁全體におなじようにあったとする Spooner の見方には證據がない。さらに，西面の突出部の南東隅のストゥッコのフリーズを檢討すると，殘念ながらこの位置でそれはこわれているが，壁（石と煉瓦の）からはなれて前方にあることはわかる。したがって，突出部を飾ったフリーズは方形ストゥーパ自體の壁へはほんの短い間つづいていたようである (Hargreaves 1914：26)。

同じように西面の突出部の南側では，ストゥッコ＝フリーズは方形部に沿って約 2.1 m までつづいき，こわれていた (Hargreaves 1911：13)。ストゥッコ＝フリーズはストゥーパ全體をまわっていたのではなく，かなり局部的に施された。しかし局部的といっても，不規則に施されたというのではなく，突出部の側壁は全部，そうして突出部を中心にストゥーパ本體へも大體左右對稱にまわっていたらしい。つまり突出部からストゥーパ本體へとまわってきたフリーズは途中でおわってしまう。Hargreaves (1914：26) は，突出部の壁體とストゥッコ＝フリーズとの間には 52.5 cm の厚さの塗裝ががあったと報告している。ガンダーラのストゥーパでは普通は石積みの壁に直接ストゥッコ＝フリーズがついて外裝飾としている。そうではなく，壁にはまず分厚い塗裝があり，塗裝にストゥッコ＝フリーズをくっつけていた。壁は壁としてつづき，フリーズはフリーズとしてつづいてある點で內側へ，壁の方へ，直角に折れ曲がっていた。そんなことができたのもこのような

厚い塗裝が壁とフリーズの間にあったからである。ストゥーパのこんな裾周りはきわめて異例であり，類例を缺く。それならこの事實を實際の場面でどう解釋すればよいのであろうか。つまり壁とフリーズ面との間の乖離は認めるにしても，なぜストゥーパを一周させず，突出部と，ストゥーパ本體ではこれに近い部分とにしか，フリーズを飾らなかったのか。なぜそんな飾り方しかしなかったのであろうか。その答えをいまのところおもいつかないが，こんな變則的な塗裝が，前節でのべた長方形突出部と方形部とにみられた石積みのちがい，つまり突出部は粗積み，方形部は化粧積みというちがいと，おおいに關係がありそうである。

方形部，つまりストゥーパ本體に施された塗裝についてSpoonerはつぎにように述べている。

> It is perfectly demonstrable, where the western projection joins on, that in the case of the main wall the surface was coated with a layer of earth (probably mixed with chuna) only about one foot thick. This rested on a kind of step of similar thickness skirting the whole wall, and over this coating of earth was laid the decorated facing of stucco, with the seated Buddha figures between Corinthian pilasters. In other words, the plaster decoration was very closely joined to the smooth surface of the wall, and has peeled off and disappeared in consequence. In the case of the projections, however, the depth of the earth intervening between the actual wall and the ornamental stucco facing is much greater. (Spooner 1912 : 47)

Spoonerが例示したのは西面の突出部がストゥーパ本體と接續する部分についてである。ストゥーパ本體と長方形突出部との違いは，壁だけではなく，そこに施された塗裝にも大きな差があった。ストゥーパ本體では，石積み壁面に30 cmの厚さの土の塗裝があり（圖12），それは30 cmの厚さの「一種の階梯狀のもの」の上にのっていた。この階梯狀のものは基底部全體にまわっていた。その滑澤な塗裝面にストゥッコ＝フリーズをさらにはめていた。これに對する長方形突出部は，內核の石積みのまま壁面はつくらずにすぐに52. 5 cmの厚さで土を塗った（圖12左）。一方，ストゥーパ本體の北壁面のひとつの大石に精細な白色の漆喰が薄く塗ってあったことから，方形部はこの手の漆喰塗裝，突出部とそれに續く方形部はストゥッコ＝フリーズであったと，Hargreavesは考えている(8)。

幸いわれわれはSpoonerのいう場所の寫眞をもっている（圖11）（Spooner 1912 : Pl. XIV, a)。これとSpoonerのいわんとするところを比べるとつぎのことがわかる。塗裝と床面との關聯についてさきほど觀察したところによれば，Spoonerが 'a kind of step' と表現したところは，ストゥッコ＝フリーズをおくまえの段階の垂直塗裝面に水平についた痕迹の

ことで，床との接線である（圖12右。「第1，第2回床面」参照）。圖11の寫眞にみるように，ストゥーパ本體ではそれがふたつみえるから階梯狀であり，Spooner はこの痕迹の意味を理解できなかったから，a kind of step などといった表現をしたのである。

この寫眞の垂直塗裝面で方形部と突出部とが交わるところをよくみると，方形部の方（寫眞では中央左端）に蔭がでている。垂直塗裝面が手前（突出部）から向こうの方形部へスムーズにつながらず，そこで切れているから，蔭が出たのである。この切れ方から，突出部は方形部より後で塗裝されたことがあきらかである。それで方形部の塗裝の厚さ 30 cm と，突出部の 52.5 cm の違いの意味が理解できる。一回でおこなった塗裝なら，厚さにこんなおおきな差をもたせるはずがない。方形部の厚さ 30 cm の塗裝は方形部にもともとついていたもの，突出部の 52.5 cm の厚さの塗裝は突出部を方形部につけたしてから突出部に施した塗裝である。そうしてこれら前後關係にある塗裝面に附着した床面痕迹を考慮すると，つぎの順序で基底部まわりはつくられたことがわかる（圖12参照）。

まず，（1）方形部の化粧壁面に 30 cm の厚さの塗裝が施され，第1回の床面が形成されたであろう。垂直塗裝面に殘された痕迹からみて床面も垂直面とおなじ材料で塗裝されていた。つぎに，（2）長方形突出部が粗い石積みで造成されて方形部に附加された。このとき粗い壁には化粧壁面をつくらずに直接 52.5 cm というすばらしい厚さの塗裝がなされ，同じ材料で床面もまた塗裝され，床レベルはさきの時代より高くなった。圖11では手前の塗裝面の下端にみえる切れ目が，床との接線である。この線を奥へたどると，向こう側にもまわっているのがわかる。これはあらたにできた突出部が先に存在した方形部と同じひとつの床を共有し，同時につかわれていた證據である。最後に，（3）52.5 cm の塗裝の上からストゥッコ＝フリーズを飾った。それは突出部を中心としてストゥーパ本體（つまり方形部）にもある長さでつづいていたが，全體にまわってはいなかった。このフリーズは刳形の少し下で切れてなくなっていて，床に至るところまで知ることができない。このような切れ方は剝落したことを示すものであり，どんな遺迹の發掘においてもしばしばおめにかかる。つまりひとつには，先にあった塗裝と後から施したフリーズの塗裝との間に質や乾燥の程度で差があると，こんな剝離を示す。このことはコンクリート打ち放しの壁面に時間が經過してから改めて別の塗裝がしにくいこととよく似ている。もうひとつは，とくに床面が垂直面と異なった材質のものである場合ある期間放置されると，床から滲み上がってきた水分によって床に近い部分がもろくなり，剝落してしまうのである。だから，剝落した垂直面に對應していた床面は，垂直面の塗裝とはことなるもの，つまりこの場合は煉瓦敷きであった，ということがわかる。ストゥーパまわりに煉瓦敷があったことは Spooner の最初の發掘でわかっている。

第2，第3節から判明したことは以下のとおりである。長方形突出部がストゥーパ本體

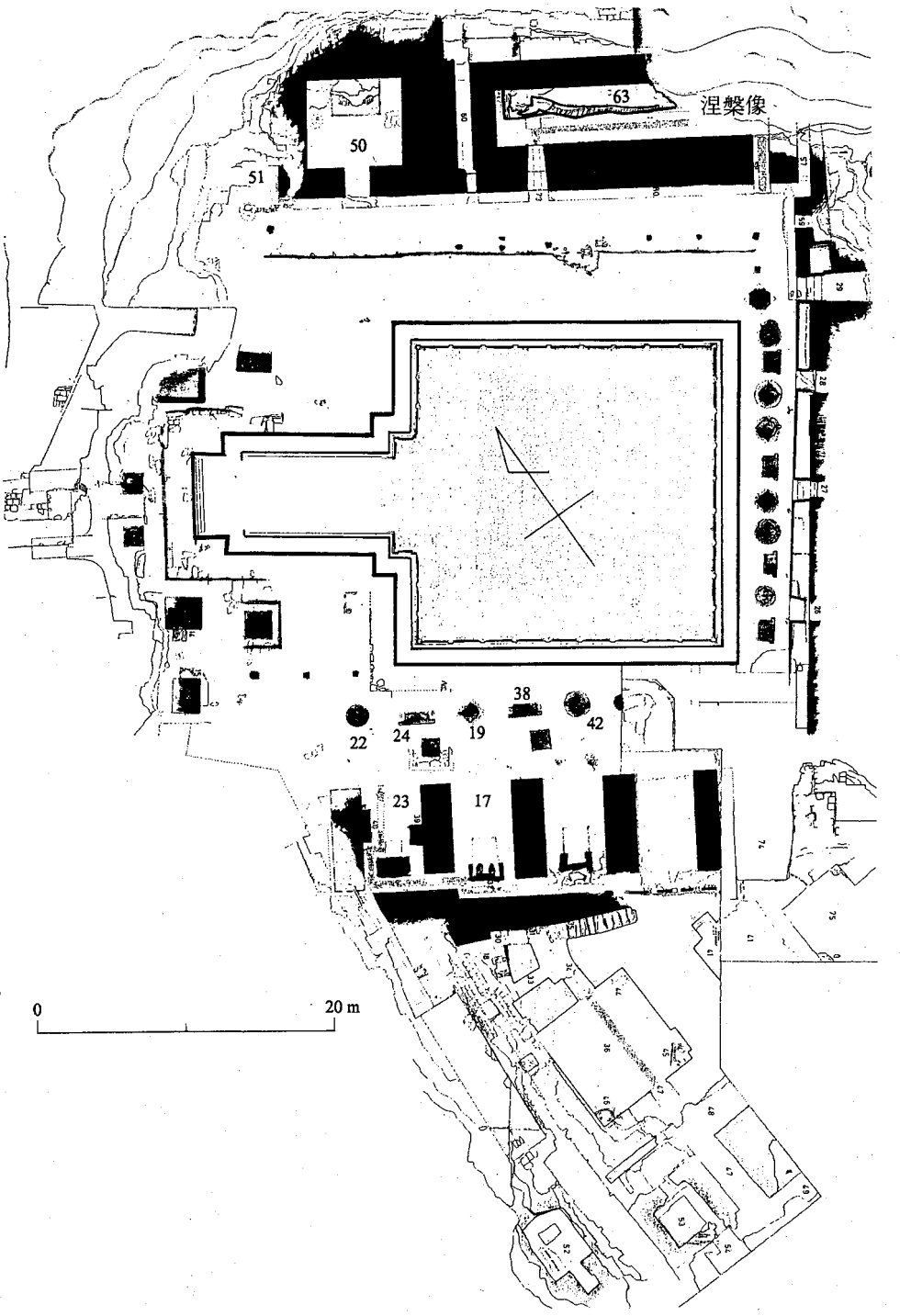


圖 13　Tapa Sardar 寺院のストゥーパとその周圍における後期の建て替え（[Taddei 1985] に依り桑山改描）

である方形部とともに建築されたのなら，すなわち，十字形平面が最初から計劃されたのなら，長方形突出部だけ粗積みのままにしておくはずがなく，全面化粧積みだったはずである。だから，はじめに方形部だけを基壇とするストゥーパがあり，つぎの段階で長方形の突出部を四面に造り出し，十字形平面となったのである。十字形にするため，長方形突出部をあらたにつくったのであるから，外面の塗装も前の方形ストゥーパとは當然違ってくる。雙方の間に時間差があるからである。方形ストゥーパに厚さ 30 cm の塗装がしてあったところへ，突出部が附け足され，そこには 52.5 cm の塗装がなされた。この狀態が「ある期間」つづいた。それを證據だてるのが兩方の塗装面に附着している，床と接していた痕迹である。それから後にストゥッコ＝フリーズを取り附けた。突出部を造成して分厚い塗装を施してからストゥッコ＝フリーズを取り附けるまでの期間はおそらくかなり長期であったろう。そうでなければフリーズの垂直面がこんなに剝落してしまうはずはないからである。このフリーズをあたらしい形のストゥーパ全體に施すのはおおきな勞力を要する。その手間を省いたのが突出部から少しだけ方形部の方へまわりこんで施したのにとどまった，ストゥッコ＝フリーズの取り附け作業である。これは實に急な仕事である。

それなら，さきにのべた石積み法 A B C は方形ストゥーパに施されたものであるから，すべて方形ストゥーパ時代のものであって，十字形ストゥーパ時代のものではないのかというと，そうではない。壁面 A は石ばかりで積んで，しかもタキシラの Diaper に近似しているから方形ストゥーパ建築當時の石積みである。ガンダーラでもタキシラでもスワートでもストゥーパに煉瓦使用の例はないから，Shah-ji-ki Dheri の方形ストゥーパの石積みは A のやり方で一回だけで，B C 以前である。石による補修はその間あったかもしれないが，これを知ることはできない。方形ストゥーパは舊佛敎時代にかなり長期にわたってつづき，ついに放棄されてこわれたのは，さきにのべたこの地方の歷史に照らせば，政治勢力であったエフタル衰退後におこった佛敎護持の低下のなかの自然の成り行きであった。そうして新佛敎の上昇とともに十字形ストゥーパになったのであるが，このときの改修で煉瓦をまじえた B や C の壁面ができたのである。方形部壁面（A）が完全に崩れていた部分はその當時の石積み B で積み直し，A が一部こわれていたところは煉瓦だけで補修して C となったのである。このようにストゥーパ本體は方形ストゥーパ時代からのものであり，補修をうけつつ十字形となり，きわめて長い時間使われた。ストゥーパがかなり早い時代にできたときから時代をこえて長期に使用され，新佛敎時代に再び使用され，最後の段階まで及んだ例はほかにもあり，Tapa Sardar はその好例である（圖 13）。ここでは主塔は十字形に改築されなかったけれども，寺內には小塔として十字形ストゥーパが 9 基つくられ，7－9 世紀のあたらしい段階の様式に變化している（Taddei 1968：112－114；Taddei and Verardi 1984：43；Kuwayama 1991：95－99）。

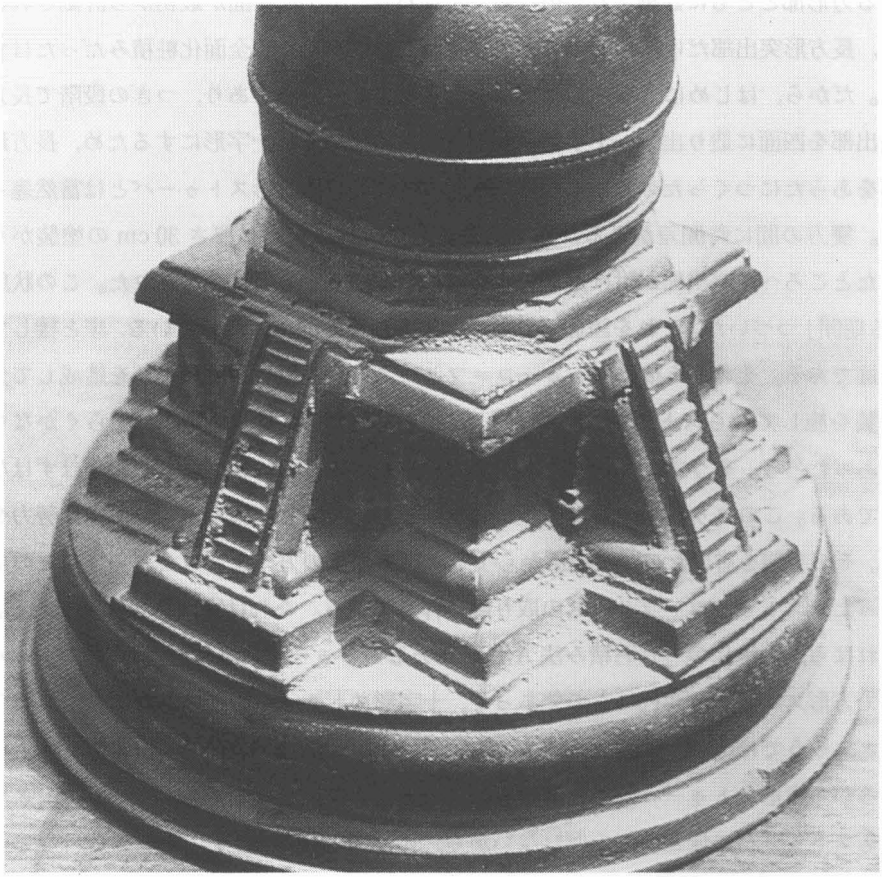


圖 14　青銅製ストゥーパモデル　Peshawar Museum（Fischer 1989 A）

壁面 B は壁面 C とともに煉瓦が多用され，また Bhamala をはじめとするタキシラ地域における末期の石積法と時代上關聯するから，この積み方は十字形ストゥーパとしたときのものである。また十字形ストゥーパへの變化がほかの地域の十字形ストゥーパの造立と同じ歷史の文脈のなかにあることは疑いないから，B C は突出部を造ったときのもの，十字形ストゥーパを造ろうとした當時のものである。十字形ストゥーパの建設は，殘っていた方形ストゥーパの周圍の壁面を壁面 B や C のように補修し，長方形突出部を粗積みの壁體だけで造成しておこなわれたのである。さきに ABC 3 種の積み方の組み合わせをのべたが，（3）の場合がもっとも事實に近いことになろう。

ここで突出部にかかわる建築の細部についてふれておく。Shah-ji-ki Dheri の平面圖にはあらわれないが，ほかの，とくに十字形ストゥーパではよくみかける細部である。それは長方形突出部が方形部に接續する部分である。長方形突出部を直接方形部に接續するのではなく，長方形突出部の根本の兩側に一旦出っ張り壁をつくり，平面形を凸形にして接

續している（圖15, 20, 21, 22）。出っ張りにはストゥーパによって大きく出っ張ったものときわめて小さいものとがある。凸形は階段が一面だけにしかない普通の方形平面のストゥーパにもあるものがある（圖13參照）。金屬製や，浮き彫りで表現されたもの，あるいはShah-ji-ki Dheriの東面で出現したものなど，小型の十字形ストゥーパでは，凸形にしたもの，していないものの兩種があるから，かならずしも凸形をほどこさなければならなかったというものでもないらしい。しかしこれらの小型ストゥーパの一例であるPeshawar博物館のものを見ると（圖14），Shah-ji-ki Dheriの平面圖ではなぜ凸部が認められないかがわかる。この小ストゥーパでは凸部はきわめて小さく，階段の奥の脇に，まるで壁柱のような形で，ひっそりと附いている。すなわち，基壇の立面全體には造らず，基壇の下部の刳形の上に造っているのである。Shah-ji-ki Dheriの平面圖は基壇の一番下のプランであり，この小ストゥーパのようにつくったなら，凸形はこの平面圖にはあらわれてこないのである。Bhamalaの主塔でも實際に基壇に添う凸形の平面形はストゥーパ全體に較べるといちじるしく小さい（圖15）。したがってShah-ji-ki Dheriでも凸形が存在していた可能性はおおきい。

4．圓形稜堡の2時期と方形ストゥーパの年代

圓形稜堡には，壁面をAで積んでいた時代とCとした時代とがあり，Aは方形ストゥーパの當初の石積み法であることから，圓形稜堡は第Ⅱ期の最初からあったこと，そうしてその建設年代は5世紀中頃にPuruṣapuraにいった道藥の傳の記事から推定できる。ここではこのことについてのべる（圖5參照）。

Spoonerは北西隅の圓形稜堡發見の樣子をつぎのように記している。

> But the most interesting feature on the west was a discovery of a very well-preserved and very massive stone tower at the north-west corner... (Spooner 1912：45)

北西隅で稜堡が發見されたことから，對角線の一方の端である南東隅を檢査したところ，ストゥーパ南壁の東端から南に出っ張った一個の石が發見され，Spoonerはそれを稜堡のものと判斷した。つぎのように書いている。

> We had found originally one single stone on the ground-level projecting towards the south out of the eastern end of the main wall, but what the explanation of this was it had been quite impossible to guess. After the discovery of the north-west tower, of course, everything was clear. The single stone was seen to be a fragment of the south-east tower, and the appropriate curve was accordingly marked out and search made for any further traces of this

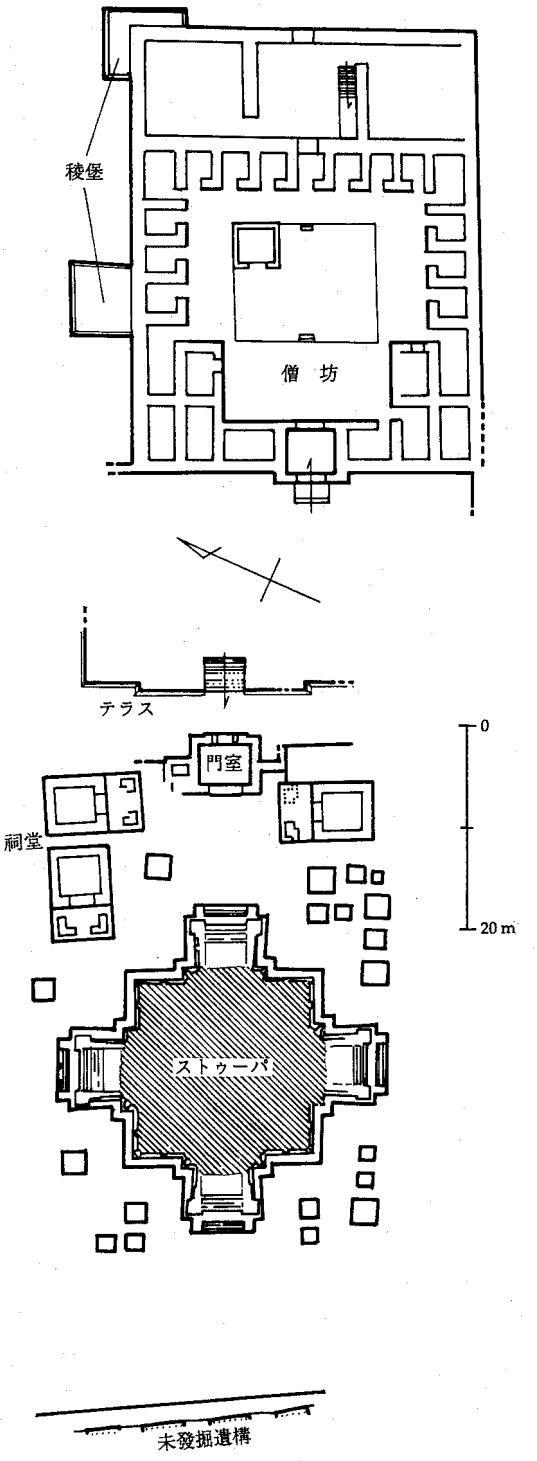


圖 15　Bhamala 寺院平面圖（桑山作圖）

lost tower which might prove to be preserved. Such traces were found, but they were very few and pitiful. Nevertheless, they were sufficient to prove the occurrence of a tower at this point... (Spooner 1912 : 45)

一方，北東隅と南西隅との稜堡については，

A portion of the main wall on the north at the western end near the north-west tower was recovered, and traces of the tower on both the north-east and the south-west also, but both were found to be badly damaged. (Spooner 1912 : 46)

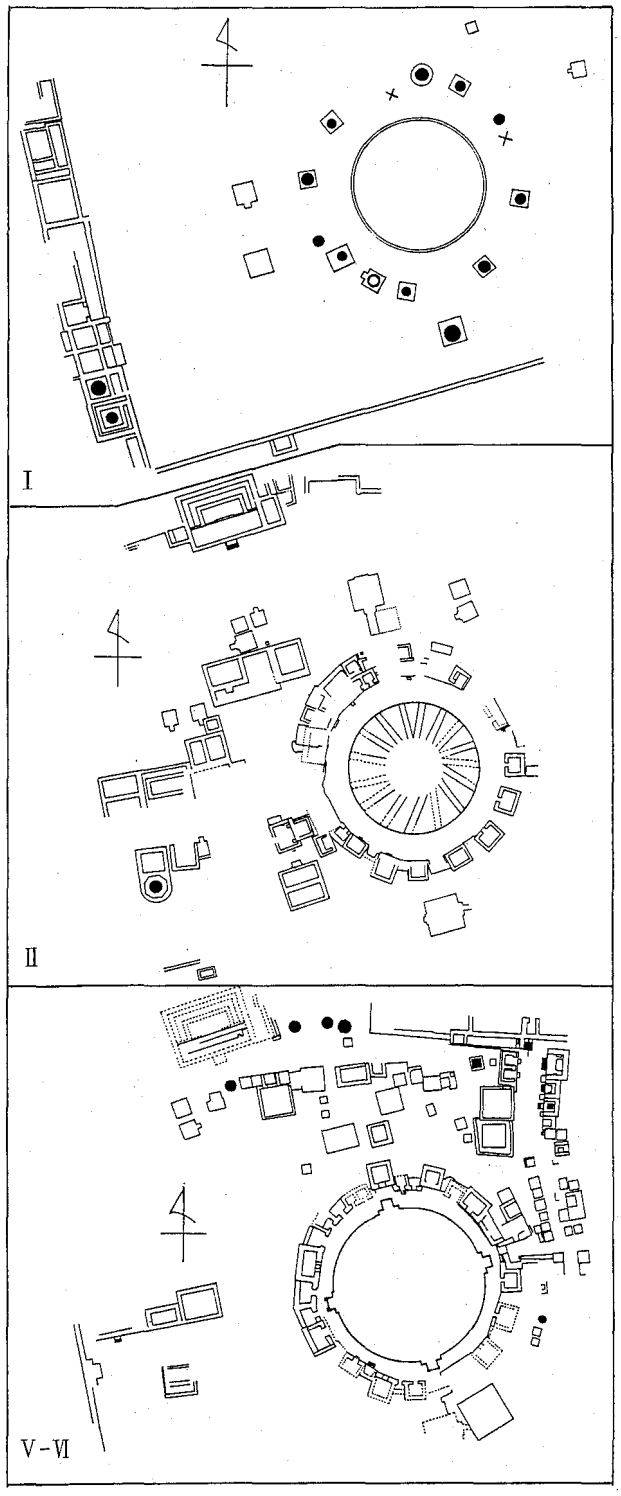
と記しているだけである。Hargreaves はこれらについてはなにも書いていない。

Hargreaves (1914 : 27) はストゥーパの東面であらわれた十字形平面のストゥーパ（基部の一邊 198.75 cm）が大塔のミニアチャであると考え，これには四隅になにも附いていないから，四隅の圓形稜堡は後に附加した可能性があるとみて，別の事實からもこの見方を補強しようとしている。すなわち，稜堡の基部の，

近くで小塔 3 基と北面に平行に走る長い壁が發見された。小塔 3 基はおかしな並び工合であり，ひとつは圓形稜堡を建てるために部分的に壞されている。こういったストゥーパ四隅の圓形稜堡は，ストゥーパ自體の現在の形の壁面と疑いもなく同じ用材，同じ技法ではあるが，最古の建築の一部であるかどうかはあやしい。それはいまのべた小塔 3 基の並び方だけではなく，當初このストゥーパの周圍を取り巻き，いまも南と西にまだ部分的に殘っている「繞道」を直接妨害するように，北東隅のものが立っているからである。(Hargreaves 1914 : 26)

車輪構造のストゥーパと方形ストゥーパとが異なった時期のものであるというのは，われわれが得た結果であって，Hargreaves は十字形平面全體を當初の建築とみているから，小塔の並び方が方形ストゥーパに平行になっていないことを奇態に感じ，またそのうちのひとつが繞道の上にあるのを不思議に思い，繞道を遮るかたちで突出した圓形稜堡部を方形部にあとからくっつけたものではないかとおもったのである。小塔 5 基を Hargreaves は十字形ストゥーパに附屬したものとみているから，このような疑問がでたのである。この點については Errington (1987) の考えも同じであるらしい。

すでに述べたとおりこれら小塔は車輪構造ストゥーパの時代のものである。圓形稜堡をつけたストゥーパを建てるとき，まえからあった小塔を壞さざるをえなかった。方形ストゥーパの建築を實行に移したとき，前の時代の遺構をきれいに整地する手續きをとらなかったこと物語っている。實際の建設に及んだとき前の車輪構造のストゥーパに附隨した小塔群がたまたままだそこにあって，圓形稜堡部の建設に邪魔であった。そこで圓形稜堡を造るに足るだけのスペースのために小塔を壞した。これは方形ストゥーパを計劃した時



I：Rubble 積みの時期

II：Diaper 積みの時期

V-VI：Late semi-ashler 積みの時期

圖 16　Dharmarajika ストゥーパの遷變（縮尺なし：桑山作製）

點ではまだ圓形稜堡を附ける計劃がなっかたことを示唆し，全體の計劃性にはなはだ乏しい建設というほかない。それはともかくとしても，さきにのべたように稜堡の壁面は方形ストゥーパの最初の建築とおなじAの壁面をもっているのであるから，建築工程のなかでは前後關係はあるが，おおきな意味では方形ストゥーパと圓形稜堡は同時の建設であることに疑いはない。壁面ばかりでなく，小塔とのきりあい關係もまたこのことを證明しているということである。

それにしても方形基壇の四角に圓形稜堡とは奇妙である。方形基壇の上面になら四隅に柱を立てた例はいくらでもある。おおくの場合柱頭には獅子像をのせていたであろう。基壇から外れたところにならばそのような建造物があってもおかしくはない。古い時代の例ではあるが，スワートのPanrにそれはみられる。ストゥーパの周圍に柱を立てまわすこともButkaraやDharmarajikaでは認められている（圖16：上段）。ここではそのような基壇の上とか外れではなく，基壇の外隅に大きな直徑のものを取り附けている。

ストゥーパ自體に圓形稜堡をつけた例はないが，Haddaの Bagh Gai（圖17：7）(Barthoux 1933：143－172)，Gul Dara Logar（Fussman et Le Berre 1976：Pls. 1, 2），Tepe Maranjan（圖17：4）(Carl 1959 A：7, Fig. C)，Shotorak（圖17：1）(Meuni 1942：10) など寺の外域につけた例には事缺かない（Kuwayama 1975：Fig. 1)。そこでこの壯大なShah-ji-ki Dheriにはストゥーパ以外にも稜堡があったことに注意したい（次節參照)。すでに記したように，Hargreavesは，ストゥーパ遺丘の西において，かれが僧坊とかんがえたマウンドの南東を1911年に發掘し，三時期にわたって相重なる遺構を檢出した（Hargreaves 1911：14 ff.; 1914：27 ff.)。一番下の遺構は方形平面を呈する煉瓦積みの柱の殘基，その上層は長い煉瓦積みの壁，一番上の層がふたつの半圓形の稜堡狀の遺構で，兩者は壁でつながっていた（圖5)。この煉瓦積みの煉瓦は40 × 22.5 × 7.5 cmで，黃色を呈していた。Hargreaves（1914：29）は，

> ... the structures at the highest level resemble in material and technique the main wall of the great stupa...

とのべ，この半圓形の遺構の素材と技法はストゥーパ本體の壁面と同巧である，といっているから，ストゥーパの外壁面のうち石と煉瓦で構成されたBまたはCの積み方，おそらくBであろう。ストゥーパの壁面にはDiaper様の石積みの時期とそれが壞れたのちに煉瓦で修繕し，まったくこわれてしまった部位をBhamalaと近似した石積みBで補塡し，あるいはCで補修した時期とがあった。したがってこれらの半圓形ないし圓形稜堡遺構も石と煉瓦でつくったというからには，大ストゥーパの壁面では十字形ストゥーパをつくったときの石積みである。Errington (1987：Fig. 8）は，大ストゥーパ四隅の圓形稜堡を含めて稜堡全體をShah-ji-ki Dheriの最終期に當てた。大ストゥーパ北西の稜堡には前

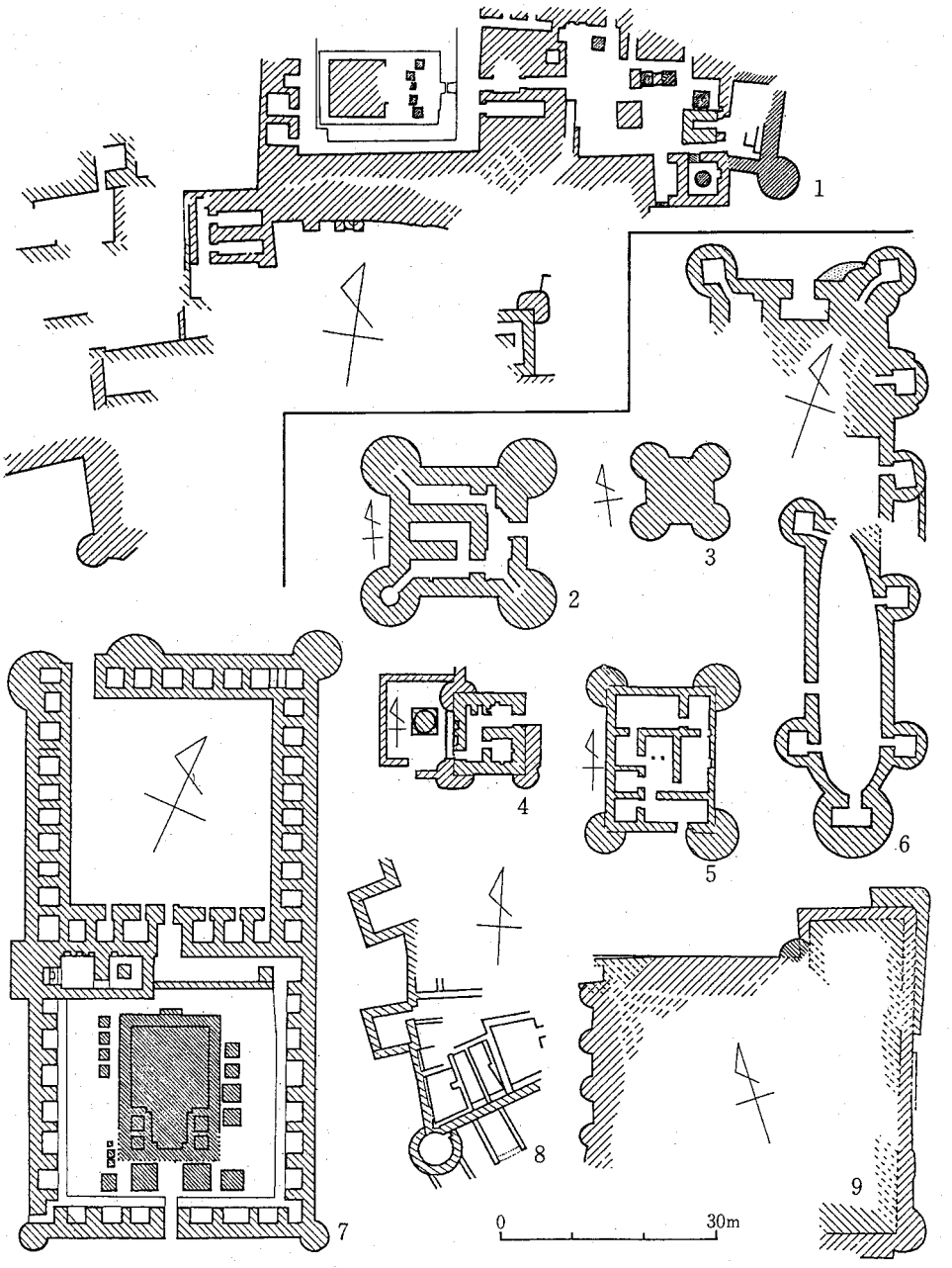


圖17　圓形稜堡をそなえた建築　1. Shtorak,　2. Begram,　3. Khair Khana,　4. Tepe Maranjan,　5. Begram,　6. Saka,　7. Bagh Gai,　8. Kohna Masjid,　9. Tapa Skandar（桑山作製）

期の石積みとその上に補修された煉瓦積があるのであるから，稜堡は末期にあらたにできたのではなく，前期石積の時代から既に存在したのであり，さらに Errington のいうような末期にもつづいておこなわれたのである。

Spooner や Hargreaves のころは半圓形稜堡を含めて圓形稜堡の遺迹はほとんど知られていなかったから，この特色ある建築は十分理解されていない。しかし，ガンダーラといったせまい地域ばかりではなく，歷史のおおきなながれのなかにこれを位置づけてみると，圓形稜堡はとりわけヒンドゥークシュ山脈の南，カーブル河流域において，6 世紀なかごろからさかんに建設されたその地域の典型的な建築である（Kuwayama 1975; 1991）。さきにあげたいくつかの佛寺のほかに，Begram（圖 17：2, 5）（Meuni 1959：Figs. L1, L 2），Tapa Skandar（圖 17： 9）（Kuwayama 1974： 7 ff., Illus. 1, 3, 4 ; 1976：6, Illus. 1, 3, 4 ; 1978：10－11, Illus. 10, 16），Khair Khana（圖 17： 3）（Hackin et Carl 1936：Pl. 1），Saka（圖 17：6）（Carl 1959 B：Fig. D）など，この流域ではほとんどすべての遺迹で圓形稜堡があり，世俗，宗教の別なく利用され，ほかの文化要素をあわせてみると，8 世紀にかけて流行したものであることがあきらかである。さらにカーブル流域以外でも，とくにスワートやタキシラの山嶽部では 9 世紀にはじまる Hindu Shah 朝時代の城砦に多くみられる。Shah-ji-ki Dheri の「僧坊區」とかんがえられた地區の稜堡や煉瓦補修後の四隅の稜堡はこういった時代にかかわる。

圓形稜堡が流行したのはこういった遲い時代であるが，もっと古い時代にも實はあった。Tapa Skandar ではこれら一聯のおそい時代にあたる II 期をさらにさかのぼる時代，I 期において，すでに半圓形稜堡はつかわれていた（Kuwayama 1978： 9－11）。I 期の年代は十分にあきらかではないが，I 期の建築は遺迹のあちこちで基礎をわずかに殘すか，あるいは關係がつけがたい程度にきわめて悪い狀態となって發見され，II 期の開始以前に相當長い期間かえりみられなかったことを示している。I 期と II 期との長い空白の證據のひとつに，土器の根本的な相異があり，I 期の土器には Begram II 期を特色附ける「黒色彩紋臺附き杯」（Ghirshman 1946： 56 ; Pl. XL, B. G. 348, 117, 150, 207, 107）の斷片が混入している。われわれは Tapa Skandar II 期の開始を 6 世紀なかごろと認め，Tapa Skandar I 期をだいたい Begram II 期と平行とみている（Kuwayama 1991）。Begram II 期の年代が發掘者である Ghirshman のいうとおりかどうか，これはさらに檢討を要するが，いまかりに彼にしたがえば，カニシカ I 世から Vasudeva までである。この事は圓形稜堡を備えた方形ストゥーパに年代をあたえる。Shah-ji-ki Dheri の圓形稜堡もこのようなはやいころまでさかのぼりうるのである。稜堡をつけた方形ストゥーパも，したがってきわめてはやい時期に建設されたことになる。

漢文資料のカニシカ大塔は Shah-ji-ki Dheri にあらずとする積極的な理由はないから，

兩者は同一物だとみる。そうすると漢文資料の中には圓形稜堡をそなえた方形ストゥーパがいつ造られたかを示唆する記事が見いだせる。附論でのべたように漢文資料のカニシカ大塔はとくに各時代のストゥーパの實情を直接のべたとはいえないが，洛陽伽藍記の宋雲行歷記事に引用された道藥傳の記事はこの點で重要である。Hargreaves もこの記事を Beal を通じて知っていたが，年代にかかわるとはおもってもみなかったようである（Hargreaves 1914：25)。それは楊衒之が書いた「雀離浮圖自作以來三經天火所燒。國王修之。還復如故。父老云。此浮圖天火七燒。佛法當滅。」に對する注として出てくる記事である。

> 王修浮圖。木工既訖。猶有鐵柱。無有能上者。王於四角起大高樓。多置金銀及諸寶物。王與夫人及諸王子悉在樓上燒香散花。至心請神。然後轆轤絞索。一擧便到。故胡人皆云。四天王助之。若其不爾。實非人力所能擧。
>
> 王（カニシカ）はストゥーパをつくった。その工事はおわってしまったが，まだ鐵柱が殘っていて，うまくこれをのせるものがいなかった。王は（ストゥーパの）四隅におおきな高樓を建て，金銀そのほかいろいろな寶物をたくさん安置し，王，王妃，そのこどもたちはみな樓上で香を焚き，散華し，心から（鐵柱がうまくあがるように）祈願した。そうしたのち滑車で綱をひきしぼると，いっぺんですぐにあがった。それでこのあたりのひとたちはみんな，四天王のおたすけだ，そうでもなければ，とても人の力であげることのできるものではない，といっている。

「カニシカが四隅に大高樓を建てた」ことである。從來は，この高樓を鐵柱を伏鉢のてっぺんまで引き上げるための工事の一工程，つまりそれは滑車で引き上げたのであるが，その滑車とかかわるひとつの設備のようなものとみたらしく，ストゥーパに附屬する施設とはかんがえていない。高樓は鐵柱据えつけの成功を祈願する儀禮を王族がおこなうために建てたものであり，工事とは關係ない。道藥が傳えたカニシカ大塔の傳說によれば，ストゥーパの形がほぼできあがったときカニシカが四隅に塔樓を建てたとする。一方，圓形稜堡が方形ストゥーパに最初から附いていたという點は動かしがたい考古學上の事實である。傳說の四隅の塔樓と Shah-ji-ki Dheri ストゥーパの四隅にある圓形稜堡とを同一視すると，方形ストゥーパに當初から圓形稜堡を備えていたというわれわれの觀察と符合し，かつ方形ストゥーパを建設したのはカニシカだということになる。このはなしが道藥のときのカニシカ大塔の實際をもとにして當時語られていたものだとしても，Shah-ji-ki Dheri の方形ストゥーパは圓形稜堡を附けて道藥のころ，つまり 5 世紀半ばには，既に存在していたといえる。

6 世紀の Deogar (Uttar Pradesh) のヴィシュヌ寺院はストゥーパとはまったく異なった性格の宗教建築であるが，平面は基本的には Shah-ji-ki Dheri に近い (Vats 1952)。これは低い方形基壇の中央に西向きの方形神殿をもち，四面に基壇にのぼる階段の突出があり，

四隅に方形室（北西と南西のものは西に，北東と南東のものは東に開口）をつけている。四隅の突出が圓形でない點を除き，立面を考慮しないのであれば，平面としては Shah-ji-ki Dheri によく似ている。したがって Dobbins (1971：23, fn. 59) がこれを Shah-ji-ki Dheri と比較しうるものとして引くのは理解できるけれども，Shah-ji-ki Dheri は方形ストゥーパから十字形ストゥーパへと移行したのであり，圓形稜堡を備えた方形ストゥーパの比較の對象とはならず，これから年代を導き出すことはできない。

以上を綜合すると，Shah-ji-ki Dheri の圓形稜堡のうち，方形部についているものは，はじめ A の石積みで築いたから，方形部と同時の建設であり，これは道藥にしたがえば，カニシカの建設である。方形部はつぎの段階でこわれた部分を補修し，圓形稜堡は C の積み方となった。一方「僧坊區」とかんがえられた地區の稜堡や壁體は B か C で造られているから，ストゥーパの補修と同時期である。Shah-ji-ki Dheri の稜堡には古いものがまずあり，6 世紀後半以降にそれは補修されてあたらしくなった。このあたらしい段階の圓形稜堡はカーブル河流域のほかの遺迹とおなじ歷史の文脈にはいる。

方形ストゥーパの建設をカニシカに歸するなら，カニシカ大塔傳說の中心話題をつぎのように解釋することも可能である。傳說では，まず童兒がストゥーパをつくっていた。それと競ったカニシカはますます高大なストゥーパを建設する羽目になってしまったという。方形ストゥーパは圓形ストゥーパが破壞されたのちに建設された。壞れた圓形ストゥーパを方形ストゥーパは取り込むようにしてつくってある。カニシカが方形ストゥーパを建設するとき，そこに圓形ストゥーパの殘骸があり，それを取り込んでつくった。この事實がカニシカ大塔建設說話と化したのかもしれない。

5．圍壁の存在と十字形ストゥーパの建設年代

圓形稜堡に C の積み方がある以上，十字形にストゥーパが改まったときもなお稜堡は存續したが，一方 Hargreaves が「僧坊」とかんがえたマウンドの南東を發掘してえた 3 層 3 時期の遺構のうち最上層の壁面にも圓形稜堡がつかわれた。この關係から，「僧坊」東部の建築だといわれたものを見直し，十字形ストゥーパの年代をここで考える。

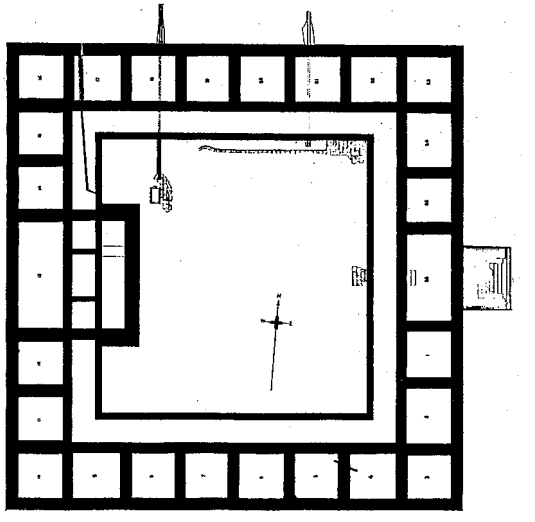


圖 18　Parihasapura の僧坊 (Sahni 1916)

Hargreaves が「僧坊」とかんがえた

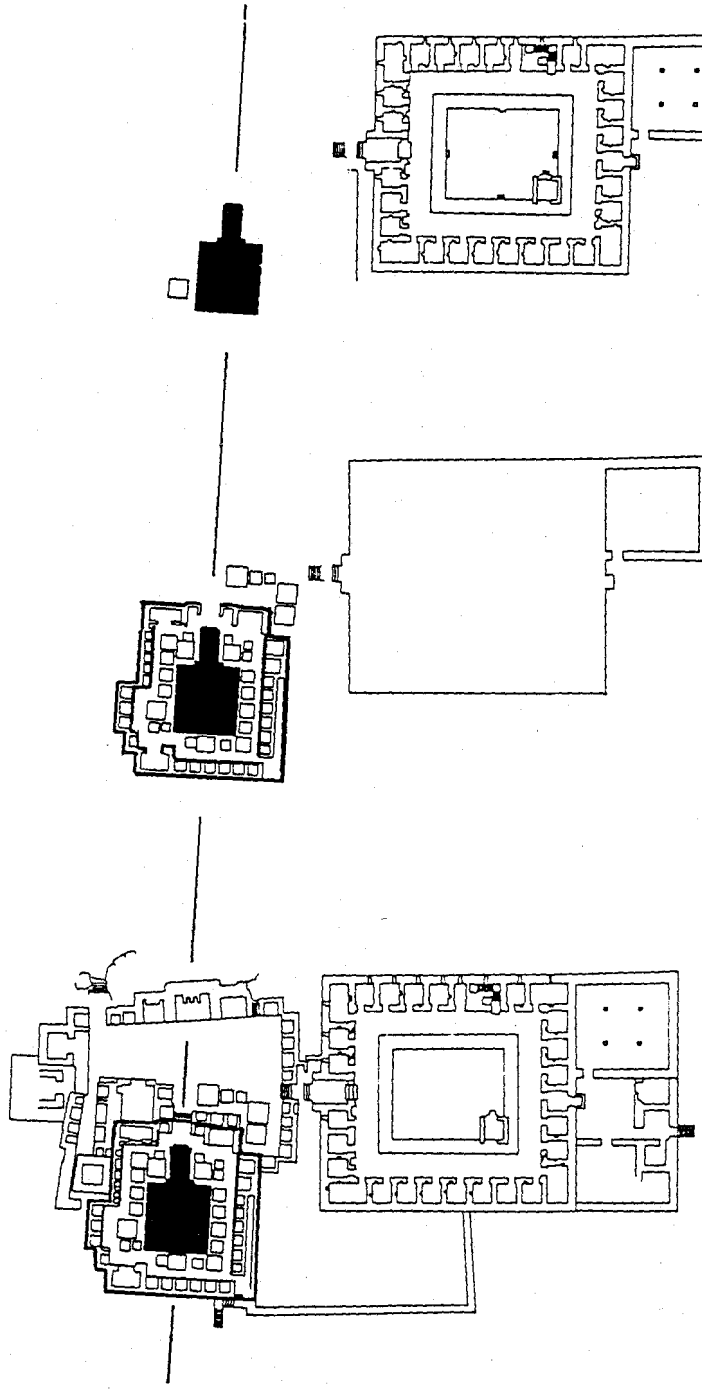


圖 19　Jaulian 寺の遷變（桑山作製）

マウンドの南東を發掘してえた3層3時期の遺構のうち一番下が煉瓦積み方柱の殘基，その上層が煉瓦積みの長い壁面，一番上層がふたつの半圓形稜堡をもつ壁である。僧坊の形式と變遷をタキシラでみると，まず房室をストゥーパに向けて直列しただけの僧坊があらわれるが，これは最初期に限定される（圖16：Iの左端）。ついで内庭を中心にして四方に房室を列置する形式があらわれて永續する（圖19）（桑山1974：340－341，350－351）。Bhamala や Bhallar などエフタル滅亡以後もこの形式がさかんに用いられ（圖15），カシミールの Parihasapura のように建築として大規模化する傾向にある（Sahni 1916：Pl. 36）（圖18）。こういった建築の一部でもあらわれているならまだしも，Shah-ji-ki Dheri では僧坊と確定させるなにものも發見されてはいない。それぱかりか，Shah-ji-ki Dheri では遺構のすぐ東まで小塔があったという。Hargreaves の發掘では大ストゥーパの後期石積（多分B）とおなじ方法で積まれた長い壁の中央部の東側（大ストゥーパ側）で，ストゥッコの斷片や小ストゥーパらしい遺構が發見された。Hargreaves が考えたように，このあたりまで小ストゥーパ群が主塔方面からのびていたのであろう（Hargreaves 1914：30）。最上層の半圓形稜堡も僧坊のものとは到底いえない。僧坊の附屬施設ならストゥーパの方をむい

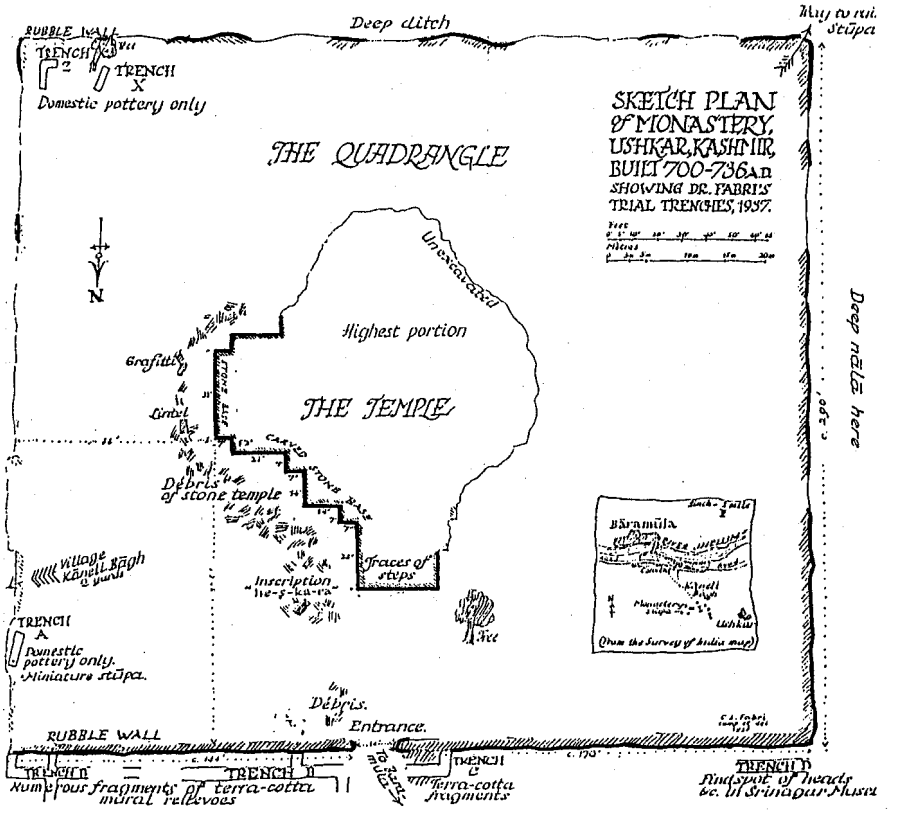


圖20　十字形ストゥーパと圍壁　Ushkar 寺平面見取り圖（Kashmir 1956）

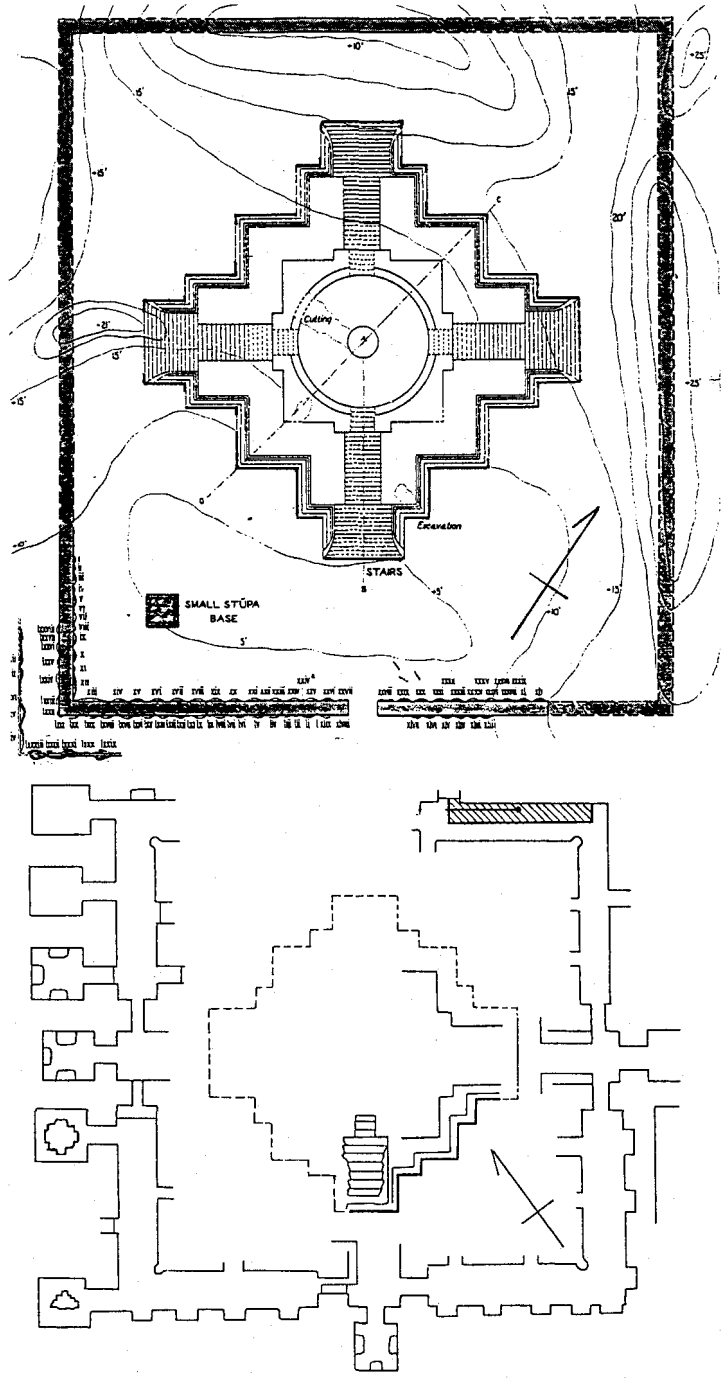


圖 21　十字形ストゥーパと圍壁　上は Rawak（Stein 1907），下は Adjina Tepa（Litvinsky and Zeimal 1971）

ているはずである。ここではストゥーパと反對方向を向いている。これらの點から，ストゥーパの西にあらわれた一聯の壁は僧坊の一角を形成するものではなく，大ストゥーパをとりかこんだ圍壁の一部とみた方がよい。

タキシラのストゥーパで圍壁があらわれるのはきわめてはやい時期であり，Jandial B や Dharmarajika 北東區のストゥーパなど極く初期のストゥーパにみられる（桑山 1974：附圖參照)。しかしそれは壁幅に厚みはなく，したがって丈も低く，垣根程度の類であった。この手は次の段階でも Pippala，Chir Tope D1，Giri などで顯著にあらわれるが，その後に創建されたストゥーパではつかわれなくなる。その空白をおいて次にあらわれるのが主塔向きの祠堂を主塔の四面を圍むように列置した Jaulian の塔院形式である（圖 19 中段)。主塔の正面だけには祠堂を置かず，そこに一口を開いて外界と通じたさせた。各祠堂は高さがたかく，列をなしてストゥーパをかこむ。その外觀は城壁の様をなし，きわめて閉鎖的な様相を呈する（桑山 1974：342, 349)。これは，前代の垣根とは根本的に性格が異なったものといえよう。初期の垣根様のものから展開してあらわれた形式ではなく，むしろ十字形ストゥーパの塔院形式へと發展する性格をもっている。圍壁や門闕が十字形ストゥーパの遺迹では重要な構成の要素となっているからである（圖 20，21)。Shah-ji-ki Dheri も最後の段階で十字形平面のストゥーパとなったとき圍壁をもった。これはこのような環境からごく自然に導きだされるひとつの結論である。

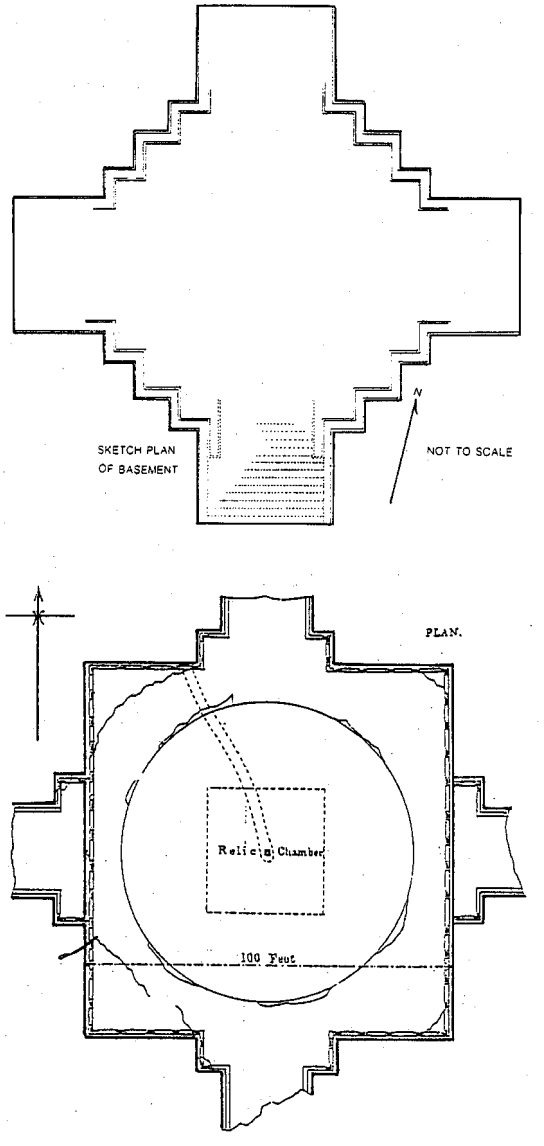


圖 22　十字形ストゥーパ
上は Parihasapura（Huntington 1985)，
下は Ahin Posh（Cunningham 1879)

アフガン＝トルキスタンの Top-e Rostam は平野にあるが，寺域を確認

するほど丁寧な發掘はおこなっていないから圍壁の存在は明らかではない。カシミールの Parihasapura (Sahni 1916), Ushkar (圖 20) (Kashmir 1956) や Ahin Posh (圖 22 : 下) (Cunningham 1879) など，十字形大ストゥーパでは圍壁の例に事缺かない。Khotan の Rawak では內外の壁に塑造の立像を附けまわした圍壁がある (圖 21 : 上) (Stein 1907 : II, Pls. XIII–XVIII)。Tajikistan の Adjina Tepa では通廊や禮拜堂をもった圍壁がある (圖 21 : 下) (Litvinsky & Zeimal 1971 : Figs. on pp. 15, 27)。Tahkal Bala の Area B には一邊 35.4 m (118′) の十字形平面のストゥーパがあり，ストゥーパを圍んで圍壁がつくられ，その西側には Parihasapura と同じ樣式の僧坊があった (Errington 1987 : 308–309, Fig. 4)。インドパキスタン北西部におけるストゥーパ建築の歷史の，かなり遲い時期にはじめてあらわれるこの手の圍壁が，ストゥーパにとって，あるいは僧坊との關係で，どんな意味をもっていたか，これはかなり興味ぶかい問題であるが，いまは意味論ではなく，それが同時代のストゥーパ以外の建築とも共通する點をとくに指摘しておきたい。

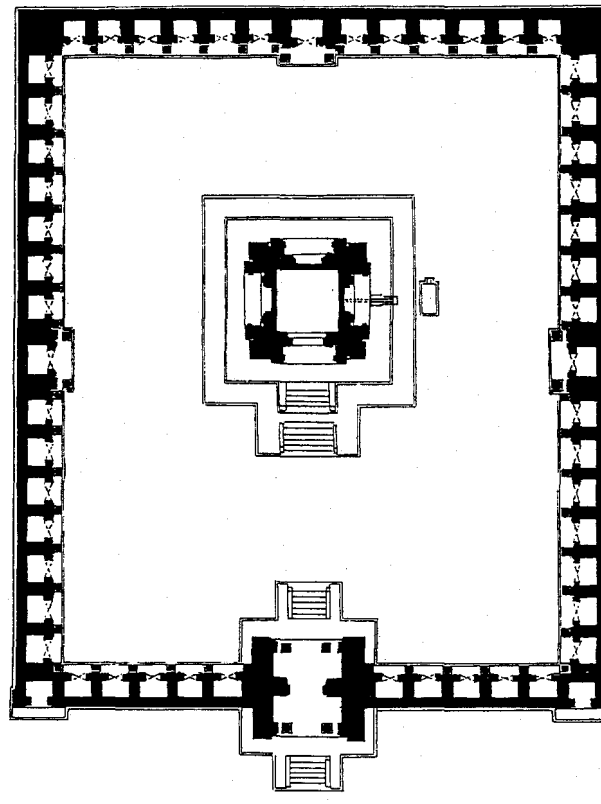


圖 23 Buniar ヒンドゥー寺院平面圖 (Kak 1937) 長邊 43.5 m，短邊 35.85 m

その建築とは，8 世紀のカシミールにあらわれれるヒンドゥー敎寺院建築である。すなわち Buniar, Martand, Avantiswami の各寺院は 7 世紀から 9 世紀を代表する。Buniar (圖 23) (Kak 1933 : 156–158 ; Fischer 1989 B : 32–33) が Kārkoṭa 初期，Martand–Surya 寺が Lalitāditya Muktapīḍa (724–760) の時代 (桑山 1993 : 98–99)，Avantiswāmi–Viṣṇu 寺が Avantivarman (855/6–883) の登位以前の時代，つまり 9 世紀中頃 (Stein 1900 : I, 192 : Kak 1933 : 119 ff.) とすると，ヒンドゥー敎寺院の中心となる神殿とそれを方形に壯大に圍む外壁は，十字形平面の大ストゥーパとその圍壁に比較できる。たしかにタキシラの Bhamala では完全な圍壁は見つかっていないが，僧坊と對面する大ストゥーパは一段高

いテラスの上にあって，しかも大ストゥーパに至る門闕の遺構を備えている（圖15）。カシミールの上記の寺院では門の中央にさらに壁を設け，そこに開口部をしつらえていて，Bhamala のような部屋様にはしていない。しかしとくに Avantiswami や Buniar では門の内外面に吹き抜けで柱を建て，その柱の間隔はきわめて狭いから，Bhamala がそこを壁面にしたことと同じ意識である。

A式石積みの方形ストゥーパが壊れてから，こわれた迹を煉瓦で積み，Bhamala や Bhallar をはじめとするタキシラでみられる Late semi-ashlar 系統の石積み B で積んで，突出部を加え，十字形ストゥーパとなった。これらの寺院を建築用材や石積み法，巨大な佛像といった觀點からみると，從來のガンダーラやタキシラにおける寺院とは一線を劃する，新佛教時代の性格を示している。それがどんな環境であらわれたかは，さきにのべたように，タキシラをふくむ Pir Panjal 山脈の南側や西部パンジャーブなど，インダスの東側が政治上カシミールの版圖にはいったことと大きな關係がある。カシミールによるこれらの地方の制壓はエフタル以後のわずかな間の政治上の空白に起こった。洛陽伽藍記の宋雲行歷記事によると520年ころは Jhelum 邊においてカシミール勢力の南下と鹽交易のルートをエフタルはおさえている（Kuwayama 1989：95－97）。一方大唐西域記における玄奘の情報はタキシラを含めてインダスの東側全般がカシミールに近時從屬したことを傳える。この政治地理の變化はインダスの東を文化面でもカシミールと强くむすびつけた。インダスの西なるガンダーラは西のカーピシーで興ってカーブル河全流域を支配していった土着勢力 Khingal 朝の東の據點となった。この王朝は興起間もないカシミールの Kārkoṭa 朝と親緣關係にあった。それは玄奘の歸途インダス北岸 Udabhāṇḍapura に Kārkoṭa 朝，Khingal 朝の兩王が滯在したことを記す慈恩傳から讀み取ることができる。この關係は7世紀後半に Khingal 朝にとってかわったテユルク王朝，いわゆる Kabul Shah や，9世紀前半にさらにこれに替わった Hindu Shah 朝へ變わることなく續いた。

ヒンドゥークシュ山脈の北から亞大陸北西部をおおった，6世紀後半の政治狀況のなかで，カシミールの文化が南下してパンジャーブ（インダスの東）におよび，さらにインダスの西へ，ガンダーラへと及んだ。逆にガンダーラ＝タキシラの工人がカシミールへ移動したことも，Kārkoṭa 朝初期の建築にこの地方の佛教寺院建築の要素が認められることからあきらかである（Fischer 1989 B：29－30）。巨石ともいうべき種類の石材をつかった十字形ストゥーパを擁する大寺院 Parihasapura をはじめ，おおくのヒンドゥー寺院が形成されはじめるカシミールの動向が，ガンダーラやタキシラにあらわれることはなんら不思議ではない。このような文化のなかに方形ストゥーパから十字形ストゥーパへと變身する Shah-ji-ki Dheri を位置づけることができる。壁面 A で代表できる古い時代に建立された方形ストゥーパはガンダーラ佛教凋落とともに一旦放棄されたが，カシミールの動向に

沿いつつ，タキシラの Bhamala にあらわれたようなあたらしい寺院形成と聯動して十字形ストゥーパへと變貌した。この全般的な動きは 560 年代以後である。よって 520 年に宋雲たちがみたカニシカ大塔は十字形ではなく，方形であった。

ここで玄奘當時（629 年）の Shah-ji-ki Dheri ストゥーパの形態に關聯する點を記しておこう（附論參照）。大唐西域記にカニシカ「大塔の東面の石階」とある點である。大塔に石で造った階段があったことは確實であるが，ストゥーパの一面にだけ階段があって，それが東面にあったから，こう書いたのか，そうではなくて，わざわざ東面と斷ったからには，ほかにも階段があったことを示すものであるのか。ストゥーパの兩側に對稱に階段がついていたのか。四面に階段がついていたことを示唆するのか。兩側に對稱につく例はやっとスワートの Malamjaba（Ashraf Khan 1993：49－53, Pl. VIII）とジャラーラーバードの Ahin Posh（圖 25）で知られるばかりであるし，例外中の例外である。一面か，四面か，どちらかであったろう。もし四面であるなら，カニシカ塔は玄奘時代には十字形ストゥーパであったことになり，Shah-ji-ki Dheri の十字形ストゥーパに年代の一點をあたえようし，あるいは一面なら，方形ストゥーパが玄奘時代もなお使われていたことになり，十字形ストゥーパへの變貌は 629 年以降ということになり，方形ストゥーパの終末年代にもかかわってくる。「大塔東面石階」だけではどうとでも解釋でき，なんら決め手がない。

しかしこれを大唐西域記にみえるストゥーパまわりの彫刻とあわせてかんがえると，十字形ストゥーパとは考えがたくなる。つまり「石文青紺」の「兩軀佛像」や「擬菩提樹下加趺坐像」といった記述である。この記述は，いわゆるガンダーラ產の靑灰色の片岩でつくった佛像であることを暗示し，また加趺坐像は上方に菩提樹を配した禪定坐佛であることを示唆し，ともにガンダーラの片岩彫刻によくみる類だからである。同じように，石壁を蟻がかじってできた金色の佛像というものがある。これはおそらく箔をつけた片岩製の佛像の類であったかもしれない。Shah-ji-ki Dheri の發掘ではこういった片岩やストゥッコの彫刻類はほとんど出土せず，ストゥーパの西側ではこういった彫刻とは時代的に一線を劃するテラコッタとストゥッコの 'grotesque of sorts' が大量に出土したのであった。Spooner はつぎのようにそれらを舊佛敎時代の彫刻とは區別し，はっきりと 7 世紀以後と認めている。

> A very large number of other sculptural fragments in stucco and terra-cotta were found to the west of this stupa. These were for the most part curiously grinning heads, which seem certainly to have been grotesque of sorts, together with more serious doll-like heads wearing high and elaborate head-dress... if, as appears probable, these sculptures belong in the main to the later centuries during which the site was occupied (they may even be later than Hiuen-Thsang's

visit in some cases), they were not erected during the period of that stone sculpture which is typical of Gandhara.

すなわち玄奘の記した佛像は Spooner のいう，'that stone sculpture which is typical of Gandhara' の可能性が高く，そうするとこの點で玄奘時代まではなお方形ストゥーパが使われていたと考えることができる。玄奘のおとずれたとき大ストゥーパは火災にあって修復中であった。このことはいまのべたような佛像を飾った方形ストゥーパが玄奘時代まで存續し，方形ストゥーパが火災にあい，修復によって十字形ストゥーパへと變る節目を傳えるものであるかもしれない。しかし，玄奘以前に既に放棄されていた方形ストゥーパが玄奘時代に火災に遭ったとも解釋できる。そうならば，方形ストゥーパの終末は 560 年代ころであろうし，十字形ストゥーパへの變貌は玄奘當時（629 年）はじまっていたことになろう。第Ⅱ期方形ストゥーパの時代から第Ⅲ期十字形ストゥーパへの移りかわりは明確に時期をとらえがたい。6 世紀 60 年代から 7 世紀 30 年代の間にあることはまずまちがいなかろうが。

6．ストゥッコ坐佛とカシミール金銅佛

最終段階で施されたストゥッコ＝フリーズの年代がわかれば十字形ストゥーパがどれほどの時代にわたって生きたかがわかる。ここでは十字形ストゥーパの年代の一端をフリーズからあきらかにする。

壁面から 52.5 cm 手前に施されたというストゥッコ＝フリーズについて Spooner と Hargreaves はそれぞれが一枚の寫眞を發表している。Spooner のものは［Spoooner 1912］の Pl. XIV（a）で，西の長方形突出の北面のもの，Hargreaves のものは

圖 24　ストゥッコ＝フリーズの壁柱　西の長方形突出部南面

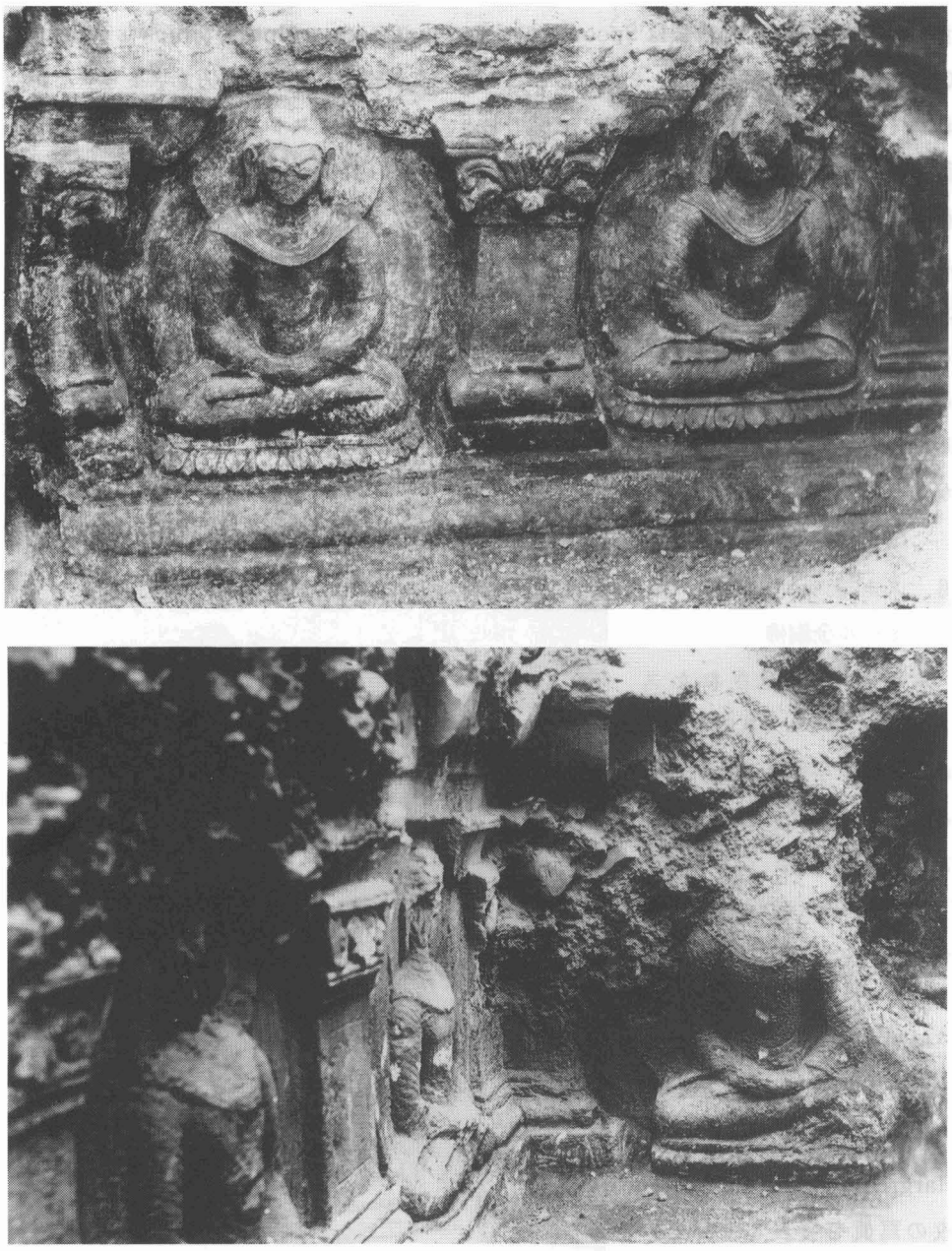


圖 25　ストゥッコフリーズの坐佛と壁柱　上は西の長方形突出部北側の東端，下は南側

圖 26　北の長方形突出部西側のストゥッコ＝フリーズ（上）と Butkara ストゥーパ最末期のストゥッコ坐佛（下）（寫眞：桑山）

[Hargreaves 1914] の Pl. XIV (a) で，北の長方形突出の西面のものである。さらに5枚の寫眞が實は撮影されていた。その5枚とは，

1（圖24）：西の長方形突出部の南側面にある壁柱のひとつ。

2（圖25：上）：西の長方形突出部の北側面。

3（圖25：下）：西の長方形突出部の南側面。

4（圖8：下）：南の長方形突出部の西側面。

5（圖26：上）：北の長方形突出部の坐佛と壁柱との列。

[Spoooner 1912：Pl. XIV (a)] は斜前方から撮影したものであるが，この寫眞からは臺座が蓮辨であることが坐佛の年代をややあたらしい時代にあてうる手掛かりとなるほかに，とりたてて坐佛の型式を考える手づるはなく，普通にガンダーラの寺院迹でみられるストゥッコ像として看過してしまいそうである。しかし，上の Nos. 2，3，5は正面からフリーズを撮影したものであり，また No. 4は壁面Bとフリーズとのかかわりをよく示し，もう一枚の No. 1は壁柱の近接撮影であって，この型式がガンダーラではきわめてまれなものであることがわかり，これらにより坐佛ばかりではなくフリーズの詳細をよく知ることができる。これを參照しつつ，Shah-ji-ki Dheri 大ストゥーパ最終期のストゥッコ＝フリーズについて記しておく(9)。

上に掲げた No. 4（圖8：下）は，Spooner が1909年に發掘した場所のもので，このストゥッコ＝フリーズの大きさについて，

> ... the size of the figures was so much in excess of any I had hitheto seen in Gandhara that it was made evident at once that we had to do with some structure considerably larger than any detached shrine would be.

と記述している（Spoooner 1912：44)。計測値を示していないが，北の長方形突出のストゥッコ＝フリーズのところでのべたように135 cm を出ない大きさであった。

No. 2（圖25：上）は，Spoooner 1912：Pl. XIV（a）のストゥッコ＝フリーズの一番奥にある2體の坐佛をほとんど正面から撮影したものである。これををみるやただちに，坐佛がこれまで知られているガンダーラのストゥッコ像とはきわめて異なったものであることがわかる。このコーナーと長方形突出を隔てて反對側の南の隅を西を向いて撮影したものが No. 3（圖25：下）である。ここでは正面の坐佛の胸の部分の衣紋はゆるやかなカーブで，No. 2が V 字形に近づいているのと異なっている。

壁柱をクローズアップした No. 1（圖24）は正面の坐佛からひだりへ直角にまがっていく面に施された壁柱であることがわかる。反對側との相異は壁柱にも現われている。つまり，全體のありかたは同じようにみえるが，下部の刳形から柱頭と柱が支えるアーキトレイヴ architrave に至るまで各細部の型式は完璧に異なっている。

またNo. 5（圖26：上）は［Hargreaves 1910－11：Pl. XIV (a)］にみえているものの近接撮影分で，北壁面の長方形突出部の西側面のレリーフである。この面のレリーフ上端にmodillion cornice（裝飾持ち送り軒蛇腹）がみつかり，そこから水平面が奥へつづいていたことはまえに記した。ここはいままでの各例と同じようにみえるが，やはり詳しく見ると異なっている。むかって右の壁柱から右へかけて坐佛を含めて傾いていることを除いても，中央2體と左右各1體とでは，蓮華座の高さ，坐佛自身の大きさ，その位置づけが違っている。壁柱の臺座も統一がない。しかも柱頭の形式は一番右の壁柱のものがNo. 1と同一形式であるのに對し，あとの二つの壁柱では柱頭左右のアカンサスの葉がまったく違った置き方になっている。さらに坐佛の胸前の衣紋は中央の坐佛2體がこれまでみたものよりさらにV字形がきつく，そのうちの1體の肩部分の衣紋は端が波狀になっている。波狀衣紋は寫眞兩端の坐佛にもあるが，この2體の兩肩から胸へかかる衣紋は先端が尖り，もっともV字形に近くなっている。いずれにしても北の長方形突出のこの一面は，とりわけ統一がとれていない。

No. 2の壁柱形式とおなじものがNo. 4（圖7：下）にみえる。これは南面の長方形突出の西側面で，左にストゥーパ本體の壁面Bがみえている。壁柱の形式からみてここはNo. 2の西の長方形突出の北面と通じるものがあり，全體にそれとよく似ている。しかし蓮座の高いことと衣紋に波狀裝飾がある點が異なっている。さらによく見ると，坐佛の脚部を肥厚させ，一番右の坐佛では衣紋から足があらわれる部分がほかの壁面のすべての坐佛と異なる。そうして像全體に厚みがあるようにすくなくとも寫眞ではみえる。一番左の坐佛の脚部がこわれ，そのなかに一時期古い像の脚部分が見えている。もとあった坐佛をとりはずすことなく，坐佛の上から，もういちどストゥッコをかけて彫刻しなおしたために，これらの像にはかなりの厚みが出てしまった。坐佛にすくなくとも1回の造りなおしがあったことがわかる。

坐佛壁柱がちょっとみるとみな同じ型式にみえるのに，よくみるとあちこちで細部がそうとうに異なっているのは，いちどきにすばやくストゥッコ＝フリーズをしあげる必要から複數の手の異なる工人にまかせたためか，あるいはのちに補修したためか，にわかには言いがたい。以上にのべた坐佛の特徵を列擧する。（1）體の衣紋は左右對稱にU字形に處理されている。（2）兩肩から胸へ衣はケープをかけたようにV字形に近く處理され，外緣を波狀にするのがおおい。（3）頭部はちいさく，肉髻もちいさい。耳は著しく長大。頭髮の生え際は中央をややとがらせている。（4）結跏趺坐した足は露出している。（5）頭光と身光がある。頭光はやや長めの圓で，身光は頭光まで及ばない。（6）薄い反り蓮辨の臺座。蓮辨は大なる主要蓮辨の間に小さい蓮辨をはさんでいる。

この手の佛像の類例はButkara大塔の最終の時期にストゥーパ外面の床にすえられた

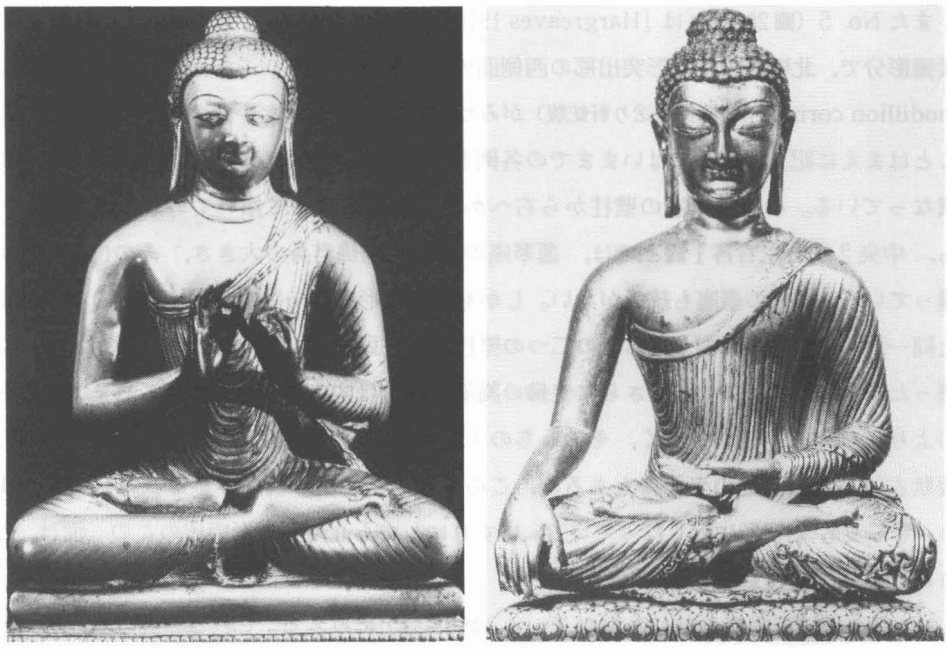
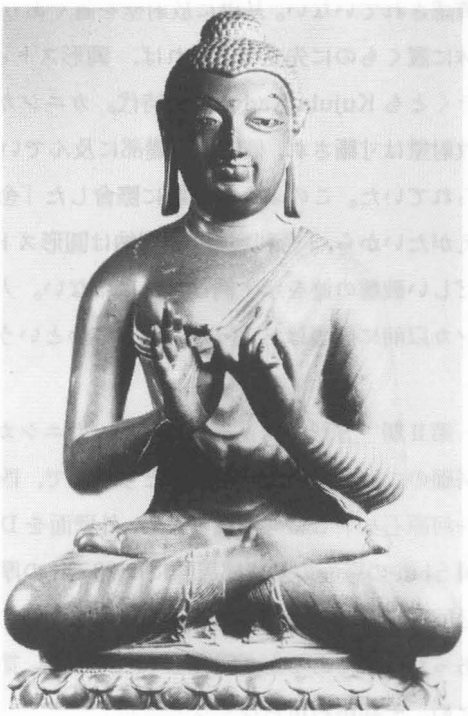


圖 27　カシミール金銅佛　1（左）. Pal 1975：Pl. 21　2（右）. 同 Pl. 22　3（右頁左）. 同 Pl. 34
4（右頁右）. 同 Pl. 24

ストゥッコ坐佛がただ一例あるだけで，ガンダーラの寺院迹ではしられていない。Butkara では下半身がかろうじて殘ったもので，上半身はわからないが，共通の特色は認められる（圖 26：下）。きわめて多數の寺がガンダーラにはあったのにこの手の佛像の類例はみいだせないから，そういったガンダーラの寺院の廢絕ののちにあらわれた樣式，つまり衰退後の新佛敎にかかわる樣式である。その時代には特定の數すくない寺，たとえばスワートでは Butkara とか，ガンダーラでは Shah-ji-ki Dheri とか，おおきかった寺だけが復興されたとすれば類例がすくない事實を說明することができる。

ところが「カシミールの靑銅佛」と一般にいわれている坐立兩像が，8－10 世紀において，これら 6 點の特色をみなもっている事實は，Shah-ji-ki Dheri に絕對年代をあたえるものとしてきわめて注目に値する。靑銅像は Shah-ji-ki Dheri のストゥッコ坐佛にはくらぶべくもない優秀なできであり，また，禪定佛はなぜかしられていないが，年代決定にそれはたいして重要ではない。Pal（1975）によれば，その Pl. 21（圖 27：1）の說法印坐佛像は 8 世紀にあてられている。蓮華座はないが，すべての點で共通している。Pl. 22（圖 27：2）は觸地印坐佛像で，これも 8 世紀と編年され，肩の衣紋とその波狀裝飾に共通點がある。Pl. 24（圖 27：4）は說法印坐佛像であって 9 世紀といわれ，蓮華座が二重になっている點がちがうだけである。Pal が 8 世紀とした諸例は V 字形が肩よりも頸に近いところから胸にかかる點で，Shah-ji-ki Dheri のものとやや異なっている。しかし Pl. 26 の施無



畏印立像は900年ころ，また同様の立像（Pls. 27, 28）は10世紀と編年されていて，それらになると，V字形衣紋がひろがって肩をおおうようになり，10－11世紀の倚坐像（Pl. 34）（圖27：3）ではこの傾向が時代を經るにしたがって強くなることを示唆している。一方，疑いもなく8世紀なかごろの創建の大寺院 Parihasapura で出土したという寶冠佛（Siudmak 1989：51, Fig. 16）やニューデリーの國立博物館の觸地印佛（Siudmak 1989：52, Fig. 19），これは Laukika 紀元15年の銘があって A. D. 739 年であるが，これらも上の傾向に合致する例である。このような傾向のなかで Shah-ji-ki Dheri のストゥッコ＝フリーズには9－10世紀をあてることが可能である。同時にこの割當は Pal の編年が正しいことを示している。

結論　ストゥーパ形態遷移の概要

1．第Ⅰ期　圓形ストゥーパの時代　おそくとも Kujula Kadphises 時代からカニシカ以前のある時期まで

この遺迹の最初の大ストゥーパは基礎を車輪構造とした圓形ストゥーパである。これに附隨していた小ストゥーパ群の一部が北西隅にある數基である。車軸部を缺く車輪構造は堅固な石積みによる放射壁をもと8本ほとんど等間隔に地山の上に配列したもの。外輪壁

は確認されていない。基礎に放射壁を置くありかたをDharmarajikaストゥーパのような伏鉢に置くものに先立つとすれば，圓形ストゥーパとしてのShah-ji-ki Dheriの創建はおそくともKujula Kadphises時代。カニシカⅠ世以前であることはあきらかである。

放射壁は寸斷され，破壞は基礎部に及んでいた。「舍利容器」は壞れた放射壁の末端にすえられていた。このような破壞に際會した「舍利容器」がもとの狀態で殘存するとはかんがえがたいから，「舍利容器」の埋納は圓形ストゥーパ建設時ではない。基礎部に至るはなはだしい破壞の迹を示す例はほかにはない。人爲破壞である。Kujula Kadphises以後カニシカ以前に破壞はおこった。誰がいつという問題には當面答えがない。

2．第Ⅱ期　方形ストゥーパの時代　カニシカ時代からはやくとも6世紀末

基礎の，破壞された放射壁をとりこんで，四隅に圓形稜堡をつけた方形ストゥーパが內核を河原石ないしは栗石積みとし，外壁面をDiaperににた化粧積みをもって建設された。一邊54 mの壁面の基底部周圍には30 cmの厚さの塗裝を施した。この塗裝に對する床面は2回あったことは確實であるが，第2回目のものが確認できる。階段はどの面かにひとつあったはずであるが，所在は不明である。第Ⅲ期に各面に長方形突出部が取り附けられたため，それがわからなくなったからである。玄奘の訪問時にはすくなくとも東面に階段があったが，それが當代のものか，第Ⅲ期の十字形ストゥーパのものかははっきりしない。また，ストゥーパ建設の時點まで，第Ⅰ期圓形ストゥーパに附屬していた北西の小ストゥーパ群はなお殘っていた。それをそのまま整地せずに着工し，稜堡をつける最終段階で，圓形稜堡が建つだけの部分を破壞した。これは圓形稜堡の建設が當初計劃にはいっていなかったことを意味し，計劃性がうたがわれる建設事業である。

このストゥーパに「舍利容器」をいれたが，舍利室のつくりはていねいなものではなかった。眞東と北東とに向かう放射壁がこわれていたので，その中心側の末端の斷裂面にスレートの板石をL字形にあわせ，床にも板石1枚を敷き，舍利室をつくり，その南西隅だけを石膏で舖裝して，そこに「舍利容器」を置いた。容器は表面に摩耗なく，傳世品ではなく，建設時の鑄造である。ストゥーパはすくなくとも一回6世紀末には放棄されたが，第Ⅲ期に十字形平面となったときもこの埋納狀態のまま存續し，Spoonerの發掘に至った。

道藥傳のカニシカ塔傳說では，ストゥーパがほぼ完成をむかえた建設の最終段階において鐵柱設置のためカニシカ王は四隅に大高樓を建て，その上で祈願の儀式をおこなったという。四隅の圓形稜堡と方形ストゥーパが同時期のものであることを示す考古學上の證據と背反しない。またこの說話は上にのべた當初計劃になかった圓形稜堡の建設を說明している。カニシカによるプルシャプラの大ストゥーパ建立は單なる傳說であるとする論據が

提出されないかぎり，四隅に高樓をもったこの方形ストゥーパはカニシカ時代とみなければならない。圓形ストゥーパの徹底破壞ののちカニシカ代に「舍利容器」を埋納して方形ストゥーパが造られたとする以上の結論は，「舍利容器」を Huvishka 以後に當てる近年の年代論と對立する。

なお，6 世紀後半の佛教低迷期における放棄を方形ストゥーパの終末と一應みておく。目安としては 560 年代である。そうすると十字形になったのはそれ以後である。玄奘のときの修繕が十字形になった段階の修繕か，放棄された方形ストゥーパの修復かははっきりしない。附論に示したように，5 世紀から 6 世紀はじめにおける基壇まわりのおおきさが，玄奘時代のそれとかなりおおきく異なっている點をどう解釋するかにかかっている。

3．第Ⅲ期　十字形ストゥーパの時代　はやくとも 6 世紀末から 11 世紀ごろまで

放棄された方形ストゥーパの各面の中央からだいたい 15 m ほどの長さで長方形の突出が建設され，さしわたし 84 m の十字形ストゥーパとなった。おそらく同時にこれを取り圍む圍壁も建設された。長方形突出の外壁面は方形ストゥーパのように通常の面造りとせず，壁體とおなじ粗積みのままとし，その上に 52.5 cm の厚さの塗裝を施した。きわめて異例かつ緊急の建築である。ストゥーパ本體としては前代の方形ストゥーパ自身がつかわれたが，B の積み方で補修され，A の石積みのこわれた部分に煉瓦をあてがった。北面では一部で白ストゥッコが薄く塗裝されていた。

十字形ストゥーパの當初の床面は西の長方形突出の北東隅で確認できる。このとき長方形突出やストゥーパ本體の外面がどのような裝飾をもっていたかは皆目わからない。しかし，最終段階では長方形突出の基部全體と長方形突出部を中心にしたストゥーパ本體の左右數メートルまでを，ストゥッコの坐佛と壁柱を交互に配列して裝飾した。このとき床面もそれにしたがって改められ，煉瓦敷きとなった。このストゥッコ＝フリーズは上端に軒蛇腹があり，床面からの高さはおそらく 135 cm。軒蛇腹から水平に奥へ 180 cm 幅の舖裝面がある。ストゥーパの面積や想像されうる高さと比較すると，このフリーズが全體に占める割合は小さい。ストゥッコ坐佛の年代はカシミールの靑銅佛像との共通性からみて 9－10 世紀である。725 年秋から 726 年春の閒にガンダーラ（建駄羅國）に滯在した慧超（桑山編 1992：4－5）は，當時の中心 Udabhāṇḍpura（Hund）の「西三日行程に大きな寺がある。[...] この寺は葛諾歌（*kat-nak-ka＜*kanaka＜kaniṣka）という名で，大きな塔があり，いつも光を放っている。この寺はむかし葛諾歌王が造った。王に因んで寺の名を定めたのである。」とのべ（桑山編 1992：39），大ストゥーパの存在をしめすが，大きな塔の樣子はあかさない。おなじく 11 世紀はじめに Biruni は，Purushāwar に Kanik 王が建てた Vihāra が Kanik Caitya とよばれていることを記しているが，ストゥーパについては不明である

(Sachau 1888 : Vol. 2, 11)。

附錄　漢文獻のカニシカ大塔

カニシカ大塔に關する漢文資料をすべて列擧して，各時代のストゥーパとしてそれが實際のすがたを描いたものかどうか，そうだとしたらShah-ji-ki Dheriとどう結べるのかを檢討する。

(1)『法顯傳』(弗樓沙國の條)(大正 51 : 858 b)

「佛昔將諸弟子遊行此國。語阿難云。吾般泥亘後。當有國王。名罽膩伽。於此處起塔。後膩伽王出世。出行遊觀。時天帝釋欲開發其意。化作牧牛小兒。當道起塔。王問言。汝作何等。答曰。作佛塔。王言。大善。於是王卽於小兒塔上起塔。高四十餘丈。衆寶校飾。」凡所經見塔廟。壯麗威嚴。都無此比。傳云。閻浮提塔。唯此爲上。王作塔成已。小塔卽自傍出大塔南。高三尺許。

(2)『水經注』卷2 :「又西逕(乾)陀衞國北」の條(世界書局本 : 12 ; 王國維校點本 : 31)

又有佛樓沙國。天帝釋變爲牧牛小兒。聚土爲佛塔。法王因而成大塔。

(3)『洛陽伽藍記』卷5 城北 宋雲行歷記事(周祖謨 1963 : 215－219)

至乾陀羅城。東南七里。有雀離浮圖。道榮傳云城東四里。推其本緣。「乃是如來在世之時。與弟子游化此土。指城東曰。我入涅槃後二百年。有國王名迦尼色迦。在此處起浮圖。佛入涅槃後二百年。果有國王字迦尼色迦。出游城東。見四童子彙牛糞爲塔。可高三尺。俄然卽失。道榮傳云。童子在虛空中向王說偈。王怪此童子。卽作塔籠之。糞塔漸高。挺出於外。去地四百尺。然後止。王更廣塔基三百餘步。道榮傳云。三百九十步。從地構木。始得齊等。道榮傳云。其高三丈。悉用文石爲階砌檻栱。上構衆木。凡十三級。上有鐵柱。高三百尺。金盤十三重。合去地七百尺。道榮傳云。鐵柱八十八尺。八十圍。金盤十五重。去地六十三丈二尺。施功旣訖。糞塔如初。在大塔南三百步。」時有婆羅門。不信是糞。以手探看。遂作一孔。年歲雖久。糞猶不爛。以香泥塡孔。不可充滿。今有天宮籠蓋之。雀離浮圖自作以來三經天火所燒。國王修之。還復如故。父老云。此浮圖天火七燒。佛法當滅。道榮傳云。王修浮圖。木工旣訖。猶有鐵柱。無有能上者。王於四角起大高樓。多置金銀及諸寶物。王與夫人及諸王子悉在樓上燒香散花。至心請神。然後轆轤絞索。一擧便到。故胡人皆云四天王助之。若其不爾。實非人力所能擧。塔內佛事。悉是金玉。千變萬化。難得而稱。旭日始開。則金盤晃朗。微風漸發。則寶鐸和鳴。西域浮圖。最爲第一。此塔初成。用眞珠爲羅網覆於其上。於後數年。王乃思量。此珠網價直萬金。我崩之後。恐人侵奪。復慮大塔破壞。無人修補。則解珠網。以銅籠盛之。在塔西北一百步。掘地埋之。上種樹。樹名菩提。枝條四布。

密葉蔽天。樹下四面坐像。各高丈五。恆有四龍。典掌此珠。若興心欲取。則有禍變。刻石爲銘。囑語將來。若此塔壞。勞煩後賢出珠修治。雀離浮圖南五十步。有一石塔。其形正圓。高二丈。甚有神變。能與世人表吉凶。以指觸之。若吉者。金鈴鳴應。若凶者。假令人搖撼。亦不肯鳴。[後畧]

(4)『魏書』卷102(『北史』卷97)小月氏國傳(標點本：2277)

都富樓沙城。其王本大月氏王寄多羅子也。寄多羅爲匈奴(通典，寰宇記ハ蠕蠕)所逐西徙。後令其子守此城。因號小月氏焉。在波路西南。去代一萬六千六百里。先居西平張掖之閒。被服頗與羌同。其俗以金銀錢爲貨。隨畜牧移徙。亦類匈奴(寰宇記ハ北狄)。其城東十里有佛塔。周三百五十步。高八十丈。自佛塔初建計至武定八年(A.D.550)。八百四十二年。所謂百丈浮圖也。

(5)『魏書』卷102(『北史』卷97)乾陀國(標點本：2280)

在烏長西。本名業波。爲厭達所破。因改焉。其王本是敕勒。臨國已二世矣。好征戰。與罽賓鬪。三年不罷。人怨苦之。有鬪象七百頭。十人乘一象。皆執兵仗。象鼻縛刀以戰。所都城東南七里有佛塔。高七十丈。周三百步。即所謂雀離浮圖也。

(6)『大唐西域記』卷2(大正51：879c-880b)

城外東南八九里有卑鉢羅樹。高百餘尺。枝葉扶疏。蔭影蒙密。過去四佛已坐其下。今猶現有四佛坐像。…釋迦如來於此樹下南面而坐。告阿難曰。我去世後當四百年。有王命世。號迦膩色迦。此南不遠起窣堵波。吾身所有骨肉舍利。多集此中。卑鉢羅樹南有窣堵波。迦膩色迦王之所建也。「迦膩色迦王以如來涅槃之後第四百年。君臨膺運。統贍部洲。不信罪福。輕毀佛法。田遊草澤。遇見白兔。王親奔逐。至此忽滅。見牧牛小豎。於林樹閒作小窣堵波。其高三尺。王曰。汝何所爲。牧豎對曰。昔釋迦佛聖智懸記。當有國王於此勝地建窣堵波。吾身舍利多聚其內。大王聖德宿殖。名符昔記。神功勝福。允屬斯辰。故我今者先相警發。說此語已。忽然不現。王聞是說。喜慶增懷。自負其名。大聖先記。因發正信。深敬佛法。周小窣堵波。更建石窣堵波。欲以功力彌覆其上。隨其數量。恆出三尺。若是增高。踰四百尺。基址所峙。周一里半。層基五級。高一百五十尺。方乃得覆小窣堵波。王用喜慶。復於其上更起二十五層金銅相輪。即以如來舍利一斛而置其中。式修供養。營建纔迄。見小窣堵波在大基東南隅下傍出其半。王心不平。便即擲棄。遂住窣堵波第二級下石基中半現。復於本處更出小窣堵波。王乃退而歎曰。嗟夫人事易迷。神功難掩。靈聖所持。憤怒何及。慙懼既已。謝咎而歸。」其二窣堵波今猶現在。有嬰疾病欲祈康愈者。塗香散花。至誠歸命。多蒙瘳差。大窣堵波東面石階南鏤作二窣堵波。一高三尺。一高五尺。規模形狀如大。又作兩軀佛像。一高四尺。一高六尺。擬菩提樹下加趺坐像。日光照燭。金色晃耀。陰影漸移。石文青紺。…大窣堵波石階南面有畫佛像。高一丈六尺。自胸以上。分身兩現。從胸已下。合爲一體。…大窣堵波西南百餘步有白石佛像。高一丈八尺。北面而立。多有靈相。數放光

明。... 大窣堵波左右。小魚鱗百數。佛像莊嚴。... 此者。如來懸記。七燒七立。佛法方盡。土俗記曰。成壞已三。初至此國。適遭火災。當見營搆。尙未成功。

(7)『大唐大慈恩寺三藏法師傳』卷 2 (大正 50：230 a-b)

城外東南八九里有畢鉢羅樹。高百餘尺。過去四佛並坐其下。現有四如來像。當來九百九十六佛。亦當坐焉。其側又有大窣堵波。是迦膩色迦王所造。高四百尺。基周一里半。高一百五十尺。其上起金剛相輪二十五層。中有如來舍利一斛。大窣堵波西南百餘步。有白石像。高一丈八尺。北面立。極多靈瑞。往往有人見像夜遶大塔經行。

(8)『續高僧傳』卷 4 釋玄奘傳 (大正 50：448 c)

城東有迦膩王大塔。基周里半。佛骨舍利一斛在中。擧高五百餘尺。相輪上下二十五重。天火三災。今正營搆。卽世中所謂雀離浮圖是也。元魏靈太后胡氏。奉信情深。遣沙門道生等。齎大幔長七百餘尺。往彼掛之。脚纔及地。卽斯塔也。亦不測雀離名生所由。左側諸迹其相極多。

(9)『釋迦方志』遺迹篇第四 (大正 51, 950 c-951 a)

城東南八九里有卑鉢羅樹。高百餘尺。枝葉扶疏。蔭影蒙密。昔四佛座下見有坐像。傳云。賢劫諸佛皆坐其下。昔釋迦如來於此坐已。告阿難曰。後迦膩色迦王集吾骨肉在此。王後在南建塔。基周一里半。金銅相輪二十五重。或云。四十層者擧高五百五十尺。有舍利一斛。初有化牧牛人。林間造三尺小塔。王擲棄之。乃於大塔第二級下。石基之側半現小塔。疾者歸平愈。其大塔東面石陛上昔有金色蟻。大如指如麥。相從嚙石壁。文如鏤。厠以金砂作二加趺佛像。高四五六尺。又於南面石階畫佛丈六之形。昔有二貧人。各施一金錢。共畫一像。請現神變。像卽現胸以上分爲兩身。下合爲一。次南百餘步白石佛像高一丈六尺。面北放光。夜出繞塔。... 大塔左右。小塔數百。莊工極巧。香音兩異。仙聖旋繞。佛記此大塔。七燒七立。佛法方滅。已燒至三。今現營搆。

(10)『法苑珠林』卷 38 敬塔篇故塔部 (大正 53, pp. 589 a-b)

西域乾陀羅城東南七里。有雀離浮圖。推其本緣。乃是如來在世之時。與諸弟子游化此土。指城東曰。我入涅槃後二百年。有國王名迦尼色迦。在此處起浮圖。佛入涅槃後二百年。有國王字迦尼色迦。出游城東。見童子壘牛糞爲塔。可高三尺。俄然卽失矣。王怪此童子。卽作塔籠之。糞塔漸高。挺出於外。去地四百尺。然後始定。王更廣塔基三百餘步。從地搆木。始得齊等。上有鐵根。高三百尺。金盤十三重。合去地七百尺。施旣訖。糞塔如初。在大塔南三百步。時有婆羅門不信是糞。以手探之。遂作一孔。年歲雖久。糞猶不爛。以香泥塡孔。不可充滿。今有天宮籠蓋之。雀離浮圖。自作已來三爲天火所災。國王修之。還復如本。父老云。此浮圖天火七燒。佛法當滅。塔內佛事。悉是金玉。千變萬化。難得而稱。旭日始開。則金盤晃朗。微風暫發。則寶鐸鏗鏘。西域浮圖最爲第一。雀離浮圖南五十步一石塔。其形正直。擧高二丈。甚有神變。能與世人表作吉凶之徵。以指觸之。若吉者金鈴鳴應。若凶者

假令人搖。亦不肯鳴。

(11)『慧超往五天竺國傳』(桑山編 1993：20－21)

又従迦葉弥羅國西北隔山一月程。至建駄羅國。…此城俯臨辛頭大河北岸而置。(此)城西三日程。有一大寺。…此寺名葛諾歌。有一大塔。每常放光。此寺及塔。舊時葛諾歌王造。従王立寺名也。

カニシカがプルシャプラの東郊に出遊したとき，一説には帝釋 (Śakra) が身をこどもに變えて小さいストゥーパをつくっていた。王はそれを覆うほどのストゥーパをつくろうとするが，なかなか至らず，高さを漸次增して400尺になってやっとこどものつくるストゥーパとおなじ高さにできた。漢文資料にはこのようなストゥーパの規模を數値をあげて記錄している。それをみるとストゥーパの高さについて數値は一致しているが，基壇のおおきさや相輪のたかさなど，そのほかの數値はそれぞれ異なっている。ところがこれを足立 (1930；1931) や Dobbins (1971) は，各時代に行歷僧が實際にみたストゥーパの狀態とはなから思い込み，宋雲や玄奘の記事間の違いから，カニシカストゥーパの時代による變化までみている。しかし，本文で括弧にいれたところがカニシカ傳說をのべた部分であり，その中のカニシカ大塔建設部分の文章の續きかたでは，カニシカが建てた傳說の規模を言っているのであるから，各時代のストゥーパの實測値だとはかならずしもいえないであろう。一方でまた，カニシカが建てたものの規模數値はみな同じはずであるから，それが異なっているのは時代による傳承のちがいともとれようし，あるいは，行歷僧はその時代のストゥーパをみてそれをカニシカが造ったストゥーパそのものとおもったはずであるから，彼らが傳える數値や狀態はそのまま各時代のありさまを傳えるものともとれる。後者ならこれを Shah-ji-ki Dheri 3時期の展開と關聯して使える。この意味で本文の傳說部分を以下にかんがえてみたい。傳說以外のところには實數値は書かれていないが，當時の實情は散見される。それが實際に玄奘の觀察として大唐西域記だけには出ている(10)。

カニシカ塔に言及するもっとも早い記錄は400年代はじめにガンダーラにいった法顯，つぎに450年ころの道藥(11)，520年の宋雲や慧生，そうして629年の玄奘であり，そのほかの記錄はみなかれらに依っている。魏書西域傳小月氏傳の記錄だけは名稱および規模に關する數値がほかと異なっていて，なににによったかわからない。

法顯傳によると，こどもにばけたインドラがつくる塔のうえに被せるように塔をつくった。高さは40餘丈で，おおくの高價なもので飾る。「凡そ塔廟を經見するに，壯麗威嚴なることすべて此れに比ぶるなきなり。」は法顯が見た塔のことである。40餘丈は法顯がみた塔の高さか，カニシカが造った塔の高さか，ここだけではどちらともいえまいが，資料の大半ではカニシカが造ったときの高さを400尺としているので，この場合もカニシカが

造った塔の高さとみる。ほかの資料では相輪などのおおきさや高さを記しているが，法顯傳ではそれがないので全體像についてはなにもわからないが，法顯がハルミカ以上の部分についてなんにもいわず，どの資料もまた伏鉢までの建設をストゥーパの建設として重視し，それ以上をどのように壯大にするかは建設者の意圖まかせであったらしいことが興味ぶかい。

洛陽伽藍記も「地を去ること 400 尺」でカニシカ大塔の建設が一應おわったとする。ストゥーパのいちばん下のところ，つまり最下の基壇の周圍が 300 餘歩（＝1800 餘尺)。「上に鐵柱あり，高さ 300 尺。金盤 13 重」とするから，相輪の支柱は鐵製で，おそらくやはり鐵製の chattra が 13 ついていたものか。その高さが 300 尺である。「合わせて地を去ること 700 尺」とは，相輪を含めた塔の全體の高さが 700 尺ということである。宋雲のいうカニシカ塔は相輪部を 1 とするとそれ以下の主體部は 1.33 であったことになる。これは主體部が 6 m なら相輪部は 4 m ということであり，ストゥーパとしておかしくないつりあいである。

相輪部の輪らしいものは北魏の雲岡にすでにあるから，北涼の涼州にもあったはずで，いつ，どこではじまったか正確にはわからないが，ガンダーラにはない。そこでは石製の圓盤で，數は奇數であり，これを短い支柱で繋ぎあわせた。スワートの Amluk Dara Stupa では圓盤が全部方形基壇のうえに重なって落ちていて，5 つあり，最大は直徑 440 cm，厚さ 28 cm，支柱をうける中心のほぞ孔は直徑 13 cm，深さ 12 cm である。圓盤は傘，つまり chattra であってインド佛塔の古制を繼承している。だからここで金盤とか相輪とか鐵柱とかいうのはガンダーラとしては不適切な語であり，ガンダーラにいったことはなく，漢地の佛塔をみなれた楊衒之の作爲があるのであろう。このことは次の道藥傳についてもいえる。

楊衒之は洛陽伽藍記の卷 5 に宋雲の行歷を書くにあたって宋雲に同行した慧生の行傳（隋書經籍志にみえる）でルートを定め，宋雲家記をつかってまとめたが，なお當時はみることができた 5 世紀半ばの行歷僧道藥の傳を引用して記事を補足した。道藥傳によれば塔の基部は周圍 390 歩（＝2340 尺)，高さ 3 丈，つまり 30 尺である。周（1963：216）や足立（1930 c：365）はこの値にはあやまりがあろうという。そのうえに 13 級の塔主體部がある。そのまた上に金屬製の chattra が 15 あり，高さ 88 尺，chattra の太さは 80 圍（＝40 尺)。これらを通じた全部の高が 632 尺である。かなり細かい數値で，洛陽伽藍記より詳しい。各々の高さは，基部が 30 尺，相輪部が 88 尺であるから，主體部の 13 級の高さは 514 尺となる。これらの數値を信用すると相輪部と主體部との比率は 1 ： 6 で，これはあまりにも現實味にとぼしい。88 尺が異樣に小さいことから，足立（1930 c：365）これを 188 尺の誤りとみる。そうすると主體部の高さは 414 尺となり，法顯傳の 40 餘丈や洛陽伽藍記の 400

尺にほとんど一致する。この場合相輪1に對し主體部は2.2であり，主體部が7mなら，相輪部は3mであり，宋雲にちかく，このくらいの比率のストゥーパはいくらでもガンダーラには現實にあった。

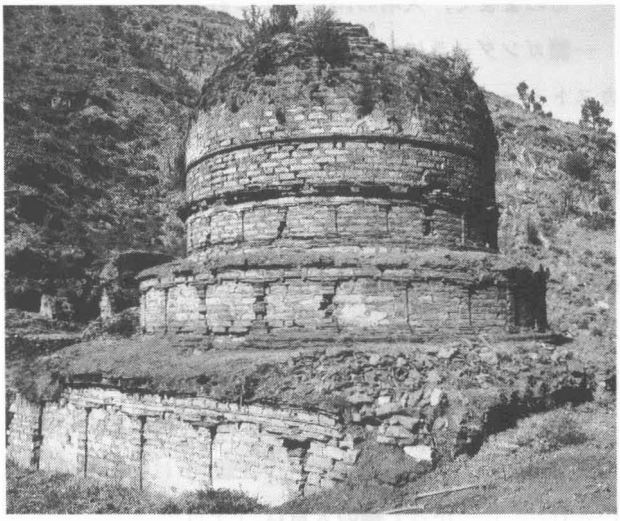


圖28　ストゥーパの構成　Abbas Saheb China 第1ストゥーパ（寫眞：桑山）

主體部13層のストゥーパというのも實はガンダーラでは考えがたい。伏鉢がそんなにおおくの圓胴や基壇で支持された例は大規模なストゥーパとして存在しないからである。普通は方形基壇の上に大きな圓形基壇があり，その上に二重の圓胴があり，さらに上に伏鉢をのせる（圖28）。輪數15もおおすぎる。13のchattraをつけた例はあるが大規模ストゥーパではなく，靑銅や眞鍮製の小型のストゥーパモデルであり，そうなると時代も本論でのべた後期，つまり7世紀以降である。このような數値をみると，道藥もあるいは漢地の塔を基本にしたもののようである。道藥傳がどんなものだったかはわからないが，カニシカストゥーパに關する部分からは道藥自身の著作というより他人の編纂物だった可能性もある。

道藥や宋雲の記述をみると，

王更廣塔基三百餘步。[道藥傳云。三百九十步。]

從地構木。始得齊等。[道藥傳云。其高三丈。]

悉用文石爲階砌櫨拱。上構衆木。凡十三級。上有鐵柱。高三百尺。金盤十三重。合去地七百尺。[道藥傳云。鐵柱八十八尺。八十圍。金盤十五重。去地六十三丈二尺。]

施功旣訖。糞塔如初。在大塔南三百步。

王はさらに塔の基礎を廣めること三百餘步。[道藥傳はいう，三百九十步と。]地より木を構えて始めて（高さを）等しくすることができた。[道藥傳にいう，その高さは三丈と。]悉く彫刻した石で階段や斗組みをつくった。上は多くの木を構築して，すべて十三重とした。上には鐵柱がある。高さは三百尺。金盤は十三重。あわせて地上から七百尺であった。[道藥傳はいう，鐵柱は八十八尺で，八十圍。金盤は十五重。地上から六十三丈二尺であると。]造營はおわったけれども，（こどもが造った）牛糞の塔はも

とのままで，大塔の南三百歩にあった。

一體ガンダーラにおけるストゥーパで木材架構などあったものではない。實際のカニシカストゥーパを目のあたりにしていたら絶體にありえない記述である。洛陽伽藍記や道藥傳の記事に木造ストゥーパを認めるのならば，行ったことがない楊衒之が魏の佛塔をみた眼で編集した責任がここにもあることになる。

從來「上構衆木」は道藥傳の文とし，「從地構木」は慧生行傳と宋雲家記をもとにした楊衒之の文とする。これはストゥーパが木造だといっているのではなく，建設過程で木材で足場を架けたというのである。從來の校定者たちは，「三百九十步。」「其高三丈。悉用文石爲階砌櫨拱。上構衆木。凡十三級。」「鐵柱八十八尺。八十圍。金盤十五重。去地六十三丈二尺。」を道藥からの引用としているが，楊衒之が引用したのは數値だけであろう。「悉用文石爲階砌櫨拱。上構衆木。凡十三級。」は楊衒之の文である。上引では道藥の文を［ ］に入れた。したがって楊の大意は，「王は塔基のおおきさを 300 步にまし，地上から木材を架設してやっと冀塔と同じ高さにできた。階段や斗拱はみな彫刻した石で造り，ストゥーパの上部は木をたくさんに架構していって總 13 重のストゥーパとし，上には高さ 300 尺の鐵柱に，傘蓋を 13 つけ，總高 700 尺であった」となる。「從地構木」は「地上から木材を架設した」ことであるから，ストゥーパ自體を材木で造ったわけではない。「上構衆木」もストゥーパ全體が木造であるとする根據にはならない。「從地構木」「上構衆木」ともに足場を木でつくったことである。「從地構木」はストゥーパ本體を造るために，また「上構衆木」は傘蓋をあげるためやそれらを架設するなど，上部を造るのに足場を材木で組んだのである。階段や斗拱，とくに斗拱などをことごとく文石でもって造ったというのだから，ほかの構造が木造というのはなじまない。用材は石，足場が木材であり，ストゥーパ全體は石造である。ガンダーラのストゥーパがみな石造りであることを認めているのが玄奘である。大唐西域記は「周小窣堵波。更建石窣堵波。」といい，ストゥーパが石造であったことを明瞭にしている。道藥や宋雲で塔は木造，玄奘は石造とあるから，塔は木造から石造に變ったというのははなはだしい誤解である。

魏書小月氏國傳では高さが 800 尺，周圍が 150 步とするから，この高さは總高であろうが，高さ，周圍ともうえのどの所傳とも異なっている。ところが同じ魏書でも乾陀國傳では高さが 700 尺，周圍が 300 步で，洛陽伽藍記と同じである。それはそのはずで，魏書西域傳の乾陀國傳を含むこの部分の列國は慧生行傳の引用であり，それはまた洛陽伽藍記の宋雲行歷記の元資料となっていたからである。しかし小月氏傳の情報源はわからない。

以上法顯傳を除くと，カニシカ王塔に關する 5－6 世紀の資料は，道藥傳，宋雲の記事，小月氏傳の 3 種類あるが，だいたい主體部の高さは共通している。相輪の高さをこれに加味したストゥーパのたちあがりをみると，その比率はガンダーラのストゥーパとして適切

であるが，相輪のありかたや基壇の層數などはガンダーラのストゥーパとしては異常であって，漢地の佛塔を彷彿とさせるものがあり，實情を傳えたものとしては信賴しかねる。

ついで7世紀はじめの，大唐西域記以下玄奘に基づく所傳は，5，6世紀の資料にあらわれる數値と實に著しい違いがある。大唐西域記は總高を記さないが，「このように高さを增して400尺をこえた。そびえたつその基部は，周圍が1.5里（＝2700尺），基壇5層で，高150尺。…またその上にさらに25層の金銅の相輪をたてた」。高田（1955：4）は，「基址所峙。周一里半。層基五級。高一百五十尺。方乃得覆小窣堵波」の「基址所峙」を「一劃をなす塔地の周のことであったと解することも妨げない」として齒切れがわるいが，「周一里半。層基五級。高一百五十尺。方乃得覆小窣堵波」と續くのであるから，基壇部のさまをいったものである。「基」を「其」と誤讀したのであろう。ストゥーパ地區全體のことをいっているとは解せない。一邊が大體675尺というすさまじいおおきさ，ひろさであったから「所峙」である。なお高田が「址」ではなく「趾」とするのは京都帝國大學文科大學叢書本によったからである。大唐西域記で記していない總高について，續高僧傳の玄奘傳では總高を500餘尺とし，釋迦方志では，「または，40層というのは總高550尺のことである，という」としている。續高僧傳と釋迦方志とはいうまでもなく道宣の撰述で，かれは大唐西域記と慈恩傳を基にしてその玄奘傳と遺迹篇をそれぞれ著したから多分數値も玄奘に依った。そうすると，玄奘のカニシカ王塔に關する所傳は，全高が550尺ほど，基壇は一邊は675尺，高さ150尺で5重，伏鉢と圓胴部はあわせて高さ250尺以上（400尺－150尺），相輪が25層という規模である。そのほか法苑珠林卷38（大正53：589a）や佛祖統紀卷32（大正49：315a）にも記載があるが，それらは洛陽伽藍紀や大唐西域記から引用したものであるからふれない。

以上にあげた諸資料の數値を表にすると次のとおりである。

			基壇部			相輪部	
	伏鉢までの高さ	總高	［高	周	層］	［相輪數	鐵柱高］
法顯傳	400＋尺						
道藥傳	414(?)	632尺	30尺	390步		15重	188(?)
宋雲	400	700		300＋	13級	13重	300尺
小月氏國傳		800		350			
乾陀國傳		700		300			
西域記	400＋		150	540	5	25	
慈恩傳	400		150	540		25	
續高僧傳		500＋		540		25	
釋迦方志		550(40層)		540		25	

道藥を450年ころ，宋雲を520年，魏書の小月氏國傳を470年以前のことだとすると，

道藥，宋雲，魏書の數値は總高だけみても，632，700，800尺とおおいに變っている。これだけ大きなストゥーパの規模で70年ほどの間に三變したとはおもえない。洛陽伽藍記は「雀離浮圖は創建してから三回火災にあったが，王が修建してもとどおりにした」とのべている。ストゥーパの修復や增廣は考古學上きわめて頻繁にみられ，最初所建の狀態から最終段階までかなり變化することもよくしられている。Shah-ji-ki Dheri もそのひとつであったが，元通りに修復されたというにしては數値はあまりに違い過ぎる。漢地の佛塔を下敷きにした記述があることもいまやあきらかである。この點については大唐西域記も金銅相輪などとし，しかも25重とは想像を絕する數である。

しかしここに注意せざるを得ないのは基壇の周圍のおおきさである。それは道藥が390歩，宋雲や慧生（魏書乾陀國傳）が300歩，魏書小月氏國傳が350歩で，300－390歩の間を出ないのに對し，大唐西域記が540歩（＝1.5里）とおおきな開きがある點である。これに加えて基壇の高さも30尺から150尺におおきくかわっている。30尺が130尺の誤りであったとしても，その差は尺度の實長の變化をはるかに越えておおきい。行歷僧が行歷當時のストゥーパをカニシカが造ったストゥーパそのものとおもったとすれば，すくなくともこの基壇まわりのおおきな違いだけは本論でのべた展開とかかわりそうである。つまり，基壇のちがいがここに數値の差としてあらわれたとみれば，玄奘時代にはすでに方形ストゥーパから十字形ストゥーパへと變貌していたかもしれない。しかしこの結論に都合のわるいのはストゥーパの總高が低くなった點である。この低い高さを記すのは大唐西域記や慈恩傳をもとに道宣が編集した續高僧傳や釋迦方志だけで，元になった大唐西域記や慈恩傳には總高を記さない。玄奘のカニシカ大塔に關する觀察が實は大塔の上部構造に言及せず，基壇まわりだけに集中している理由を，「初至此國。適遭火災。當見營搆。尙未成功」とあるように，玄奘滯在中の大塔が修復中であった事實に求めるなら，大唐西域記に總高を記さないわけは說明ができる。玄奘のとき總高はわからなかったのであるから，都合のわるい要素のひとつは消えるけれども，この場合，續高僧傳や釋迦方志の總高は玄奘資料によったものではないことになる。その出どころはいまのところ不詳である。

最後に行歷僧たちが實際にみたカニシカストゥーパについて記しておこう。カニシカ塔が各時代を通じて壯大なものであったことだけは事實である。法顯傳はさきに記したように「凡そ經見してきた塔廟で，壯麗威嚴なること，これと比較できるものはまったくない」とし，洛陽伽藍記は「塔內の佛事はことごとく金や玉ででき，千變萬化して筆舌に盡しがたく，朝日がでると相輪の金盤がかがやき，微風がわたると寶鐸が和して鳴る。西域の浮圖では第一等のものである。」と。さらに續高僧傳卷4の玄奘傳は，洛陽伽藍記にはない宋雲家記や慧生行傳に基づいたとおもわれる記事をのせて（大正50：448c），「元魏靈太后胡氏奉信情深。遣沙門道生等賚大幡長七百尺。往彼掛之。脚纔及地。卽斯塔也」と。七百尺

の幡をカニシカ塔に掛けたところ，裾がやっと地面につくかつかないかだといい，これに基づけば6世紀はじめのカニシカ塔の實高が七百尺だとわかる。しかし佛祖統紀巻32（大正49：315a）は，「東至健駄羅」の注で，「大塔高五百尺。元魏胡太后遣使持大幡五百尺。往掛之。脚纔及地。」として玄奘傳を引用しているが，七百尺をから五百尺と入れ替えた。これでは幡の長さから當時の大塔の實際の高さを求めるのも無駄である。

大唐西域記はつぎのように記している。

> 大窣堵波東面石階南。鏤作二窣堵波。一高三尺。一高五尺。規模形狀如大窣堵波。又作兩軀佛像。一高四尺。一高六尺。擬菩提樹下加趺坐像。日光照燭。金色晃耀。陰影漸移。石文青紺。...大窣堵波石階南面。有畫佛像。高一丈六尺。自胸以上分現兩身。從胸已下合爲一體。...大窣堵波西南百步。有白石佛像。高一丈八尺。北面而立。...大窣堵波左右。小窣堵波魚鱗百數。...此窣堵波者。如來懸記。七燒七立。佛法方盡。土俗記曰。成壞已三。初至此國。適遭火災。當見營搆。尙未成功。

これは玄奘がみたカニシカストゥーパの實情である。つまりカニシカ塔の東面の石の階段の南側はつぎのごときありさまであった。（1）大塔の形狀にそったふたつの小ストゥーパが彫られていた。ひとつは高さ3尺，つまり90 cmほど。ひとつは高さ5尺，150 cmほど。（2）菩提樹下に結跏扶坐したふたつの佛坐像の彫刻があった。一體は高さ4尺，120 cmほど，もうひとつは高さ6尺で190 cmほど。石文青紺というからにはいまみるような青黑いschistの彫像であり，その言い傳えとして金の蟻がストゥーパの石壁を囓って彫刻し，金沙の糞をしてつくったと，その由來をしるしているから，佛像は金色をしていたのである。（2）のようにストゥーパの壁面に佛像を彫刻するのは通常みられるのであるが，（1）のようなストゥーパを彫刻する例をしらない。さらに「大塔の石の階段の南面」には，胸から上がふたつに分岐した佛像が描かれていた。高さは1丈6尺。「大塔の石の階段の南面」の分身佛像は一丈六尺というからこの佛像はだいたい5 mほどの高さであり，これが本當だとしたら，階段の側面の高さはきわめて高く，ひいては大基壇そのもののがきわめて高かったことがわかってくる。大唐西域記の記述はさらに，この大塔の周圍に小塔が魚の鱗のように立ち，それが百單位の多數であったことを記している。一般にガンダーラの佛寺には大塔の周圍に小塔を多數置いた形式とほとんど置かない形式とがある。Shah-ji-ki Dheriがすくなくとも玄奘時代には前者の形式であったことが，これにより判明する。

注

（1） Amaravatiでは放射壁は發掘時にすでになくなっていた。近代に貯水槽をつくったからである。しかし一部にきわめて分厚い外輪壁が出ている。ストゥーパ遺迹を檢すると，車輪構造

をもたないストゥーパにして外輪壁を備えるストゥーパは存在しないから，Amaravati 大塔は車輪構造をもっていたことになる。以下にのべるように車輪構造は大規模ストゥーパの圓形基壇をいちじるしく高くするために採用された技術であるから，Amaravati 大塔の基壇は Sanchi などのように低いものではなく，かなりの高さがあったとみる。それを證明するのが Amaravati 出土の石灰岩パネルに描かれたストゥーパ圖（圖３）である。それをみると基壇とその上の伏鉢に關する高さの比率は１：１とまではいかなくても，きわめてそれにちかい。この比率にそれぞれの直徑を加味すると，基壇は高大になる。Barrett（1954：Fig. 2）はこの大塔を圖上で復原して基壇を低平にえがいているが，これはあきらかに Marshall による Sanchi のストゥーパ復原に影響されたもので，Amaravati はこれではおかしい。また British Museum における The Asahi Gallery of Amaravati Sculpture の開設の際に Knox（1993）が公刊したあらたなカタログも Barrett の復原にしたがっている。

（２） 車輪構造が平面上法輪（Dharmacakra）ににていることからストゥーパのなかにこれをいれることによって Dharma の象徴とみるひとがおおい。あるいは車輪構造によって用材を節約し，あわせて Dharma の象徴ともしたというひともいる。これに關する文獻はあまりにもおおいので引かない。たしかに Nagarjunakonda では基底に煉瓦を組あわせて卍をつくった例がある（Sarkar 1962：Pl. XLV)。しかし Nagarjunakonda はインドにおける車輪構造の最初期ではなく，採用されて２世紀をへているから，平面形の類推から法輪との關聯がかんがえだされ，あらたな意味が賦與され，當初の土木上の意義を喪失してしまったとは考えられる。しかし１－２世紀においては車輪構造はあくまでも高さを無視してはならない。法輪の存在をかんがえるひとは平面だけをみ，立面を考慮していないのである。圓胴形の法輪などあったものではないからである。

（３） On continuing the trenches to the north, furthermore, they both came upon another massive wall running east and west... And the presence yet further to the north inside the mound of a roughly built wall running towards the first at an acute angle to it, would seem to strengthen this assumption. For it is not uncommon to find the central portion of a large stupa intersected by a series of radiating walls intended to strengthen the structure and distribute the pressure of the massive core. (Spooner 1908： 19－20)

（４） Even the definite "floor" of the chamber was not decorated or dressed anywhere except in the very corner where the relic casket stood. Here a little daub of chuna had been laid on, on which the casket had rested, and wherein its outline was found clearly impressed when the casket itself was removed, but the rest of the floor was plain unadorned slab. The relic casket itself, which was found standing upright in the south-west corner of the little chamber...（Spooner 1912： 48－49)

（５） Hargreaves（1911：１）は「北端は foundation まで完全にこわれていた」とする。

（６） Hargreaves（1911：１）は，19.1/2″を19′ 2″とするが，あきらかな間違いである。

（７） The inner edge of the platform is marked by the oblong bases 19′ 2″ x 10″ of four small stucco structures, of which only fragmentary portions of the upper part have been recovered. These show clearly conical forms resembling the finials of small Stupas, and...（Hargreaves 1912： 1）

（８） One large stone from the north main wall was found covered with a thin layer of fine white plaster, and I should be inclined to believe that while the projections and 10 feet 6 inches of the main wall were covered with stucco Dhyani Buddha figures, the real main

wall was covered with a thin layer of plain undecorated plaster. (Hargreaves 1911：14)

(9) これらの寫眞はよくその詳細を知らせるのに，なぜわかりにくい2枚の寫眞しか公刋しなかったか。中心部で出土したという「カニシカ舍利容器」の古さとこのストゥッコ坐佛のあたらしさ（それがLateであることはかれらも記述している）との溝を埋める理由を，發掘者たちはおそらくみいだせなかった。フリーズの細部や坐佛の型式がはっきりわかると都合がわるい。わかりにくい2枚の寫眞でごまかしてしまったのではなかろうか。このことはJ. BarthouxがHaddaの發掘報告に際して，一群の片岩彫刻が出土していたにもかかわらず，ストゥッコ像ばかりを公表したことと同じ轍である。この大ストゥーパを一つの時期とみていたかれらには要するに都合がわるかったのであろう。

(10) ちなみに雀離浮圖というこのストゥーパの名稱に言及するのは洛陽伽藍記だけで，續高僧傳や法苑珠林はこれを襲っている。雀離浮圖の原語ははっきりせず，Pelliot (1934：78－83) はKuchaにあった同名の伽藍をトカラ語で*cäkri（塔，寺院）と復原している。魏書小月氏傳ではこれを百丈浮圖としている。雀離が百丈に對應しているところからみると，そういった意味のことばであるのかもしれないが，專家の檢討をまつ。そのほかの資料ではカニシカ，ないしカニシカ王の塔，大塔，などとし，慧超や悟空はそれぞれ葛諾歌寺，罽賓吒王聖塔寺などとする。またBiruniもKanik Caityaとして言及する。

(11) 洛陽伽藍記諸本に引く道榮は漢魏叢書本では道藥である。道藥は北魏太武帝［424－451］末年に疎勒，懸度，僧伽施へいったひとと釋迦方志遊履篇にある。これはChavannes (1903：422, fn. 1；437) がすでに言ったことであるが，その後注意されていないので記しておく。

*なお圖8，9，11，24－26（上）はBritish Library所藏の寫眞である。

參考文獻

Allchin, F. R. (1968) Archaeology and the Date of Kaniṣka：the Taxila Evidence. *Papers on the Date of Kaniṣka,* ed. A. L. Basham. Leiden, 1968. 4－34.

Barrett, D. (1954) *Sculptures from Amaravati in the British Museum. London.*

Barthoux, J. (1933) *Fouilles de Haḍḍa. Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan* 4. Paris.

Begley, V and R. D. de Puma (1991) *Rome and India：the Ancient Sea Trade.* Madison.

Carl, J. (1959 A) Le monastère bouddhique de Tépé Marandjān. *Mémoires de la Délégation française en Afghanistan* 8. Paris. 7－12.

Carl, J. (1959 B) Le fortin du Saka et le monastère du Guldara. *Mémoires de la Délégation française en Afghanistan* 8. Paris. 13－18.

Chavannes, E. (1903) Voyage de Song Yun dans l'Udyāna et le Gandhāra. *Bulletin de l'Ecole Françcaise d'Extrême-Oreint* 3. 379－441.

Cunningham, A. (1879) Notes on the Gold Coins Found in the Ahin Posh Tope. *Proceedings of the Asiatic Society of Bengal.* Jan. to Dec. 1879. 205－212.

Deo, S. B. and J. P. Joshi (1972) *Pauni Exacavation 1969-70.* Nagpur.

Dobbins, K. W. (1971) *The Stupa and Vihara of Knishika I.* Calcutta.

Errington, E. (1987) Tahkāl：The Nineteenth-Century Record of Two Lost Gandhāra Sites. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 50 (2). 301－324.

Fischer, R. E. (1989 A) Buddhist Architecturre. *Art and Architecture of Ancient Kashmir, ed.* P. Pal. Bombay. 17－28.

Fischer, R. E. (1989 B) Stone Temple. *Art and Architecture of Ancient Kashmir,* ed. P. Pal. Bombay. 29－40.

Foucher (1901) Notes sur géographie ancienne du Gandhāra. *Bulletin de l'Ecole Françcaise d'Extrême-Oreint* 1. 322 ff.

Fussman, G. (1987) Numismatic and Epigraphic Evidence for the Chronology of Early Gandharan Art. *Investigating Indian Art,* ed. Lobo, W. and M. Yaldiz. Berlin. 67－88.

Fussman, G. et M. Le Berre (1976) *Monuments bouddhiques de la région de Caboul 1. Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan* 22. Paris.

Ghirshman, R. (1946) *Bégram. Recherches archéologiques et historiques sur les kouchans. Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan* 12. Le Caire.

Gupta, S. P. ed. (1985) *Kushana Sculptures from Sanghol (1st-2nd Century A. D.) : A Recent Discovery* 1. New Delhi.

Hargreaves, H. (1911) Excavations at Shah-ji-ki-Dheri. *Annual Report, Archaeological Survey of India, Frontier Circle, 1911-12.* 1-2.

Hargreaves, H. (1914) Excavations at Shāh-jī-kī-Dherī. *Annual Report, Archaeological Survey of India, 1910-11.* 25－32.

Hackin, J. et J. Carl (1936) Recherche archéologique au col de Khair khaneh près de Kābul. *Mémoires de la Délégation française en Afghanistan* 7. Paris.

Huntington, S. L. (1985) *The Art of Ancient India. Buddhist, Hindu, Jain. With Contributions by John C. Huntington.* New York/Tokyo.

IA (1874) The Lanjadibba or Mound at Bhattiprol, Repalli, Taluqa. *Indian Antiquary* 3. 124.

IAR *Indian Archaeology, A Review.*

Kak, R. C. (1933) *Ancient Monuments of Kashmir.* London.

Kashmir (1956) "Kashmir." *Marg* 9 (2). 57－59.

Knox, R. (1992) *Amaravati. Buddhist Sculpture from the Great Stupa.* London.

Konow, S. (1929) *Corpus Inscriptionum Indicarum* 2 (1) : Kharoshṭhī Inscriptions with the exception of those of Aśoka. Calcutta.

Kreitman, N. (1992) Kanishka Casket and Related Designs. *The Crossroads of Asia : Transformation in Image and Symbol in the Art of Ancient Afghanistan and Pakistan,* ed. Errington, E. and J. Cribb. Cambridge. 193－197.

Kuwayama, Sh. (1975) Kāpiśī Begrām III : Renewing its Dating. *Orient* 10 (1974). 57－78.

Kuwayama, Sh. (1974) Excavations at Tapa Skandar : Second Interim Report. *Kyoto University Archaeological Survey in Afghanistan 1972.* Kyoto. 5－13.

Kuwayama, Sh. (1976) The Third Excavation at Tapa Skandar. *Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1974.* Kyoto. 5－15.

Kuwayama, Sh. (1978) The Fourth Excavation at Tapa Skandar. *Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1976.* Kyoto. 5－12.

Kuwayama, Sh. (1987) Literary Evidence for Dating the Colossi in Bamiyan. *Orientalia Iosephi Tucci Memoriae Dicata,* ed. Gnoli, G. and L. Lanciotti. *Serie Orientale Roma* 56 (2). Rome. 703－727.

Kuwayama, Sh. (1989) The Hephthalites in Tokharistan and Northwest India. *Zinbun : Annals*

of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University 24. 89－134. (Also see the Hephthalites in Tokharistan and Gandhara. *Lahore Museum Bulletin* 5 (1) and (2). 1992. (A Reprinted edition of Kuwayama 1989)

Kuwayama, Sh. (1990) The Buddha's Bowl in Gandhara and Relevant Problems. *South Asian Archaeology 1987,* ed. Taddei, M. Rome. 964－971.

Kuwayama, Sh. (1991) The Horizon of Begram Ⅲ and Beyond : A Chronological Interpretation of the Evidence for the Monument in the Kāpiśī-Kabul-Ghazni Region. *East and West* 41 (1－4). 79－120.

Kuwayama, Sh. (forthcoming) An Invisible Import from Imperial Rome Visible in Stupas. Paper to be published as read at the conference, the Crossroads of Asia, held at Madingly Hall, Cambridge, in 1992.

Litvinsky, B. A. and T. I. Zeimal (1971) *Adjina Tepa.* Moskva.

Marshall, J. (1912－13) Excavations at Taxila. *Annual Report, Archaeological Survey of India, 1912-13.* 1－52.

Marshall, J. (1914) Shah-ji-ki-Dheri, *Annual Reprt of the Director-General of Archaeology, Archaeological Survey of India,* Part 1, 1911－12. Calcutta. 11.

Marshall, J. (1918) *A Guide to Taxila.* Calcutta.

Marshall, J. (1921) *A Guide to Taxila,* 2 nd ed. Calcutta.

Marshall, J. (1936) *A Guide to Taxika,* 3 rd ed. Delhi.

Marshall, J. (1951) *Taxila. An Illustrated Account of Archaeological Excavations.* 3 Vols. Cambridge.

Marshall, J. (1960) *A Guide to Taxila,* 4 th ed. Cambridge.

Marshall, J., A. Foucher and N. G. Majumdar (1940) *The Monument of Sāñchi.* 3 Vols. Delhi.

Meunié J. (1942) Shotorak. *Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan* 10. Paris.

Meunié J. (1959) Bégram : Fouille de 1938. *Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan* 8. Paris. 103－106.

Mizuno, S. (ed.) (1962) *Hazar-sum and Fil Khana.* Kyoto.

Mukherjee, B. N. (1964) Shah-ji-ki Dheri Casket Inscription. *British Museum Quarterly* 28 (1－2). 39－46.

Organ, R. M. and A. E. Werner (1964) The Restoration of the Relic Casket from Shāh-jī-kī-Dherī. *The British Museum Quarterly* 28 (1－2). 46－51.

Pal, P. (1975) *Bronze of Kashmir.* Graz.

Pelliot (1934) Tokharien et Kutchéen. *Jounal Asiatique* 1934. 23－106.

Rosenfield, J. M. (1967) *The Dynastic Arts of the Kushans.* Berkeley and Los Angeles.

Sahau, E. (1888) *Al Beruni's India.* 2 Vols. London.

Sahni, D. R. (1915－16) Pre-Muhammadan Monuments of Kashmir. *Annual Report, Archaeological Syrvey of India, 1915-16.* 49－78.

Sarkar, H. (1962) Some Aspects of the Buddhist Monuments at Nagarjunakonda. *Ancient India* 16 (1960). 65－84.

Sinha, B. P. and S. R. Roy (1969) *Vaiśali Excavations 1958-1962.* Patna and Allahabad.

Siudmak, J. (1989) Early Stone and Terracotta Sculpture. *Art and Architecture of Ancient Kashmir,* ed. P. Pal. Bombay. 41－56.

Smith, V. A. (1901) *The Jaina Stupa and Other Antiquities of Mathura.* 1963 Rep. ed. Varanasi and Delhi.

Spooner, D. B. (1908) Excavation at Shah-ji-ki-Dheri. *Annual Report, Archaeological Survey of India, Frontier Circle, for 1907-08.* 17－22.

Spooner, D. B. (1912) Excavations at Shāh-jī-kī-Dherī, *Annual Report, Archaeological Survey of India, 1908-9.* 38－59.

Stein, A. (1900) *Kalhaṇa's Rājataraṅgiṇī.* 2 Vols. Oxford.

Stein, A. (1907) *Ancient Khotan.* 2 Vols. Oxford.

Stein, A. (1912) Excavation at Shah-ji-ki Dheri. *Annual Report of the Archaeological Survey of India, Frontier Circle, 1911-12.* Peshawar. 1－2.

Taddei, M. (1968) Tapa Sardar : First Preliminary Report. *East and West* 18 (1－2). 109－124.

Taddai, M (1984) The Italian Archaeological Mission in Afghanistan : Brief Account of Excavation and Study, 1976－1981. *Studi di storia dell'arte in memoria di Mario Rotili.* Napoli. 41－70.

Taddei, M (1985) Clay Stūpa and Thrones at Tapa Sardar, Ghazni (Afghanistan). *ZINBUN* 20. 17－32.

Toynbee, J. M. C. (1971) *Death and Burial in the Roman World.* London.

Turner, P. (1989) *Roman Coins from India.* London.

Vats, M. S. (1952) *The Gupta Temple at Deogarh. Memoirs of the Archaeological Survey of India* 71. New Delhi.

Warmington, E. H. (1974) *The Commerce between the Roman Empire and India.* 2 nd ed. London and New York.

Wheeler, R. E. M. (1949) Romano-Buddhist Art : An Old Problem Restated. *Antiquity* 23. 4－18.

Wheeler, R. E. M. (1954) *Rome Beyond the Imperial Frontier.* London.

足立 康 (1930 a) 雀離浮圖建築考 (1), 國華 479, 296－306。

足立 康 (1930 b) 雀離浮圖建築考 (2), 國華 480, 309－311。

足立 康 (1930 c) 雀離浮圖建築考 (3), 國華 481, 361－368。

足立 康 (1931) 雀離浮圖建築考 (4), 國華 482, 33－36。

岸本和幸 (1989) シャー＝ジー＝キー＝デリー大ストゥーパの考古學的檢討, 京都女子中學高等學校研究紀要 33, 21－52。

桑山正進 (1974) タキシラ佛寺の伽藍構成, 東方學報 46, 327－354。

桑山正進 (1978) ストゥーパ方形基臺の由來, 足利惇氏教授喜壽記念インド學オリエント學論集。

桑山正進 (1983) 罽賓と佛鉢, 展望—アジアの考古學 (樋口隆康教授退官記念論集), 新潮社, 598－607。

桑山正進 (1990) カーピシー＝ガンダーラ史研究, 京都大學人文科學研究所。

桑山正進編 (1993) 慧超往五天竺國傳研究, 京都大學人文科學研究所。

周 祖謨 (1963) 洛陽伽藍記校釋, 北京。

章 巽 (1977) 大唐西域記, 上海。

高田 修 (1955) カニシュカ大塔及び舍利容器の再檢討：ガンダーラ美術の展開における樣式的指標として, 美術研究 181, 1－24。

田邊勝美 (1987) カニシュカ王と所謂カニシュカ舍利容器：古錢學的考察と新資料の紹介, 佛教藝術 173, 100－120。